



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第229集

与野市

小村田西／小村田／関東

(高関)大宮線、与野大宮大通線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



関東遺跡第1号方形周溝墓



第1号方形周溝墓出土土器



同左

序

埼玉県では「新しい発展と豊かな生活を支える基盤づくり」の一環として、多様化する県民の生活圏の拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化を図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視しながら、体系的な道路交通網の整備を積極的に行っております。とくに「県内1時間道路網構想」の推進をめざし、国道などの幹線道路網の整備に加え、高速道路網の建設が進められてきております。

首都高速道路大宮線は、都心と直接結ばれる埼玉県の大動脈であるとともに、さいたま新都心の完成時には、アクセス道路として中心的な役割を果たすことが期待されております。本年5月には戸田市美女木から与野市円阿弥間を結ぶ高速埼玉大宮線が開通し、本県の中核都市圏と首都圏主要地が高速道路で直結されることとなり、交通渋滞の緩和や都市機能の利便性の向上が図られました。

21世紀を間近に控え、さいたま新都心は、社会・経済・文化などの高次都市機能の集積を図り、安全で快適な魅力あるまちづくりが進められることが期待されております。

今回の道路建設予定地となった与野市内には、小村田西遺跡、小村田遺跡、関東遺跡の3遺跡が所在しており、その取扱いについては関係諸機関が慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は、当事業団が埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、

首都高速道路公団の委託を受け実施いたしました。

この発掘調査によって先土器時代から江戸時代に至るまでの多くの貴重な埋蔵文化財が発見されました。とりわけ、関東遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓群が発見され、赤く装飾された壺や台付鉢などの土器が出土し、当時の葬送儀礼の一端が明らかにされました。与野市内には、弥生時代後期の環濠集落として著名な中里前原遺跡や方形周溝墓が発見された上太寺遺跡などをはじめ、弥生時代から古墳時代の遺跡が数多く分布しており、今回の調査により当時の集落と墓域のあり方を考える上で重要な考古学的情報を得ることができました。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財保護の基礎資料として、また、学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、発掘調査から本書の上梓に至るまで御指導、御協力をいただきました埼玉県生涯学習部文化財保護課をはじめ、首都高速道路公団、与野市教育委員会、並びに地元関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成10年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県与野市に所在する小村田西遺跡、小村田遺跡、関東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
 - 小村田西遺跡（KMR TNS）
与野市本町西5丁目5番地他
平成8年5月8日付け 教文第2-33号
 - 小村田遺跡（KMRT）
与野市本町東6丁目14番地他
平成8年5月8日付け 教文第2-34号
 - 関東遺跡（KNTU）
与野市上落合996番地他
平成8年5月8日付け 教文第2-35号
3. 発掘調査は、高速大宮線、与野大宮大通線の建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、首都高速道路公団の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち、発掘調査については西井幸雄、大谷徹が担当し、平成8年4月1日から平成8年9月30日まで実施した。整理報告書作成事業は大谷が担当し、平成10年5月1日から平成10年9月30日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量及び航空写真撮影は、株式会社パスコに、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真撮影は、西井、大谷が行い、遺物の写真撮影は大谷が行った。
7. 出土品の整理及び図版の作成は大谷が行った。
8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、V-2を西井、それ以外は大谷が行った。
9. 本書の編集は、大谷があたった。
10. 本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
11. 本書の作成にあたり、下記の方々よりご教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）
市丸靖子、笹森健一、笹森紀己子、田代 治、秦野昌明、山形洋一
与野市教育委員会、大宮市教育委員会

凡 例

1. 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位指示は、すべて座標北をあらわす。
2. グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の枕番号である。
3. 全体図等に記した遺構の略号は以下のとおりである。
SC=集石土壇 SD=溝
SK=土壇 SR=方形周溝墓
4. 遺構の名称は原則として調査時の名称を使用した。遺構名称を変更したものは、以下のとおりである。
関東遺跡 SJ1⇒SK28
5. 挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構図
先土器時代遺物分布図…1/40
集石土壇…1/30
土壇・ピット…1/60
溝…1/250
溝土層断面図…1/60
方形周溝墓…1/100
方形周溝墓土層断面図…1/50
遺物
先土器時代の石器…4/5
縄文時代の土器…1/3
縄文時代の石器…2/3
土師器・陶磁器・瓦…1/4
石製品・土製品・金属器…1/3
その他のものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度表記して示している。
6. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
7. 遺物観察表の記載は次のとおりである。
法量の（ ）付き数値は推定値を表し、単位はcmである。
胎土は肉眼で観察される範囲の混入物を記載した。
A…石英、B…白色粒子、C…白色針状物質、D…長石、E…角閃石、F…赤色粒子、G…黒色粒子、H…雲母、I…片岩、J…砂粒である。
焼成はA良好、B普通、C不良の3ランクに分けた。
残存率は各部位に対するおおよその数値で、厳密なものではない。
8. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の1/50000の地形図を使用した。
9. 文中の引用文献は、(著者 発行年)の順で表現し、参考文献とともに巻末にその一覧を掲載した。

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	V 関東遺跡の調査	21
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 遺跡の概要	21
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 先土器時代	24
(1) 発掘調査	2	(1) 概略	24
(2) 整理・報告書作成	2	(2) 層位	25
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(3) 石器集中及び単独出土	27
II 遺跡群の立地と環境	4	(4) 出土石器	29
III 小村田西遺跡の調査	9	3. 縄文時代	30
1. 遺跡の概要	9	(1) 土壌	30
2. 縄文時代	11	(2) グリッド出土遺物	31
3. 近世	12	4. 古墳時代	32
(1) 土壌	12	(1) 概略	32
(2) 溝	12	(2) 方形周溝墓	33
(3) グリッド出土遺物	16	5. 近世	52
IV 小村田遺跡の調査	17	(1) 土壌	52
1. 遺跡の概要	17	(2) 溝	59
2. 縄文時代	18	(3) ピット	61
3. 近世	18	VI 調査のまとめ	62
(1) 土壌	18	関東遺跡における方形周溝墓の様相	62
(2) 溝	20		

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形図	4	第33図	第1号方形周溝墓遺物分布図	36
第2図	周辺の遺跡分布図	5	第34図	第1号方形周溝墓遺物出土状況図(1)	37
第3図	遺跡群周辺の地形図	7	第35図	第1号方形周溝墓遺物出土状況図(2)	38
第4図	小村田西・小村田遺跡周辺地形図	8	第36図	第1・2号方形周溝墓遺物分布図	39
第5図	基本土層	9	第37図	第1号方形周溝墓出土遺物(1)	40
第6図	小村田西遺跡全測図	10	第38図	第1号方形周溝墓出土遺物(2)	41
第7図	グリッド出土遺物	11	第39図	第2号方形周溝墓	42
第8図	第1号土壇	12	第40図	第2号方形周溝墓土層断面	43
第9図	第1・4号溝	13	第41図	第2号方形周溝墓出土遺物分布図	44
第10図	第1・2・3号溝	14	第42図	第2号方形周溝墓出土遺物	45
第11図	第1号溝土橋	15	第43図	第3・4号方形周溝墓・主体部	46
第12図	第1号溝出土遺物	15	第44図	第3・4号方形周溝墓土層断面	47
第13図	グリッド出土遺物	16	第45図	第3号方形周溝墓出土遺物	47
第14図	小村田遺跡全測図	17	第46図	第5・6号方形周溝墓・出土遺物	48
第15図	第1号集石土壇・出土遺物	18	第47図	第6号方形周溝墓主体部	49
第16図	第1号土壇	18	第48図	第7号方形周溝墓	50
第17図	第1号溝	19	第49図	第8・9号方形周溝墓	51
第18図	第2号溝	20	第50図	第8号方形周溝墓主体部	52
第19図	第2号溝出土遺物	20	第51図	土壇(1)	53
第20図	関東遺跡周辺地形図	22	第52図	土壇(2)	54
第21図	関東遺跡全測図	23	第53図	土壇(3)	55
第22図	先土器時代の調査区	24	第54図	土壇出土遺物	58
第23図	土層断面図	25	第55図	第1・2号溝	60
第24図	第1号石器集中ほか	26	第56図	ピット	61
第25図	G11-1グリッド出土石器	27	第57図	方形周溝墓と出土土器	63
第26図	第1号石器集中出土石器	27	第58図	方形周溝墓の方台部規模	63
第27図	出土石器	28	第59図	方形周溝墓の面積比較	64
第28図	第28・29号土壇	30	第60図	方形周溝墓の主軸方位	64
第29図	第28号土壇出土遺物	31	第61図	方形周溝墓の拡張例(1)	67
第30図	グリッド出土遺物	32	第62図	方形周溝墓の拡張例(2)	68
第31図	方形周溝墓分布図	33			
第32図	第1号方形周溝墓	34・35			

表 目 次

第1表	石器観察表……………	29	第5表	第6号方形周溝墓遺物観察表……………	49
第2表	第1号方形周溝墓遺物観察表……………	41	第6表	土壙一覧表……………	59
第3表	第2号方形周溝墓遺物観察表……………	45	第7表	ピット一覧表……………	61
第4表	第3号方形周溝墓遺物観察表……………	47	第8表	方形周溝墓計測表……………	65

図 版 目 次

図版1	遺跡群遠景（南西から） 小村田西遺跡全景（東から）		図版11	方形周溝墓群全景（西半部） 方形周溝墓群全景（東半部）	
図版2	第1号土壙 第1号溝（調査区北側） 第1号溝（調査区南側）		図版12	方形周溝墓群全景（東から） 第1号方形周溝墓	
図版3	第1号溝土層断面（A-A'） 第1・2号溝土層断面（D-D'） 第1・4号溝土層断面（C-C'）		図版13	第1号方形周溝墓遺物出土状況（西から） 第1号方形周溝墓遺物出土状況（南から）	
図版4	グリッド出土遺物（第7図1～9） グリッド出土遺物（第7図10～23）		図版14	第1号方形周溝墓西溝遺物出土状況 第1号方形周溝墓西溝土層断面（A側）	
図版5	第1号溝出土遺物（第12図3） 第1号溝出土遺物（第12図1・2・4） 第1号溝・グリッド出土遺物（第12図6～8、第13図1・2）		図版15	第1号方形周溝墓遺物出土状況（1） 第1号方形周溝墓遺物出土状況（2） 第1号方形周溝墓遺物出土状況（3）	
図版6	第1号集石土壙（上面） 第1号集石土壙（下面） 第1号土壙		図版16	第2号方形周溝墓 第2号方形周溝墓（東から）	
図版7	第1号溝 第1号溝土層断面（A-A'）		図版17	第2号方形周溝墓北溝 第2号方形周溝墓溝中土壙 第2号方形周溝墓溝中土壙遺物出土状況	
図版8	第1号溝土層断面（C-C'） 第2号溝 第1号集石土壙出土遺物（第15図1・2）		図版18	第3～6号方形周溝墓 第3・4号方形周溝墓（南から）	
図版9	関東遺跡全景 関東遺跡全景（東から）		図版19	第4号方形周溝墓（東から） 第4号方形周溝墓主体部 第5・6号方形周溝墓（南から）	
図版10	石器集中1（G9グリッド） 石器出土状況（G11-1グリッド） 第28号土壙		図版20	第5号方形周溝墓（東から） 第6号方形周溝墓（東から） 第6号方形周溝墓主体部	
			図版21	第7号方形周溝墓（東から） 第8・9号方形周溝墓（南から） 第8・9号方形周溝墓（東から）	

図版22 第8・9号方形周溝墓（西から）
第8号方形周溝墓（南から）
第8号方形周溝墓主体部

図版23 第9号方形周溝墓（南から）
第8・9号方形周溝墓共有溝
第9号方形周溝墓東溝

図版24 第1号土壙 第2号土壙 第3号土壙
第4号土壙 第5号土壙 第6号土壙
第7号土壙 第8号土壙

図版25 第9号土壙 第10・26号土壙 第11号土壙
第12号土壙 第13号土壙 第14号土壙
第15号土壙 第16・17号土壙

図版26 第17号土壙 第18・19号土壙 第20号土壙
第21・22・23号土壙 第21号土壙
第22号土壙 第23号土壙 第24号土壙

図版27 出土石器（第26・27図1～8）
第28号土壙出土遺物（第29図1～14）

図版28 グリッド出土遺物（第30図1～20）
グリッド出土遺物（第30図21～38）

図版29 第1号方形周溝墓出土遺物（第37図1）
第1号方形周溝墓出土遺物（第38図4）
第1号方形周溝墓出土遺物（第37図2）
第1号方形周溝墓出土遺物（同左 胴部穿孔）
第1号方形周溝墓出土遺物（同上 底部穿孔）
第3号方形周溝墓出土遺物（第45図1・2）

図版30 第1号方形周溝墓出土遺物（第37図3）
第1号方形周溝墓出土遺物（第38図5）
第2号方形周溝墓出土遺物（第42図1・2）

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では「新しい発展と豊かな生活を支える基盤づくり」の一環として、多様化する県民の生活圏の拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化などを図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視した、道路交通網の整備を積極的に進めているところである。とくに「県内1時間道路網構想」をめざし、周辺都県との連携を高めるための高速道路網の建設が進められている。首都高速道路大宮線は、都心と直接結ばれる埼玉県の大動脈であるとともに、さいたま新都心の完成時には、アクセス道路の中心的な役割を果たすことが期待されているものである。県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成6年10月5日付け首公一建調査第3号で、首都高速道路公団第一建設部長より、高速大宮線建設工事事業地内における埋蔵文化財の所在及びその取扱いについての照会を受けた。文化財保護課では、試掘調査の結果、平成6年11月11日付け教文第771号で、小村田西遺跡・小村田遺跡について、また平成8年2月16日付け教文第1196号で、関東遺跡について次のような回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

遺跡名	種別	時代	所在地
小村田西遺跡	集落跡	縄文	与野市本町西5-5他
小村田遺跡	集落跡	縄文	与野市本町東6-14他
関東遺跡	散布地	縄文・中世	与野市上落合996番地他

2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存するのが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。なお発掘調査の実施については、当課と別途協議願います。

その後、首都高速道路公団と文化財保護課との間で取扱いについて協議を行ったが、計画変更による現状保存が困難であることから、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査の実施機関である(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、首都高速道路公団、文化財保護課の三者で工事日程や調査計画などについて協議を行い、平成8年4月1日から平成8年9月30日までの期間で、発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

小村田西遺跡 平成8年5月8日付け教文第2-33号
小村田遺跡 平成8年5月8日付け教文第2-34号
関東遺跡 平成8年5月8日付け教文第2-35号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成8年4月1日から平成8年9月30日までの6か月間にわたって、小村田西、小村田、関東の3遺跡の発掘調査を実施した。

調査対象面積は、小村田西遺跡が3,500㎡、小村田遺跡が1,500㎡、関東遺跡が2,500㎡である。

4月上旬。首都高速道路第1建設部調査課担当者として現地にて発掘調査の工程について打ち合わせを行う。用地内の調査範囲に残っている工場跡地等のコンクリート基礎の撤去及び水道・ガス管等の地下埋設物の取扱いについて協議を行い、関東、小村田、小村田西遺跡の順に調査を実施することとなった。

4月中旬。現場事務所のプレハブ設置を行い、補助員募集など本格的な発掘に向けて、準備を行う。

4月下旬。関東遺跡から重機によってコンクリート基礎の撤去及び表土掘削を開始する。調査地点は交通量の多い道路に面した市街地にあたるため、表土除去に伴う騒音や振動及び作業の安全性に留意しながら作業を実施した。

5月上旬。補助員による遺構の精査作業を開始し、方形周溝墓、土壇、溝などが確認された。遺構の調査に着手し、第1号方形周溝墓から赤彩を施した装飾壺や台付鉢などが出土した。また、縄文時代後期の竪穴状遺構（第28号土壇）からは土器片や石鏃が検出された。これらの遺物の取り上げ、遺構の土層断面図作成、写真撮影、平面図作成等を順次進めた。

5月中旬。小村田西、小村田遺跡の地下埋設物の除去作業が完了したため、並行して小村田西遺跡のコンクリート基礎の撤去・表土除去作業を開始した。

6月下旬。関東遺跡の方形周溝墓等の調査がほぼ終了したため、飛行船を用いて方形周溝墓群の空中撮影を実施した。

7月上旬。先土器時代の調査に着手する。調査区中央のG-9グリッドを中心に石器集中が確認され、剥片類が少量出土した。

7月下旬。関東遺跡の調査が終了し、調査区の埋め戻しを重機によって行う。並行して小村田遺跡の防塵ネット付設工事を実施し、重機により表土除去作業を開始した。

8月上旬。小村田遺跡の遺構の調査を開始する。検出遺構は縄文時代の集石土壇1基と近世の土壇1基、溝2条であった。

8月中旬。遺物の取り上げ、土層断面図・平面図等を作成し、調査を終了した。調査区を埋め戻し、器材棟及び防塵ネットの撤去を行う。

8月下旬。小村田西遺跡の遺構の調査に本格的に着手する。第1号溝からは近世陶磁器類が出土した。また調査区西側では先土器時代の調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。

9月上旬。小村田西遺跡の調査がほぼ終了に向かう。空撮のための清掃を行い、航空写真撮影を行う。中旬までには平面図作成等の作業をすべて終了した。

9月下旬。小村田西遺跡の調査区を埋め戻し、事務所等の設備の撤去を行い、発掘調査事業の全行程を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理作業は、平成10年5月1日から平成10年9月30日の5か月間にわたって実施した。

5月、出土遺物の水洗い・注記・接合作業を行った。同時に図面、写真類の整理を行った。

6～7月、遺構の第2原図の作成を行い、トレースに着手した。遺物は接合・復元後、時期ごとに分類して拓本、実測作業を行った。

8月、遺構図の版組作業、遺物のトレース作業、遺物の写真撮影を行った。また原稿の執筆に着手した。

9月、遺物の版組、写真図版作成に並行して、原稿執筆・割付の作成を行った。入稿後校正作業を行い、11月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成8年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	吉川 國男
常務理事兼 管理部長	稲葉 文夫
理事兼 調査部長	小川 良祐
管理部	
庶務課長	依田 透
主査	西沢 信行
主任	長滝 美智子
主事	菊池 久
専門調査員兼 経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二
調査部	
調査部副部長	高橋 一夫
調査第二課長	大和 修
主任調査員	西井 幸雄
主任調査員	大谷 徹

(2) 整理事業 (平成10年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼 管理部長	鈴木 進
管理部	
庶務課長	金子 隆
主査	田中 裕二
主任	長滝 美智子
主任	腰塚 雄二
専門調査員兼 経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	菊池 久
資料部	
資料部長	増田 逸朗
主幹兼 資料部副部長	小久保 徹
資料整理第二課長	市川 修
主任調査員	大谷 徹

II 遺跡群の立地と環境

今回報告する小村田西遺跡、小村田遺跡、関東遺跡の3遺跡は、いずれも与野市北部の市街地に所在している。調査前は工場や住宅が立ち並び、遺構・遺物の残存状況は必ずしも良好ではなかった。

遺跡の所在する与野市は埼玉県の南東部に位置し、浦和市、大宮市とともに本県の中核都市圏を形成しており、21世紀に向け、さいたま新都心を中心に都市整備が進められている。

地形的には市域の大部分が大宮台地上に立地している(第1図)。大宮台地は西に荒川低地を、東に中川低地を望む南北に細長い台地で、台地南東部は小河川によって開析され、小台地に分かれている。各々の台地は西から指扇支台、与野支台、浦和・大宮支台、大和田片柳支台、蓮田支台、岩槻支台、白岡支台、慈恩寺支台、鳩ヶ谷支台と呼ばれ、このうち与野市の大部分は与野支台上に位置し、一部は浦和・大宮支台西縁部に属している。また、両支台の間を南北に貫流する鴻沼川(霧敷川)によって形成された鴻沼低地が、市域のほぼ中央部に広がる。

小村田西遺跡と小村田遺跡は、与野支台中央部の東

縁に位置する。現況では比較的平坦な地形を呈しているが、明治時代の陸軍迅速図等から旧地形を復元すると、周辺では最高所にあたる氷川神社の北側に東西方向に小支谷が入り込み、この小支谷に続く緩斜面部に両遺跡とも立地していることが読み取れる。

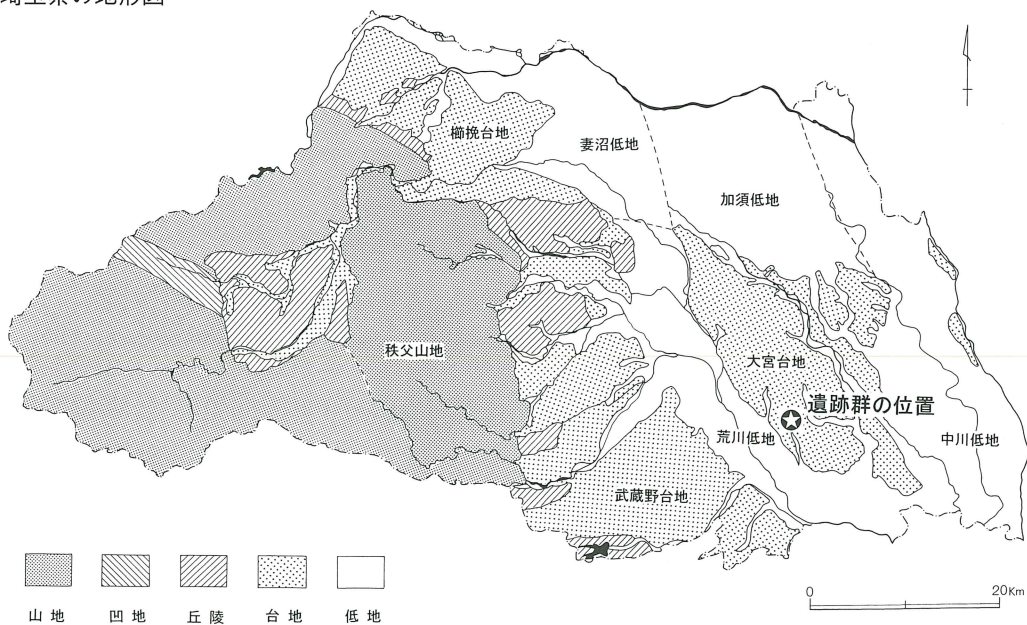
関東遺跡は、鴻沼川によって開析された低地を望む浦和・大宮支台の西縁部に位置し、鴻沼川流域の遺跡としては大宮市B-70号遺跡、B-67号遺跡等とともに上流域に分布している。

次に歴史的環境を周辺の遺跡分布図でみることにする(第2図)。

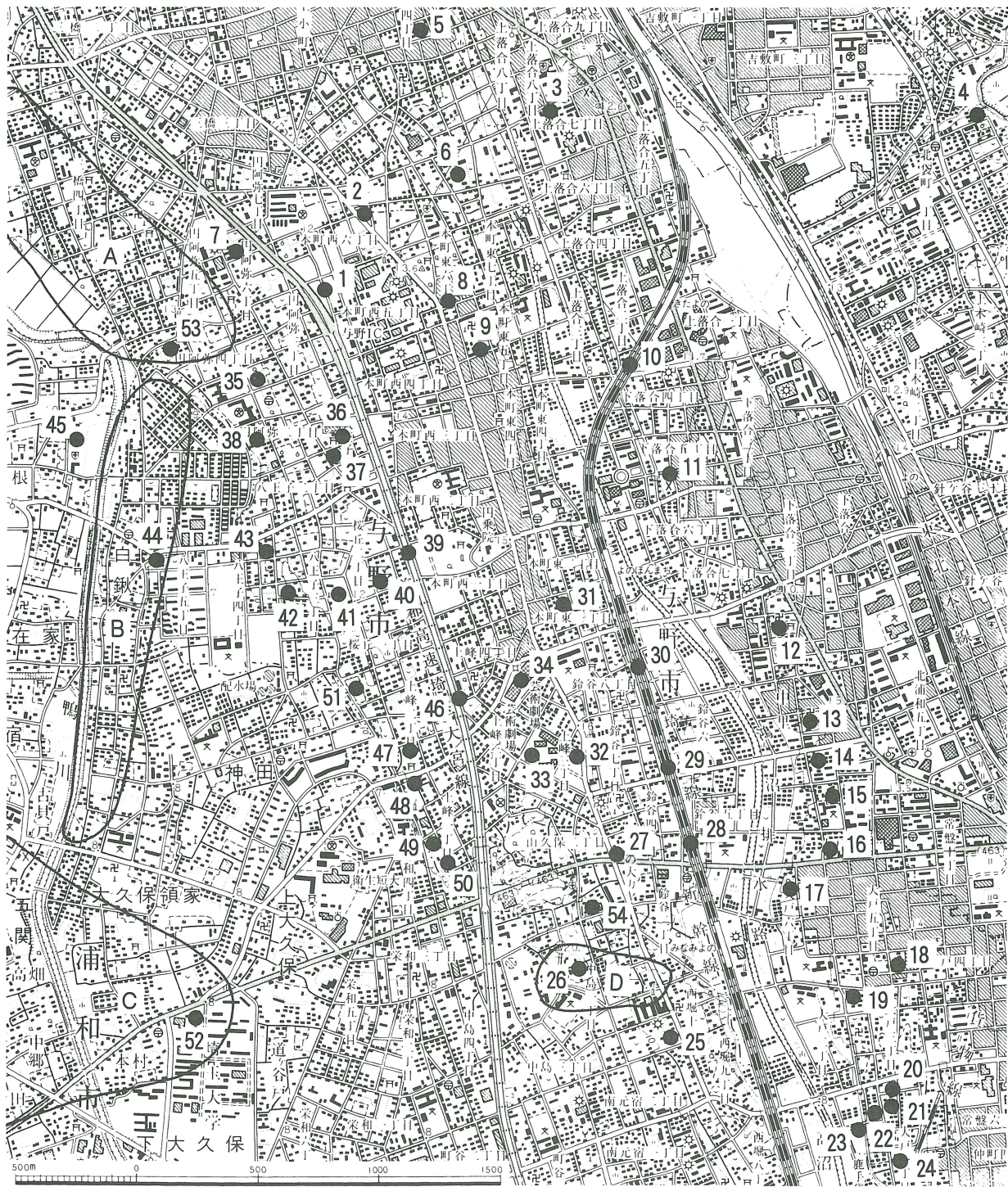
周辺における先土器時代の遺跡は、鴻沼川流域の台地縁辺部を中心に分布が認められ、上太寺遺跡、神明遺跡、札之辻遺跡、小村田東遺跡、関東遺跡等で石器集中が検出されている。また、与野支台西縁部では陣屋1・2号遺跡、内道西遺跡、相野谷1号遺跡等でナイフ形石器、尖頭器、搔器等が採集されている。

縄文時代の遺跡としては、前期の大戸貝塚や円阿弥貝塚で関山・黒浜期の住居跡が調査されている。中期の遺跡は台地縁辺部を中心に分布し、遺跡数も前期に

第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺の遺跡分布図



- 1 小村田西遺跡 2 小村田遺跡 3 関東遺跡 4 北袋遺跡 5 大宮市B-70号遺跡 6 大宮市B-67号遺跡 7 山王東4号遺跡 8 小村田東遺跡 9 与野東遺跡 10 神明遺跡 11 笠間神社遺跡 12 中里宮前2号遺跡 13 二度栗山遺跡 14 中里前原北遺跡 15 中里前原遺跡 16 上太寺遺跡 17 稲荷山遺跡 18 曲庭遺跡 19 大戸氷川神社遺跡 20 大戸貝塚 21 大戸本村4号遺跡 22 南1号遺跡 23 南鴻沼遺跡 24 南3号遺跡 25 日向北遺跡 26 本空遺跡 27 今宮2号遺跡 28 札之辻遺跡 29 矢垂遺跡 30 小井戸遺跡 31 巽遺跡 32 矢垂西遺跡 33 真土2号遺跡 34 大門南遺跡 35 円阿弥貝塚 36 八王子浅間神社遺跡 37 八王子527番地先市道6号線地下遺跡 38 御屋敷山遺跡 39 寺田遺跡 40 与野西遺跡 41 苗塚遺跡 42 八王子前原遺跡 43 八王子前原西遺跡 44 殿ノ前遺跡 45 根切遺跡 46 南上峰遺跡 47 内道西遺跡 48 諏訪坂遺跡 49 陣屋1号遺跡 50 陣屋2号遺跡 51 相野谷1号遺跡 52 本村遺跡 53 西浦1号遺跡 54 今宮1号墳 A 側ヶ谷古墳群 B 白鋤古墳群 C 大久保古墳群 D 中島古墳群

比べ増加する。調査された遺跡には札之辻遺跡、巽遺跡、内道西遺跡、相野谷1号遺跡、御屋敷山遺跡、中里前原遺跡等がある。後期になると遺跡数、遺跡の規模が減少する傾向が窺われ、特に晩期において顕著である。

弥生時代中期の代表的な遺跡には、沖積地に面した与野支台西縁部の内道西遺跡、諏訪坂遺跡がある。このうち諏訪坂遺跡では宮ノ台期の住居跡1軒が検出され、壺、甕、高坏等とともに有孔太型蛤刃・抉入片刃・扁平片刃・小型柱状片刃などの石斧や穂摘具、鉄器等が出土し、鉄器波及期の具体相を示している。このほか鴨川西岸の根切遺跡の包含層中から宮ノ台期の甕形土器が出土しており、低地を望む台地上だけでなく、水田近くの自然堤防上にも集落が進出した状況が窺われる。

弥生時代後期になると鴻沼低地周辺の台地縁辺部にも集落が増加し、中里前原遺跡、中里前原北遺跡、与野東遺跡等の環濠集落の形成がみられ、農耕社会の定着と集落間における緊張関係の発生が指摘されている。浦和・大宮支台の西縁部に立地する中里前原遺跡は、過去の調査で後期の住居跡41軒、方形周溝墓2基、環濠等が検出された。また、北側に隣接する中里前原北遺跡でも同時期の住居跡24軒、方形周溝墓4基、環濠が確認されており、両遺跡を一つにした拠点集落が形成されている。さらに、両遺跡の南側には3基の方形周溝墓が調査された上太寺遺跡が所在する。このうち第2号方形周溝墓の主体部からガラス小玉43点が出土しており、集落内部における有力者の成長を示唆する。また、対岸の与野支台東縁にも当該期の住居跡が50軒検出された札之辻遺跡をはじめ、矢垂遺跡、環濠集落の与野東遺跡等が立地している。

古墳時代の遺跡は、五領期の住居跡が西浦1号遺跡、矢垂遺跡、札之辻遺跡、中里前原遺跡等で検出されている。また、今回調査した関東遺跡では弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭に営まれた方形周溝墓群が確認されたことから、近隣に集落跡の存在が予想され、新たな水田可耕地を求め、谷奥部にまで開発が拡大さ

れていった様子が窺われる。後続する和泉期の遺跡は札之辻遺跡、小井戸遺跡、笠間神社遺跡等で住居跡が確認されているだけで、遺跡数は減少傾向にある。鬼高期の遺跡は大規模な集落は確認されていないが、札之辻遺跡、小井戸遺跡、南上峰遺跡、八王子浅間神社遺跡、小村田東遺跡、与野西遺跡等で住居跡が調査されている。また、与野市八王子と浦和市白楸にまたがる殿ノ前遺跡から初期須恵器の樽形甕と高坏が出土しており、この地が旧入間川を利用した交通の要衝であったことを示している。

古墳の分布は鴨川流域に集中しており、植水古墳群、側ヶ谷戸古墳群、白楸古墳群、大久保古墳群等が所在する。与野市域には、側ヶ谷戸古墳群に属する直径約17mの円墳である西浦1号墳と、浦和中島古墳群に隣接する一辺約20mの終末期方墳、今宮1号墳が確認されているにすぎない。

奈良時代の遺跡は札之辻遺跡のほか、寺田遺跡、上峰遺跡等が調査されている。このうち札之辻遺跡では8世紀前半の住居跡が3軒検出されている。平安時代の遺跡は南上峰遺跡、八王子前原遺跡、曲庭遺跡、矢垂遺跡等が知られ、八王子前原遺跡では「有」・「林」などの墨書土器が出土した。また、八王子1丁目地内から灰釉陶器の短頸壺を利用した蔵骨器が出土しており、仏教文化の浸透を物語っている。

中世以降の遺跡では、矢垂館跡、真土館跡、今宮館跡、小村田館跡等が、鎌倉街道の脇往環である羽根倉道の伝承路沿いに点在している。ほかにも落合陣屋、御屋敷山、新畑陣屋、上峰陣屋等の伝承地が知られているが、時期不詳である。また、鈴谷の妙行寺には与野市最古の年号をもつ正元二年(1260)の板石塔婆が造立されている。

近世には、享保期の新田開発奨励政策により井沢弥惣兵衛が見沼の新田開発に伴い、芝川から高沼代用水路を開削し、高沼(鴻沼低地)の干拓が進められ、大きく景観を変えた。おそらく、小村田西遺跡や小村田遺跡で検出された近世の箱薬研堀なども、当地域の開発史の一端に関わるものと考えられる。

第3図 遺跡群周辺の地形図



第4図 小村田西・小村田遺跡周辺地形図



Ⅲ 小村田西遺跡の調査

1. 遺跡の概要

小村田西遺跡は、JR北与野駅の西方約2.8kmに位置し、与野支台の中央部東縁に立地している。今回の調査は遺跡範囲の西側部分について実施したもので、調査面積は3,500㎡である。

調査対象範囲の中央に与野市立学校給食第二センターが建設されており、この部分は既に遺構等が壊されていることが予想されたため、調査区は便宜的に三区画に分けて調査を実施した。

調査区の地形は、北側調査区の東端部から南側調査区にかけて南北方向に埋没谷が湾入しており、東側に向かって緩やかに傾斜する緩斜面地を形成していた。遺構確認面であるローム面の標高は、調査区西側が最も高く標高13.4mである。また南側調査区は谷頭部が樹枝状に侵食され、谷頭部の中央には湧水点と考えられる土壌状の落ち込みが確認された。なお、この埋没谷は氷川神社北側を東西方向に湾入する小支谷に続くものと推定される。

検出された遺構は、近世以降の所産と考えられる土壇1基、溝4条である。

土壇は西側調査区の平坦部に単独で検出された。平面略円形のもので、覆土中に焼土粒子の混入がみられた。遺物がまったく出土しなかったため、時期を限定することはできないが、覆土の状況から近世以降の所

産と推定される。

溝は北側調査区から南側調査区を縦断するように延びる第1号溝を中心に合計4条が確認された。

第1号溝は、調査区を北西から南東方向に縦断するように延びている。いわゆる箱築研掘で、底面は概ね平坦で、北西から南東に向かって緩やかに傾斜し、北側調査区に土橋状の掘り残し部分が確認された。遺物は近世陶磁器、丸瓦、砥石、銭貨等が少量出土したにすぎない。

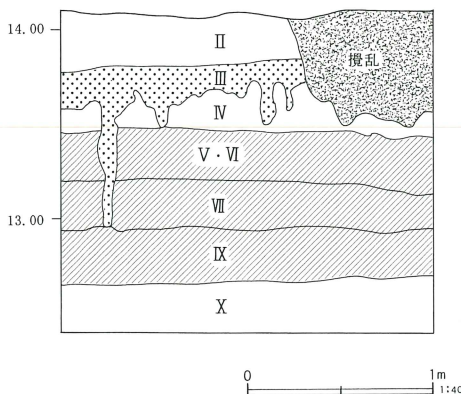
第2号溝は南側調査区の北東端で第1号溝に並行するように掘り込まれた小規模な溝で、L字状に屈曲して、東西方向に走る第3号溝と重複しながら埋没谷方向に延びる。第4号溝は北側調査で第1号溝と交差するように掘り込まれたもので、大半が調査区域外に延びており、土層断面の観察では第1号溝に切られていることが確認された。

他に遺構は検出されなかったが、調査区西側の平坦部を中心に縄文時代早期から中期の土器片が少量検出されている。

なお、西側調査区を中心に先土器時代のテストピットを設けて確認したが、石器等は検出されなかった。

当遺跡の基本土層は、以下のとおりである（第5図参照）。

第5図 基本土層



基本土層

第II層 暗褐色土 漸移層。縄文時代の遺物包含層。

第III層 褐色土 ソフトローム層。

第IV層 黄褐色土 ハードローム層。白色スコリアを多量に含む。

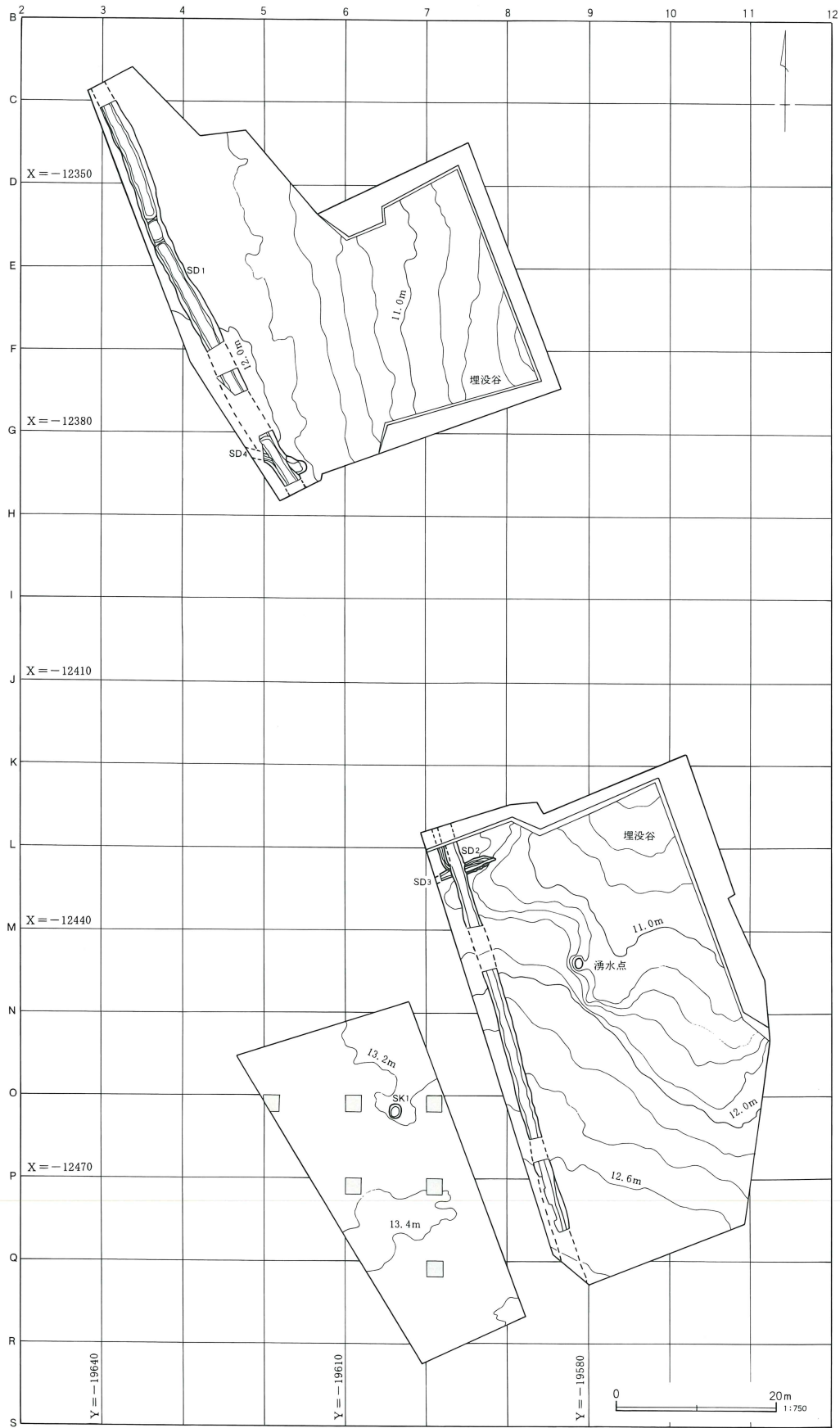
第V・VI層 暗褐色土 黒色帯。白色スコリア多量、赤色スコリア少量含む。

第VII層 黒褐色土 黒色帯。粘性が強い。上部に白色スコリアを多量に含む。赤色、黒色スコリアを含む。

第VIII層 黒褐色土 黒色帯。粘性が強い。上部に白色スコリアを含む。

第IX層 黄褐色土 粘性弱く、ザラザラした感じ。スコリアを少量含む。

第 6 図 小村田西遺跡全測図



2. 縄文時代

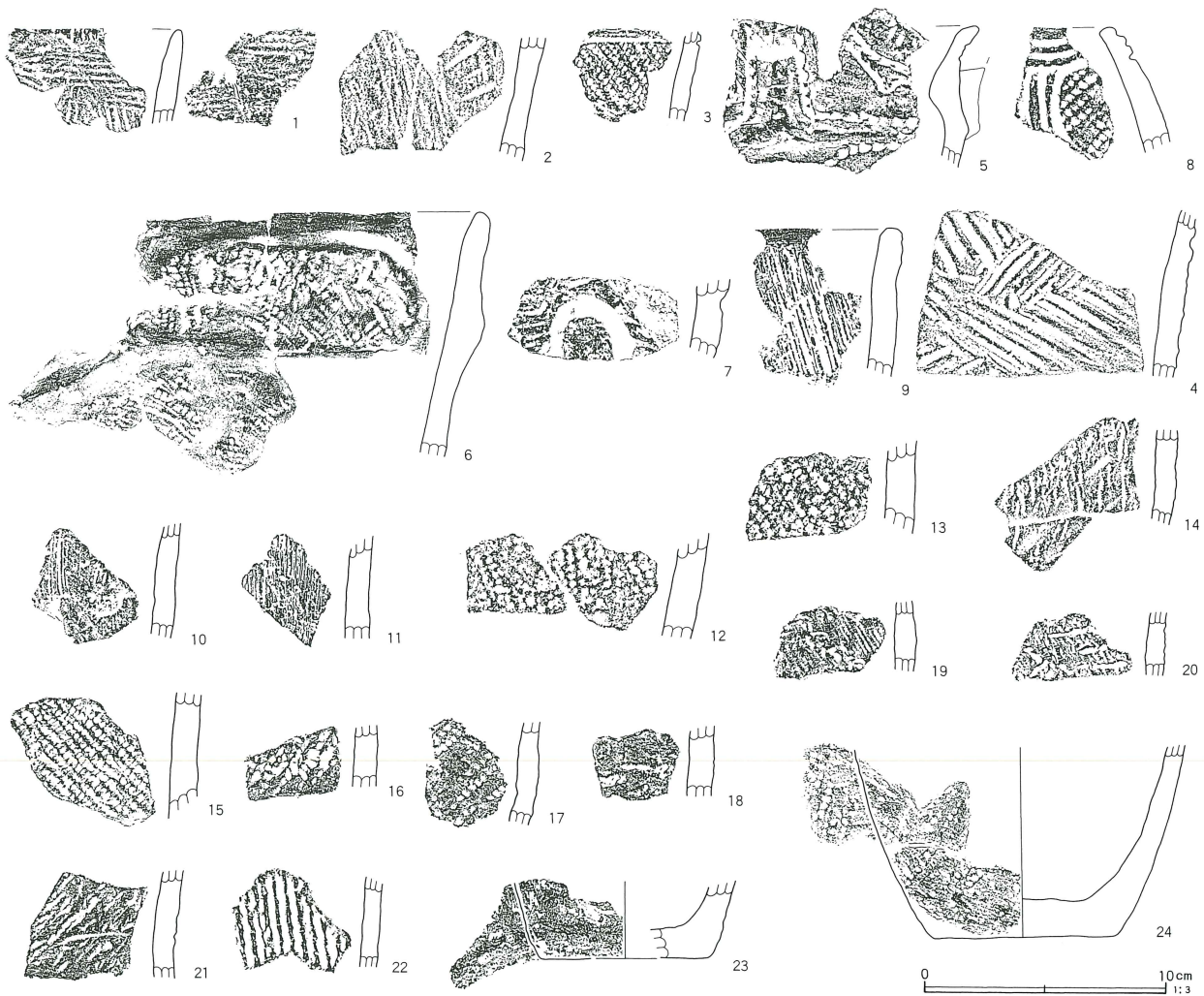
明確な遺構は検出されなかったが、調査区西側の平坦部を中心に縄文時代早期から中期の土器片が少量検出された。

出土遺物（第7図）

1・2は早期の条痕文系土器で、胎土に多量の繊維が含まれる。1は表裏面に粗い条痕文を施す。3はLRの地文に平行沈線文を施した胴部下半の破片で、諸磯b式と考えられる。4は棒状工具によって綾杉文を施した諸磯c式の深鉢の胴部破片で、胎土に多量の雲母を含む。5は断面山形の隆帯をもつ阿玉台式の口縁部破片で、隆帯に沿って半裁竹管による結節沈線文を施し、胎土に多量の雲母を含む。6は勝坂式で隆帯

による楕円区画文が連続する口縁部破片。地文の縄文はやや乱雑である。7・8は加曾利E式の口縁部破片である。7は沈線で逆U字状に施文する。8は口縁部が内湾する深鉢の破片で、沈線で曲線的な文様を施文する。9～11は櫛歯状工具を用いた条線文の破片で、加曾利E式に位置づけられる。12・13・15～17は縄文のみの破片で前期と考えられる。原体は、12・13・15がLR、16・17がRLである。18～21は諸磯b式と考えられるもので、綾線文を施文している。22は中期後半の撚糸文を地文とする胴部破片である。23・24は深鉢形土器の底部破片で、前期と考えられる。

第7図 グリッド出土遺物



3. 近世

(1) 土壌

第1号土壌 (第8図)

調査区西側のO-6グリッドに単独で位置する。平面形は略円形で、長径1.5m、短径1.4m、深さ0.25mをそれぞれ測る。掘り込みは浅く、底面は概ね平坦である。

覆土は3層に区分される。1層が焼土粒子を多量に含む赤褐色土、2層が焼土粒子、ローム粒子を少量含む暗褐色土、3層がローム粒子を多量に含む暗黄褐色土である。主軸方位はN-1°-Wを示す。

出土遺物はまったく検出されなかった。覆土の状況から近世以降の所産と推定されるが、確証は得られなかった。

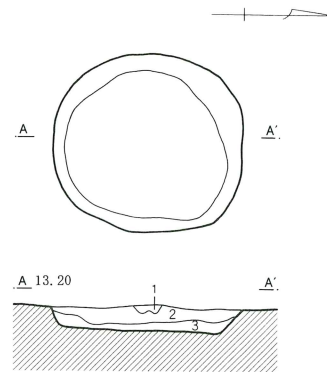
(2) 溝

第1号溝 (第9・10・11図)

第1号溝は調査区を北西から南東に縦断するように延びる、いわゆる箱薬研堀である。調査区の中央に与野市立学校給食第二センターが建設されているため、南北に分断された状態で調査を実施したが、未調査部分を含めた総延長は160mを越える。北側調査区と中央の未調査部分の間で緩やかに湾曲しており、概ね現道に沿うように直線的に延びている。底面は南から北に向かって緩やかに傾斜し、調査区の南端で標高約12.0m、北端で標高約10.7mを測り、比高差は約1.3mである。

調査区北側ではD-3グリッドに土橋状の掘り残し部分が確認され、その付近で緩やかに湾曲しているほかは、概ね直線的に延びている。上幅2.1~2.5m、下幅1.1~1.3m、深さ0.8~1.0mをそれぞれ測る。壁は底面からほぼ直に立ち上がり、その上部で大きく開いて急角度で立ち上がる。覆土は上層に暗褐色土・黒褐色土が厚く堆積し、下層にロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が堆積していた。土層の観察では水の流れたような痕跡は認められず、水利よりも区画の機能を有していたものと考えられる。また、調査区南端で

第8図 第1号土壌



SK 1

- 1 赤褐色土 焼土粒子多量含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子、ローム粒子少量含む。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。



第4号溝と重複しており、土層断面の観察から第4号溝を掘り込んでいることが確認された。

土橋部分 (第11図) は、両端部に堤状の突出部を掘り残し、中央部が浅く凹んでいる。規模は溝底面における長さ3.6m、溝底面からの高さ0.4mである。また北側調査区南端付近の溝底面には10cmほどのわずかな段差が作り出されていた。後述するように同様の段差は小村田遺跡の第1号溝でも確認されており注目されるが、その機能については明らかでない。

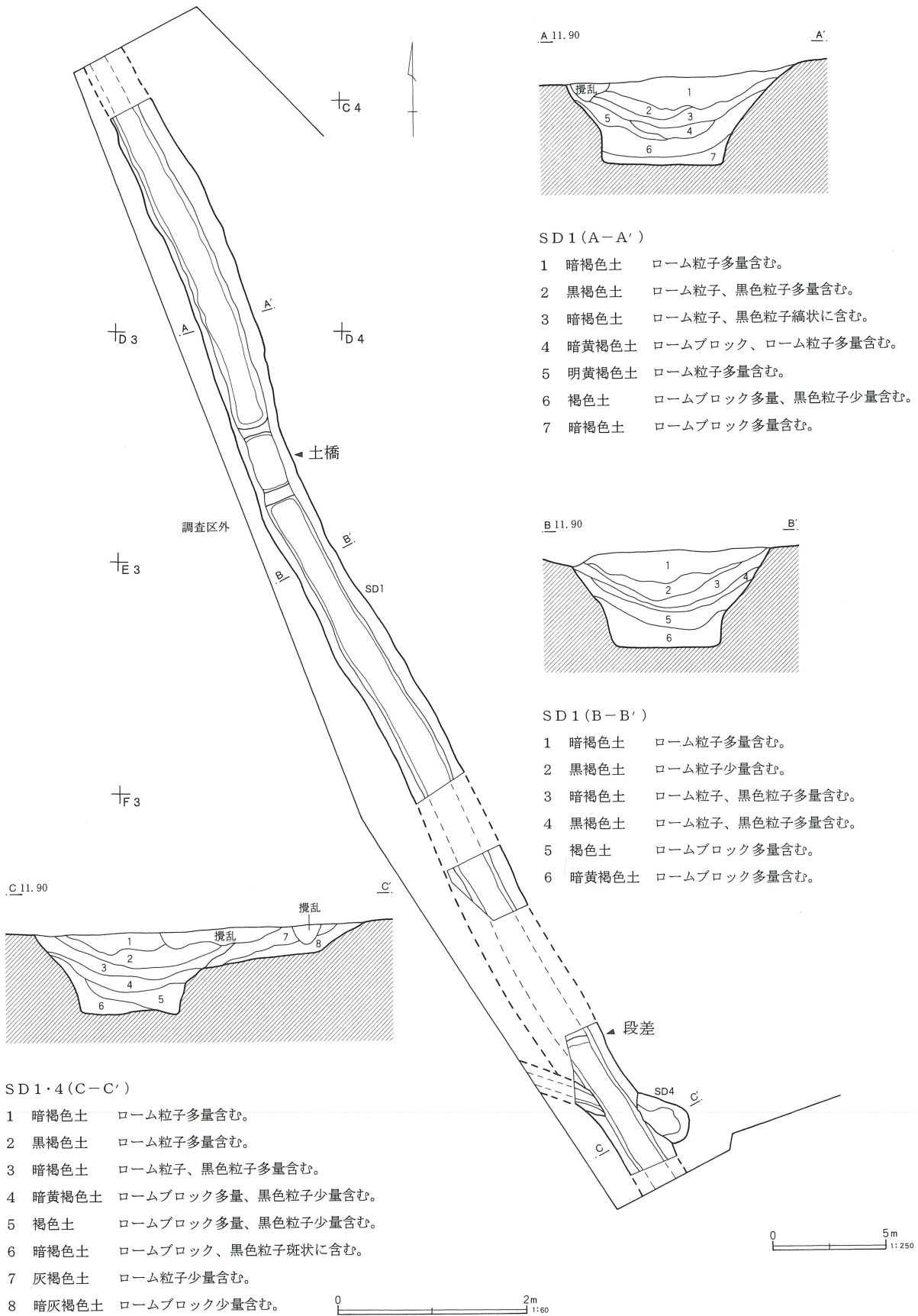
南側調査区では調査区の北端で第2・3号溝と交差しているほか、概ね直線的に延びる。北側調査区部分に比べると掘り込みがやや浅くなり、壁の立ち上がりも緩やかである。規模は上幅1.7m、下幅0.8m、深さ0.6mをそれぞれ測る。

遺物は近世陶磁器、丸瓦、砥石、銭貨、土製品等が少量出土した。明確に遺構に伴う遺物は検出されなかったが、近世後半から近代にかけて使用されたものと考えられる。

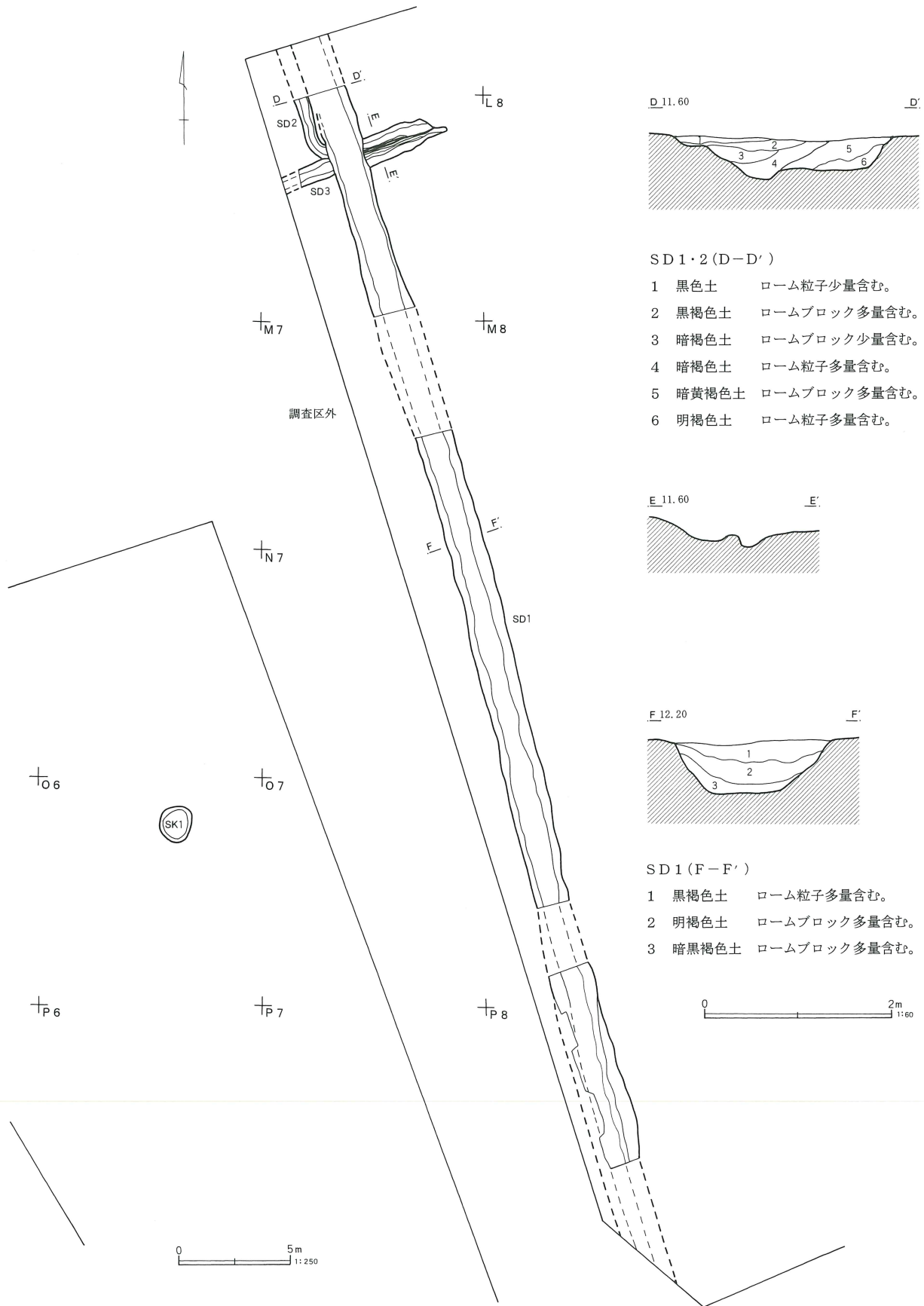
出土遺物 (第12図)

1は陶器皿である。口唇部に菊花状に小さな切り込みを入れ、内面に浅い沈線がみられる。内外面に灰釉

第9図 第1・4号溝



第10図 第1・2・3号溝



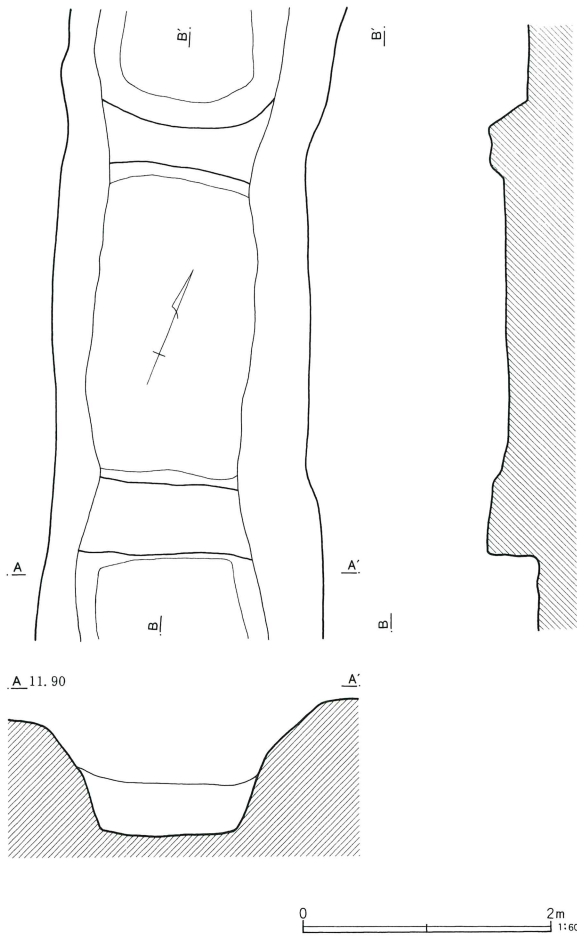
SD 1・2 (D-D')

- 1 黒色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 6 明褐色土 ローム粒子多量含む。

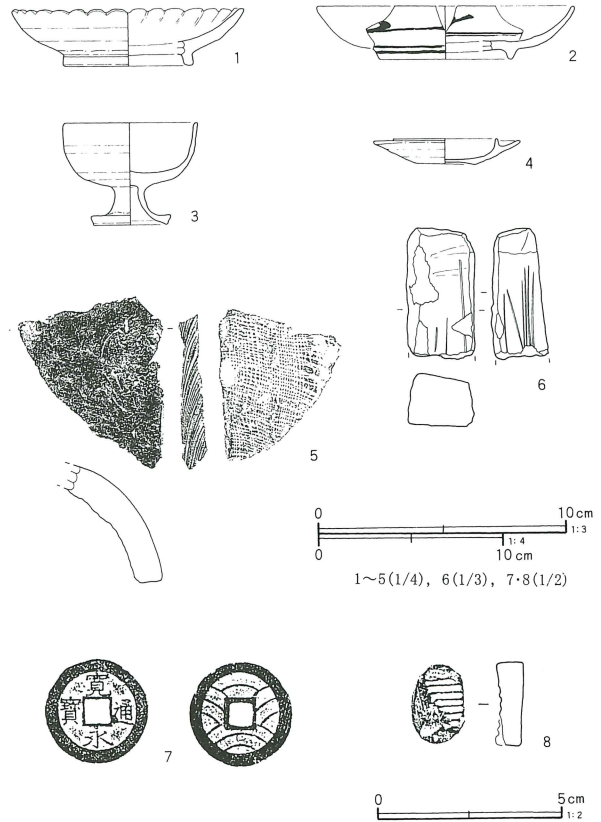
SD 1 (F-F')

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量含む。
- 2 明褐色土 ロームブロック多量含む。
- 3 暗黒褐色土 ロームブロック多量含む。

第11図 第1号溝土橋



第12図 第1号溝出土遺物



を掛ける。胎土色調は灰色。復元口径12.5cm、器高3.0cm、高台径6.8cm。

2は磁器染付皿である。小片のため文様は不明であるが、草花文であろう。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。復元口径14.0cm、器高2.8cm、高台径7.2cm。

3は陶器仏飯器である。内外面に淡緑色の灰釉を掛ける。胎土色調は乳白色。口径7.1cm、器高5.4cm、脚部径4.0cm。

4は陶器灯明受皿である。内面に乳白色の灰釉が掛かり、貫入がみられる。体部下端にはヘラケズリを施す。胎土色調は黄白色。口径8.0cm、受部径5.6cm、器高1.4cm、底径3.2cm。

5は丸瓦の破片である。凸面はナゲ調整、凹面は布目圧痕、端面に糸切り痕を残す。胎土に白色針状物質、石英、長石粒を含み、焼成は良好で、色調は青灰色で

ある。須恵質の焼き上がりであることから、古代に遡るものと思われる。胎土の特徴から南比企窯跡群産と考えられる。

6は砥石で、下端を欠損する。各面とも良く研磨されており、櫛歯状の整形痕がみられる。遺存長5.1cm、幅2.7cm、厚さ2.0cm。重量46.72g。凝灰岩製。

7は寛永通宝で、いわゆる「波銭」。初鑄年代は明和6年(1769)。正字六年銭。外径28.3mm、穿径6.2mm、重量3.77g。銅製。

8は小半円をした土製品で、一部欠損する。型押しにより成形され、表面は中凹みの形態で、9本の条線を刻み、裏面は平坦である。素焼きで、色調は淡褐色。大きさは、長径2.2cm、短径1.4cm、厚さ0.7cm。重量は2.55gを量る。おそらく貨幣を模した土師質の玩具であろう。

第2号溝（第10図）

第2号溝は南側調査区の北西端のL-7グリッドに位置する。第1号溝に並行するように掘り込まれた小規模な溝である。規模は上幅0.6m、下幅0.3m、深さ0.4mをそれぞれ測り、断面形は逆台形である。大半が調査区域外に延びているため全容は不明であるが、先端部でL字状に屈曲して、第3号溝と一部重複しながら埋没谷方向に延びている。

土層断面の観察から、第1号溝が埋没した後に掘削されたことが確認されている。覆土の状況には明確に水が流れていたことを物語る痕跡はないが、溝の末端が埋没谷の方向に延びていることから排水を意図したものと考えられる。

出土遺物がまったく検出されていないため時期については限定できないが、第1号溝との重複関係から近世以降の所産と推定される。

第3号溝（第10図）

第3号溝は南側調査区の北西端のL-7グリッドに位置する。第1号溝に直交するように西側から埋没谷方向に延びる小規模な溝である。規模は上幅0.7m、下幅0.3m、深さ0.2mをそれぞれ測り、断面形は逆台形である。第1号溝との新旧関係については、調査時に確認することができず不明である。覆土の状況には明確に水の流れた痕跡は認められなかったが、第2号溝同様に埋没谷への排水を目的に掘削されたものと考えられる。

出土遺物がまったく検出されていないため時期は限定できないが、覆土の状況から近世以降の所産と推定される。

第4号溝（第9図）

第4号溝は北側調査区南端のG-5グリッドに位置する。第1号溝と斜めに交差するように掘り込まれたもので、東側末端は浅くなり土壙状に収束する。規模は、上幅0.8m、下幅0.4m、深さ0.2mである。大部分が調査区域外に延びているため全容は不明であるが、土層の観察では第1号溝に切られていることが確認された。

出土遺物がまったく検出されなかったため時期は限定できないが、覆土の状況から近世以降の所産と推定される。

（3）グリッド出土遺物

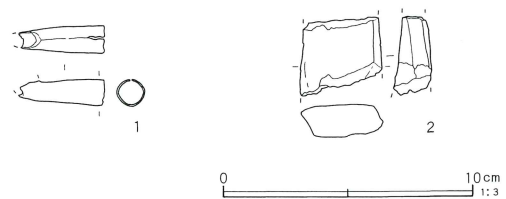
近世に属する遺構外遺物として煙管雁首と砥石が出土している。

出土遺物（第13図）

1は煙管の雁首である。火皿部を欠損する。遺存長3.5cm、羅尾接続部径1.1cm。首部上面の熔接位置に亀裂が入る。銅製。

2は砥石の破片である。両端部を欠損する。遺存面は各面とも良く研磨されている。遺存長3.1cm、幅3.3cm、厚さ1.3cm。凝灰岩製。

第13図 グリッド出土遺物



IV 小村田遺跡の調査

1. 遺跡の概要

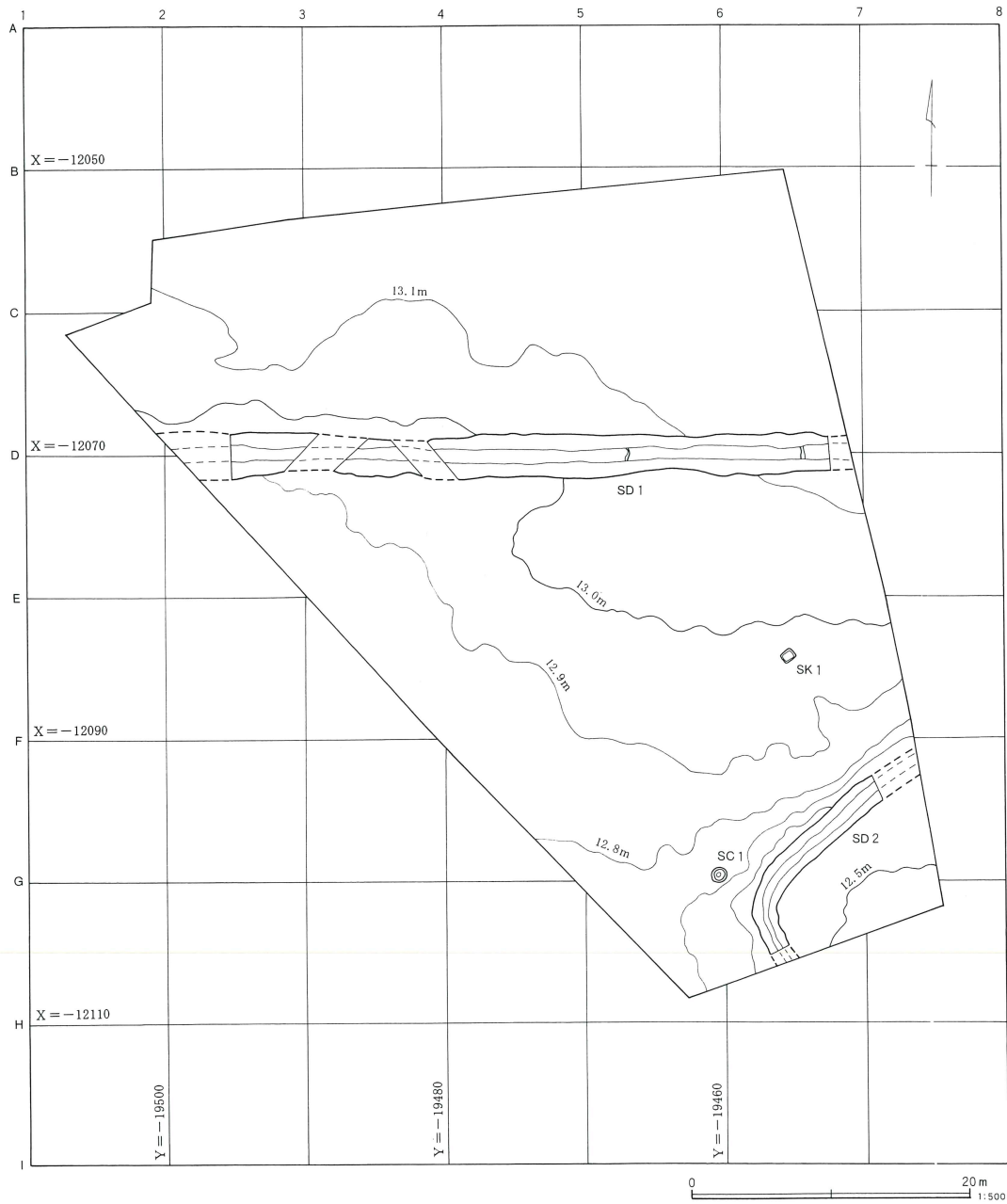
小村田遺跡は県立与野農工高等学校の東方約300mに位置し、小村田西遺跡からは北東へ約350m離れている。調査区の地形は南に向かって緩やかに傾斜する斜面地で、検出された遺構は縄文時代の集石土壇1基、近世の土壇1基、溝跡2条を数える。

集石土壇は2段に掘り込まれた円形の土壇で、覆土

中から縄文時代中期の土器片2点のみが出土した。

近世以降の所産と推定される遺構は土壇1基、溝2条である。このうち第1号溝は箱薬研堀で、底面の2箇所わずかに段差を作り出していた。性格については明確でないが、覆土の観察からすると用排水路よりも区画溝の可能性が高い。

第14図 小村田遺跡全測図



2. 縄文時代

縄文時代の所産と推定される遺構は、集石土壇1基のみが確認された。

第1集石土壇（第15図）

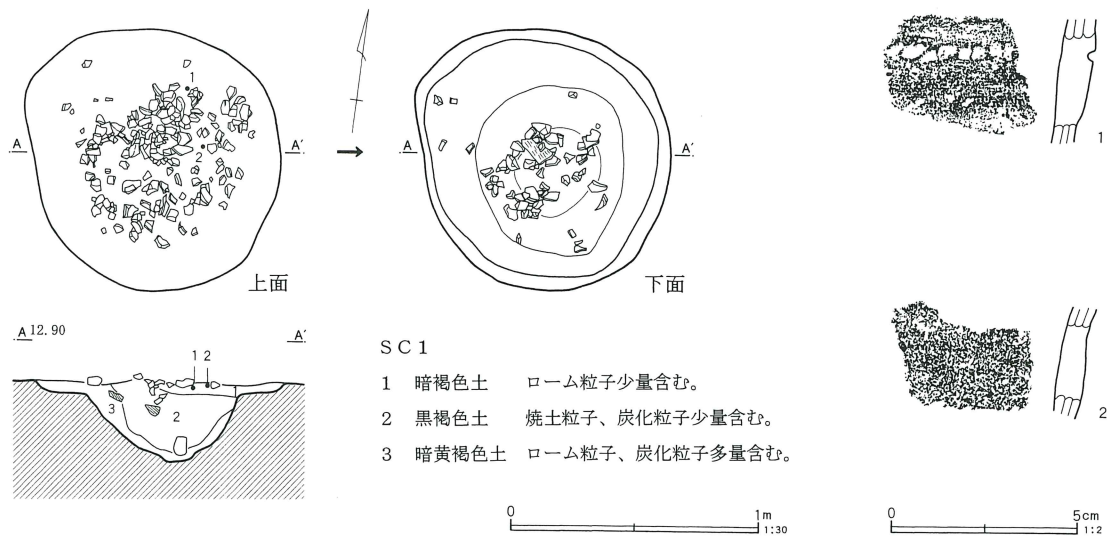
第1号集石土壇は調査区南端のF-5グリッドから単独で検出された。2段に掘り込まれた円形の土壇で、規模は長径1.9m、短径1.1m、深さ0.3mを測る。断面形は鍋底状を呈する。礫の分布は、ほぼ土壇の中に限られ、被熱のため破碎した焼け礫が上層部分を中心に検出された。

覆土は大きく3層に区分され、黒褐色土、暗黄褐色土が主体となる。1層は比較的混入物が少ないものの、2層から3層にかけて炭化木、炭化物粒子、焼土粒子の混入が多くなる。

出土遺物（第15図）

遺物は、覆土の上層から縄文時代中期の土器片が2点のみ出土した。1は丸棒状工具を用いて刺突文を1列に施している。2は無文のものである。両者とも胎土に雲母、砂粒を多量に含む。

第15図 第1号集石土壇・出土遺物



3. 近世

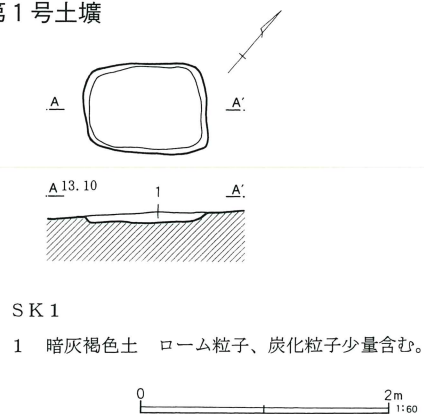
(1) 土壇

第1号土壇（第16図）

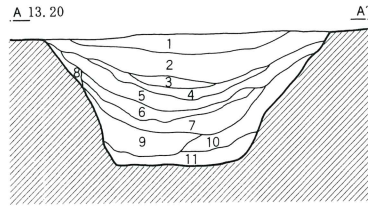
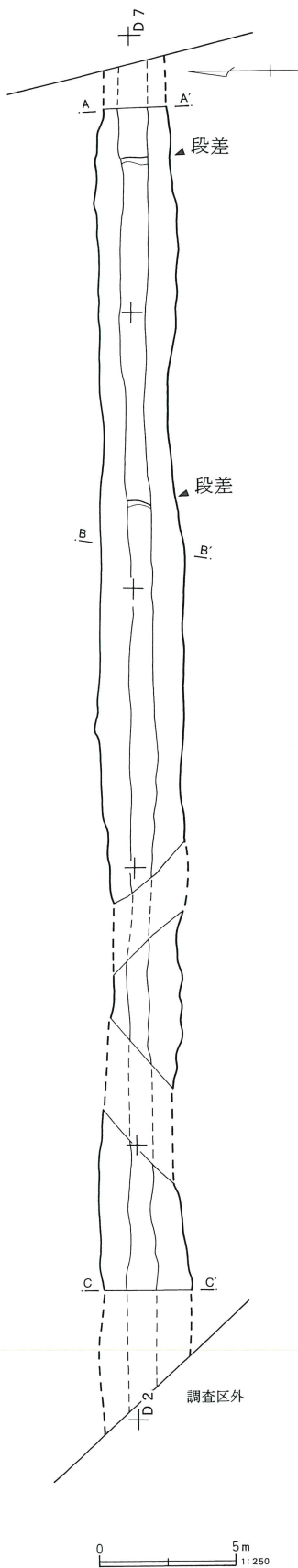
調査区東寄りのE-6グリッドに単独で位置する。平面形は長方形で、長径1.0m、短径0.7mを測る。掘り込みは浅く、底面は概ね平坦である。覆土はローム粒子、炭化粒子を少量含む暗灰褐色土の単一層である。主軸方位はN-49°-Eを指す。

出土遺物はまったく検出されなかった。覆土の状況から近世以降の所産と推定されるが、確証は得られなかった。

第16図 第1号土壇

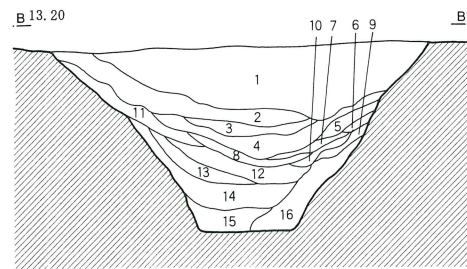


第17図 第1号溝



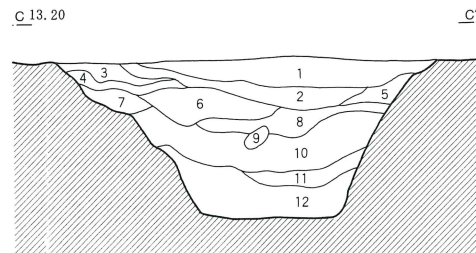
SD 1 (A-A')

- | | | | |
|---------|--------------|---------|--------------------|
| 1 暗灰褐色土 | ローム粒子多量含む。 | 7 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 2 暗灰褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 8 黄褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 3 暗灰褐色土 | ロームブロック多量含む。 | 9 暗黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒子多量含む。 |
| 4 黒色土 | ローム粒子多量含む。 | 10 褐色土 | ロームブロック、ローム粒子多量含む。 |
| 5 暗褐色土 | 焼土粒子微量含む。 | 11 褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子多量含む。 | | |



SD 1 (B-B')

- | | | | |
|---------|--------------|----------|--------------------|
| 1 暗灰褐色土 | ローム粒子多量含む。 | 9 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 2 暗灰褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 10 黒色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 3 暗灰褐色土 | ロームブロック少量含む。 | 11 暗黄褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 4 黒色土 | ローム粒子微量含む。 | 12 褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 13 褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子多量含む。 | 14 褐色土 | ロームブロック、ローム粒子多量含む。 |
| 7 黒色土 | ローム粒子少量含む。 | 15 褐色土 | ロームブロック、黒色土粒子多量含む。 |
| 8 黒褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 16 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |



SD 1 (C-C')

- | | | | |
|---------|--------------|----------|--------------------|
| 1 灰褐色土 | ローム粒子多量含む。 | 7 褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 | 8 黒褐色土 | ロームブロック、ローム粒子多量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 9 暗褐色土 | 黒色土ブロック少量含む。 |
| 4 褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 10 暗黄褐色土 | ロームブロック、ローム粒子少量含む。 |
| 5 褐色土 | ロームブロック少量含む。 | 11 黒色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 6 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 | 12 褐色土 | ローム粒子多量含む。 |

0 5m 1:250

0 2m 1:60

(2) 溝

第1号溝 (第17図)

第1号溝は、調査区北側を東西方向に横断するように直線的に延びる箱薬研堀である。コンクリート基礎が撤去できず一部未調査部分を残したが、延長約50mを検出した。規模は上幅2.7~3.1m、下幅0.7~1.1m、深さ1.1~1.5mを測る。壁は底面から急角度で立ち上がり、断面逆台形を呈する。底面は概ね平坦で、西寄りの2箇所段差を作り出して、東から西に向かって緩やかに傾斜する。段差は10cmほどの小さなもので、段差部分でわずかに溝の底面の幅員を狭めている。段差の間隔は約12mである。同様の溝底面にみられる段差は、小村田西遺跡の第1号溝でも確認されており、掘削方法に共通性が窺われる。

覆土は常時水が流れていたような痕跡はなく、水利よりも区画を意図したものと考えられる。

遺物は上層から陶磁器の破片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

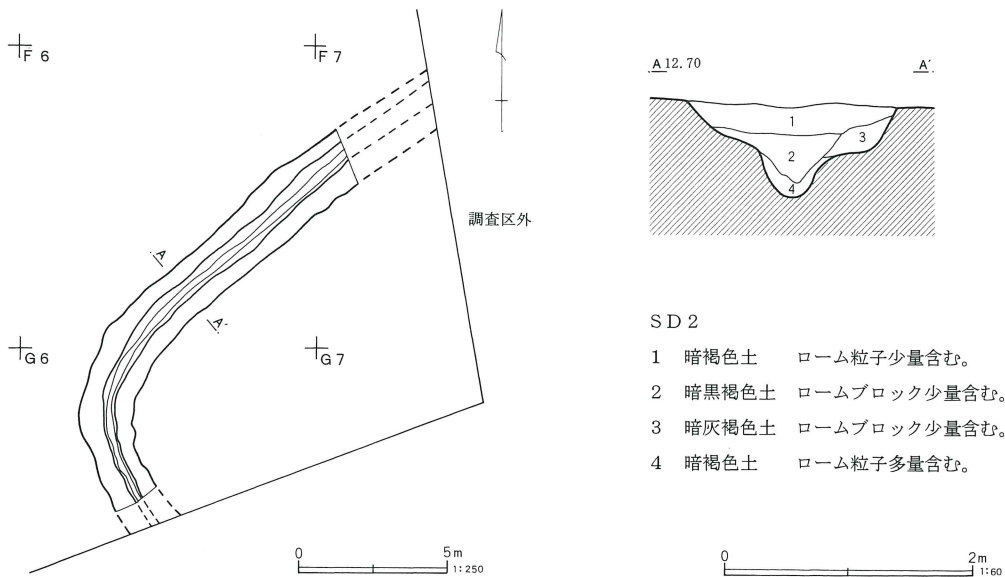
この溝跡は規模・断面形などの特徴が、小村田西遺跡で検出された第1号溝に類似しており、本来同一の区画溝として機能していた可能性も考えられる。

第2号溝 (第18図)

第2号溝は調査区南端に位置し、L字形に屈曲して調査区外に延びる。幅1.7m、深さ0.7mを測り、断面形は薬研堀に近い。この溝に区画された調査区南端は攪乱がひどく遺構をほとんど確認できなかったが、溝の断面形や覆土の状況から地割等の土地利用における区画溝と考えられる。

遺物は近世陶磁器と軒棧瓦等が少量出土しただけで、直接伴う遺物は検出されなかった。

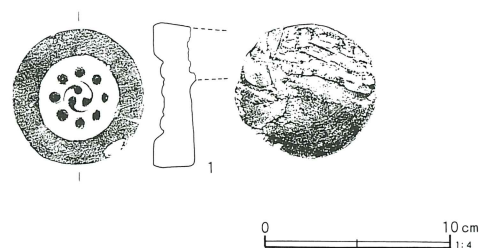
第18図 第2号溝



出土遺物 (第19図)

1は軒棧瓦の軒丸部の破片である。瓦当は連珠三つ巴文で、瓦当径7.6cm、厚さ2.2cm、文様区径4.7cm、内区径2.1cmを測る。珠文は径0.8cmで8個を数える。巴は長さ1.6cmで、断面はなだらかな台形である。色調は暗灰褐色で、胎土は灰色。焼成良好である。

第19図 第2号溝出土遺物



V 関東遺跡の調査

1. 遺跡の概要

関東遺跡は、鴻沼川（霧敷川）と芝川に挟まれた浦和・大宮支台の西縁部に位置する。西側は鴻沼川に沿って沖積低地が広がり、対岸は与野支台となる。鴻沼低地を望む台地縁辺部には、矢垂遺跡、札ノ辻遺跡、中里前原遺跡、中里前原北遺跡、上太寺遺跡等の弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が点在している。

調査地点は台地部の縁辺部に立地しており、標高11.5m前後である。鴻沼川に向かって西側に緩やかに傾斜し、台地部と沖積地との比高差は約3mを測る。

本遺跡は首都高速道路大宮線建設予定地内の事前調査によって新たに発見された遺跡である。調査区内は工場の跡地であるため、近代以降に建てられた煉瓦造りの建物基礎やコンクリート基礎が残り、攪乱が広範囲に及んでいた。また、調査区内を分断するように南北に搬入路が横断していたため、調査区を東西の二区画に分けて調査を実施した。今回の調査対象面積は2,500㎡である。

検出された遺構は、先土器時代の石器集中1箇所、縄文時代後期の土壇1基、古墳時代初頭の方形周溝墓9基、溝1条、近世以降の土壇28基、溝1条、ピット7基等である。

先土器時代の石器集中は、東側調査区中央のG-9グリッドを中心にⅦ層上部から検出された小規模なまとまりで、剥片類が4点検出されている。このほかにも単独で数点の剥片類の石器が検出された。

縄文時代の遺構は、東側調査区の南西端からやや大型の土壇が1基検出された。直径約4mの円形の土壇で、竪穴住居跡としてもよい大きさであるが、炉跡、柱穴等は確認することができなかった。遺物は、縄文時代後期の土器片と石鏃が出土している。この他に遺構外遺物として縄文時代前期から晩期にわたる土器片と石鏃が出土した。

方形周溝墓群は、大型の第1号方形周溝墓を中心に9基が近接して検出された。周溝の平面形態は全周するものと、コーナーに陸橋部を有する一隅切れ型などが認められた。このうち3基の方形周溝墓から方台部に主体部と推定される土壇が検出されたが、遺物がまったく出土せず、埋葬施設としての確証は得られなかった。また、第5・9号方形周溝墓の2基は「コ」の字形の周溝を接続して方台部を拡張した可能性が高く、方台部の埋葬空間以外の性格を考える上で注目すべき事例である。

遺物は、第1号方形周溝墓から壺、台付鉢などの供献土器がまとまって出土したほか、第2号方形周溝墓では溝中土壇から破碎された状態の壺が出土している。造営期間については、遺物が少なく明確にし得ないが、第1号方形周溝墓から出土した装飾壺等の特徴から弥生時代後期末から古墳時代前期初頭段階に位置づけることができる。また、第2・3号方形周溝墓からは無文の壺や小型埴等が出土しており、第1号方形周溝墓に後続して営まれたものと考えられる。

近世以降に位置づけられる遺構としては、土壇28基、溝1条、ピット7基が検出された。

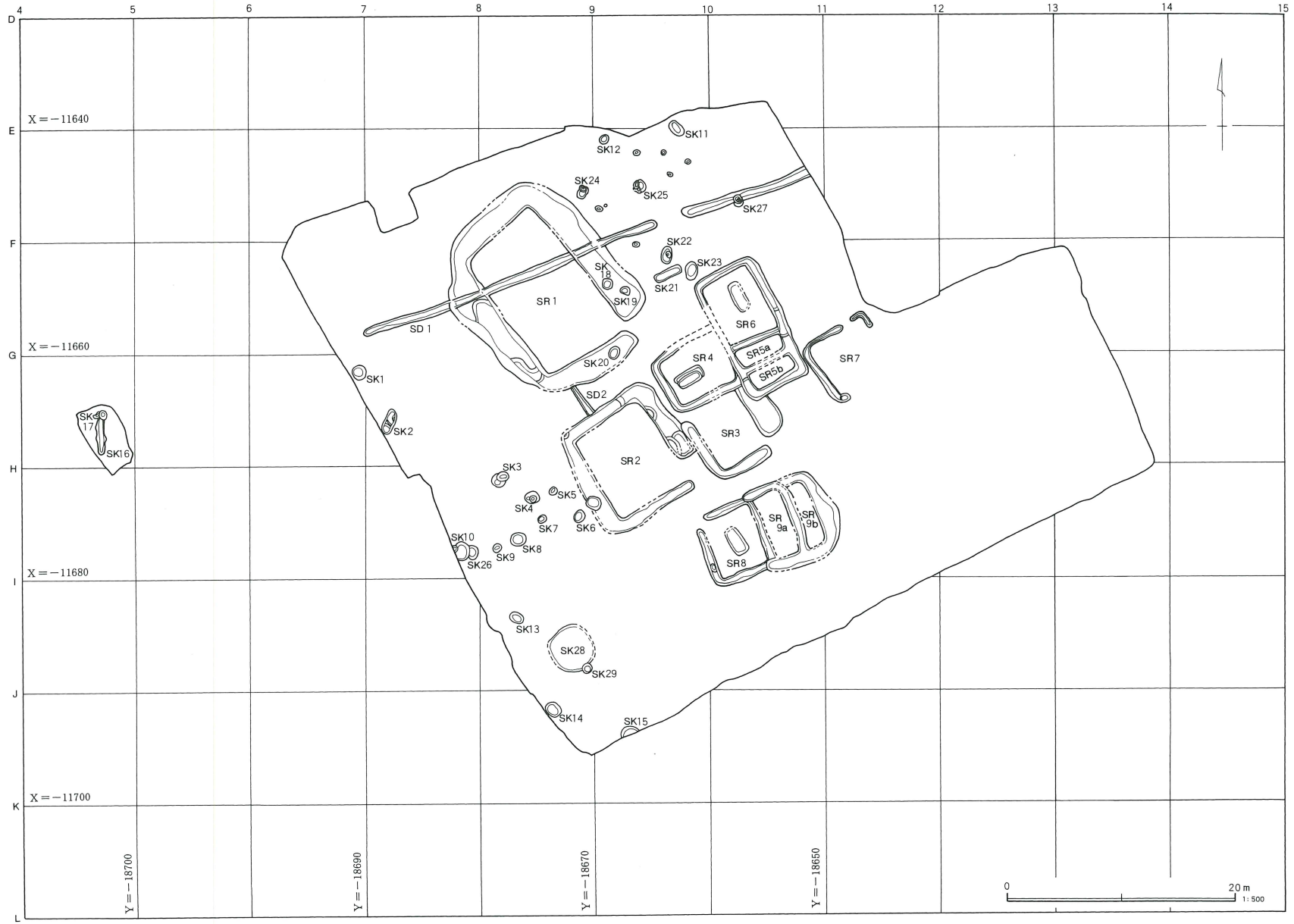
土壇は東側調査区の西側と北東側の2箇所に集中して分布していた。円形、楕円形、長楕円形、方形、不整形等の形態がみられた。遺物を伴うものが少なく、西側調査区の第17号土壇から捏鉢、砥石等が出土しているだけで、具体的な時期・性格等を限定することは困難である。

第1号溝は東側調査区の北側を東西方向に走行し、土橋状に溝が途切れる部分が確認された。周囲に土壇やピットが比較的集中しており、屋敷地等の区画を目的としたものであろうか。

第20図 関東遺跡周辺地形図



第21図 関東遺跡全測図



2. 先土器時代

(1) 概略

遺跡は、狭義の大宮台地の南部で、鴻沼川の東岸に位置する。調査区は低地に面する肩部にあたるため、当初より先土器時代の遺構・遺物の検出が予想されていた。

先土器時代の調査は、10mグリッドの北西コーナーに2×2mの小グリッドを設定し、ローム層の掘り下げを実施した。その結果、石器集中1箇所と単独出土の石器3点が検出された。

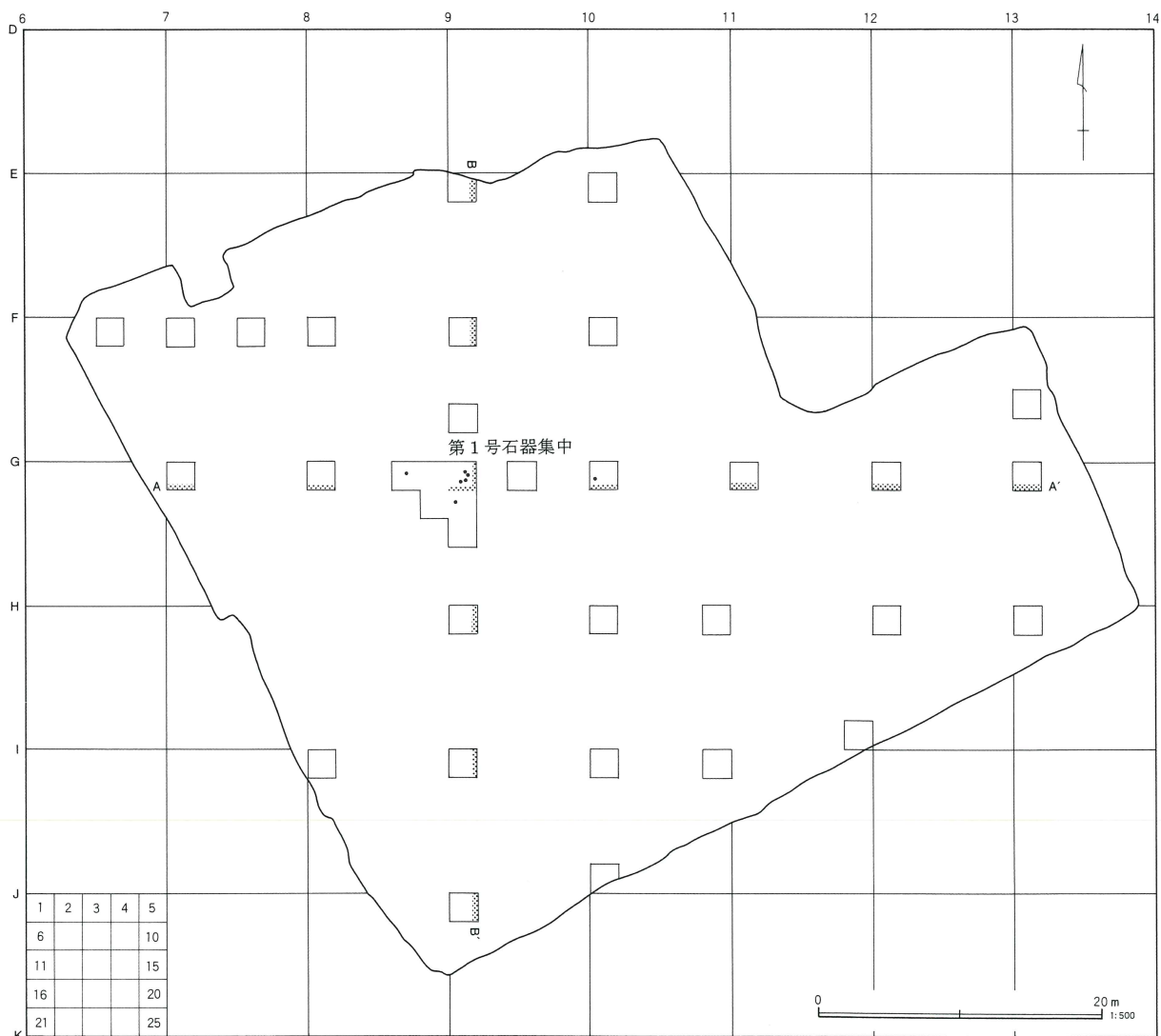
第1号石器集中は第Ⅶ層（第2黒色帯上部）の上部

から剥片4点がまとまって出土している。

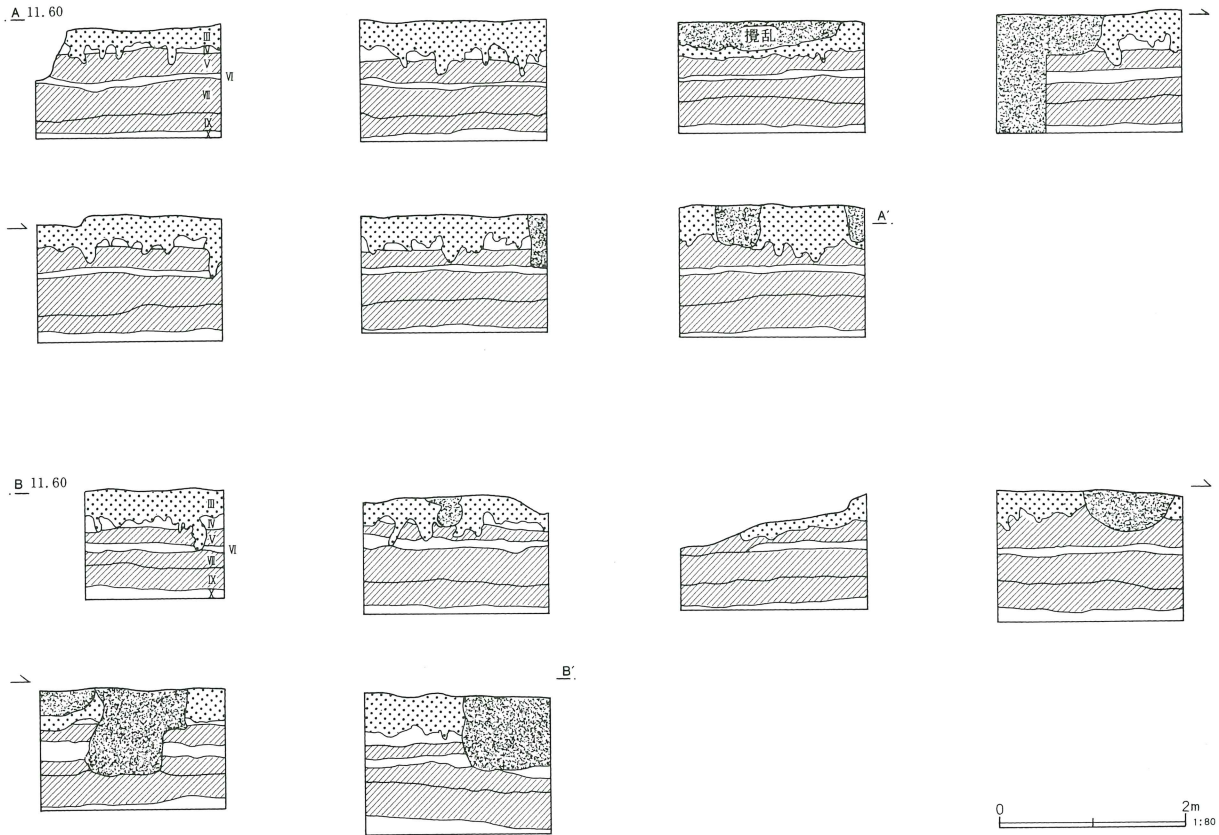
単独出土の石器は、石器集中の周辺から2点、東に約10m離れた地点から1点が検出された。

調査の結果は、点数が少なく製品を含んでいないなど、編年等の細かい分析ができるものではなかった。しかし、大宮台地はAT下位の遺跡はわずかで、規模の小さいものが多く、本遺跡の状況と近似している。今後、当該地域の特徴を考えて行くための材料になればと思う。

第22図 先土器時代の調査区



第23図 土層断面図



(2) 層位

土層は石器集中の検出されたグリッドを中心に、南北と東西のラインを示した(第23図)。工場の跡地であるため、建物の基礎等による攪乱が激しく、第2黒色帯より上位の層は荒らされているので、第2黒色帯を中心に堆積状況を観察する。東西ラインは、調査区の西側がすぐ台地の縁辺となるため、土層も西側に傾斜するものと考えていた。しかし、調査の結果、堆積状況はほとんど水平であった。南北ラインは、J9グリッドで土層堆積の傾斜が観られた。台地の先端部に近いためと思われる。

〈ローム層の基本土層〉

- 第Ⅲ層 ソフトローム
- 第Ⅳ層 ハードローム 白色スコリアを少量含む
- 第Ⅴ層 第1黒色帯 白色スコリアを多く含む
- 第Ⅵ層 ハードローム 色調によるⅤ層との区分は

難しいが、白色スコリア・黄褐色ブロックを少量含む
第Ⅶ層 第2黒色帯 粘性が強く、赤色スコリアを含む

第Ⅷ層 第2黒色帯 色調によるⅦ層との区分は難しいが、黄褐色ブロックを縞状に含む

第Ⅸ層 ハードローム 粘性は少ない

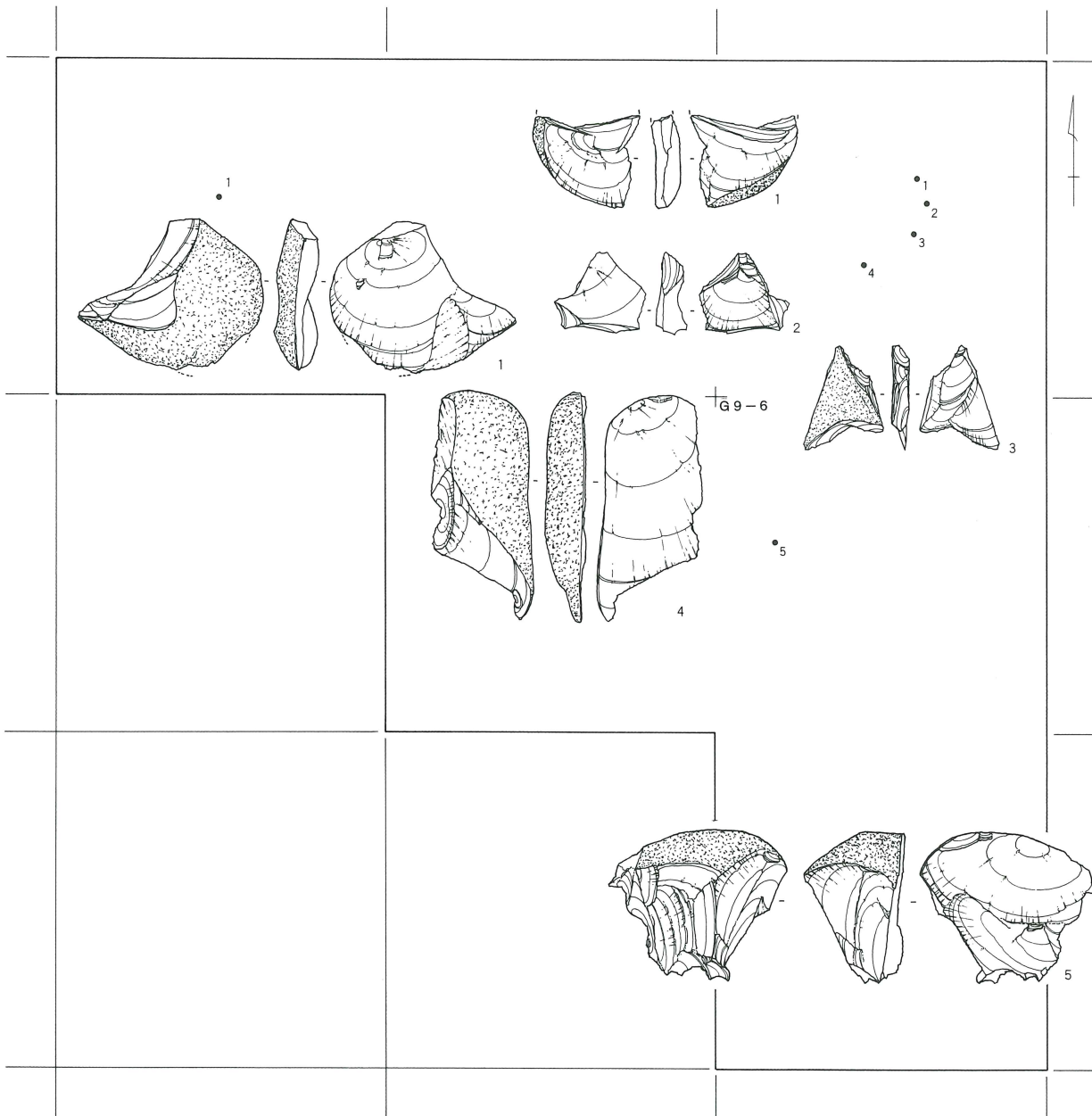
以上、関東遺跡では、武蔵野台地の基本層序の呼称を用いた。

大宮台地の層序区分の呼称は、現在まで統一されておらず、大きく分けると(1)遺跡単位での層位区分に耕作土から順に番号を付ける。(2)武蔵野台地の基本層序に合わせて呼称する。(3)大宮台地の基本層序作成の試み(註1)等がみられる。これら3つの方向性は、それぞれに有効性と問題点がある。その中で、大宮台地における基本層序作成の方向性は注目されるが、南部と北東部とのローム層の堆積状況の違い

(註2) や、富士系テフラの分布範囲、浅間-板鼻黄色軽石等のテフラがみられる地域との分析比較と、石器型式と示準テフラの関係の検討が進んでいないのも

事実である。今後の課題として、大宮台地の層序に関しては、真剣に取り組まなければならない問題であろう。

第24図 第1号石器集中ほか



11.20

(3) 石器集中及び単独出土

第1号石器集中 (第24図)

石器集中はG9-1グリッドに位置する。石器点数は4点と少なく、分布範囲は長さ0.6mの直線上にまとまっている。出土層位はⅦ層上部で面的に捉えられている。第1号方形周溝墓の南溝と平面的に重複しており、Ⅲ層まで削平されているが、本集中に関してはほぼ完全な形で遺存しているものと思われる。

出土石器はすべて剥片で、石材はチャートが2点、ホルンフェルス、黒色頁岩がそれぞれ1点である。同一母岩と思われる資料はない。

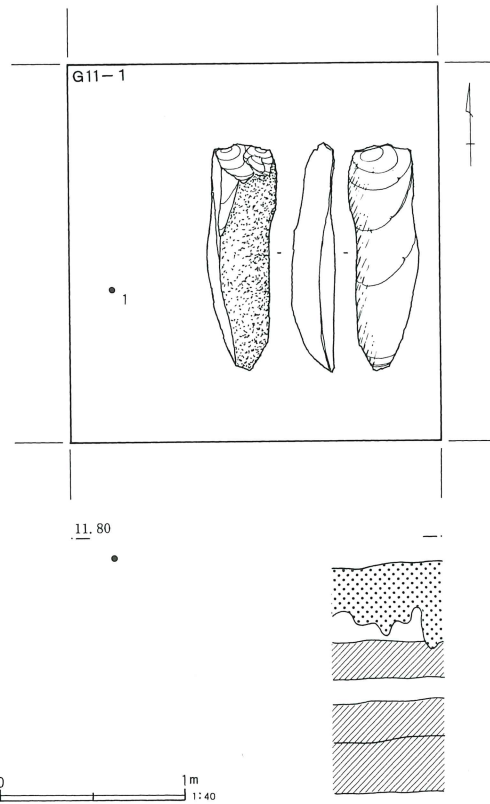
G8-4グリッド出土の石器 (第24図)

石器集中の西側、約5mの地点から単独で検出された。出土層位はⅢ~Ⅳ層である。

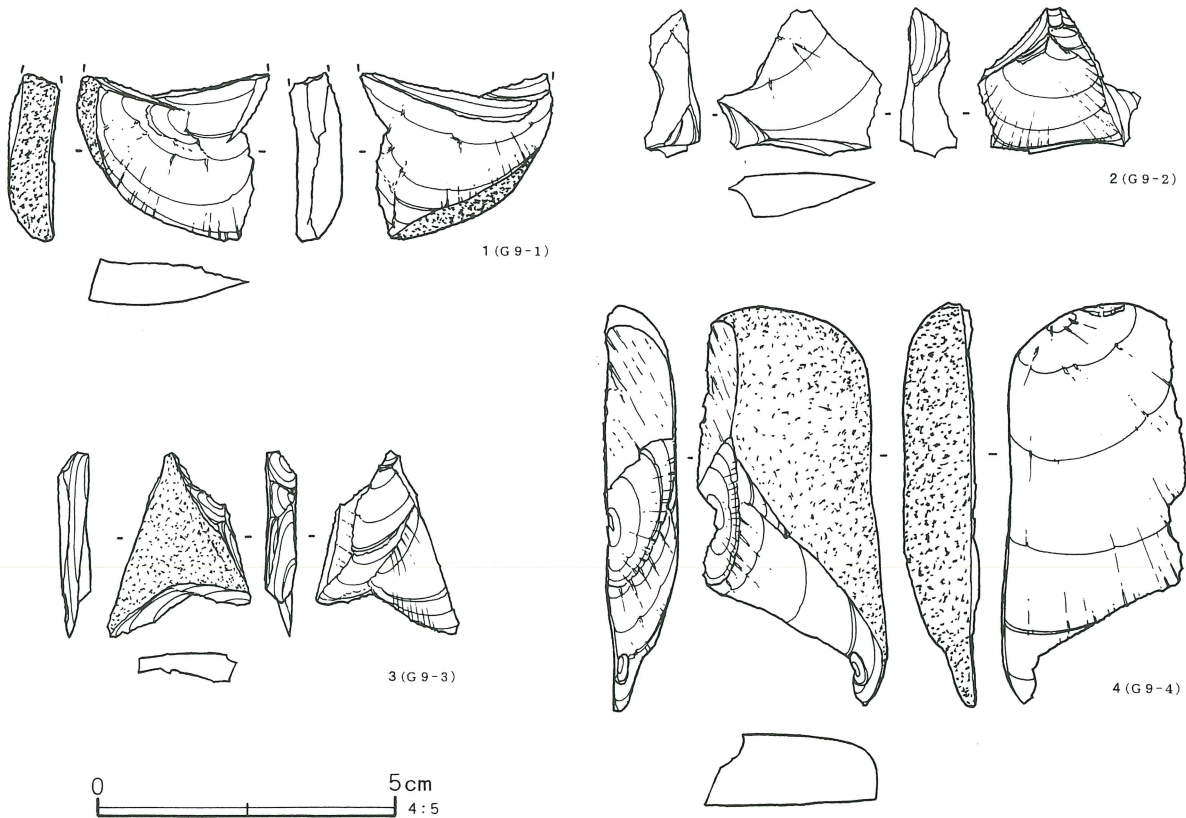
G9-6グリッド出土の石器 (第24図)

石器集中の南側、約1.5mの地点から単独で検出された。石器集中に含まれる可能性もあるが、出土層位

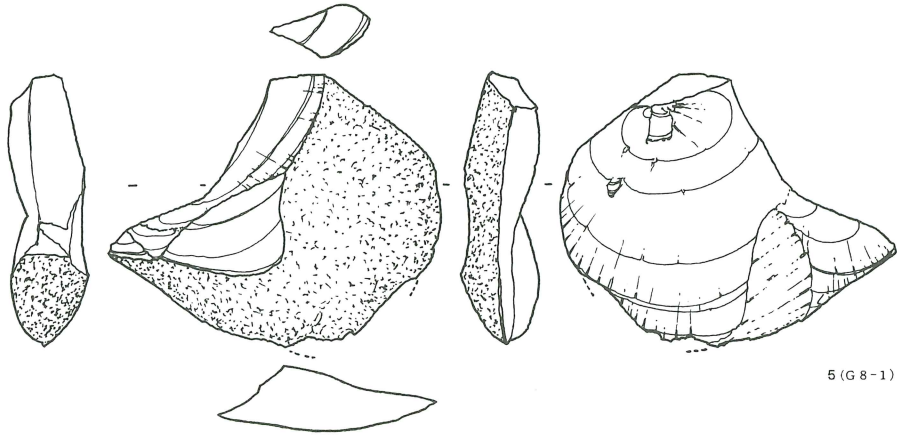
第25図 G11-1グリッド出土石器



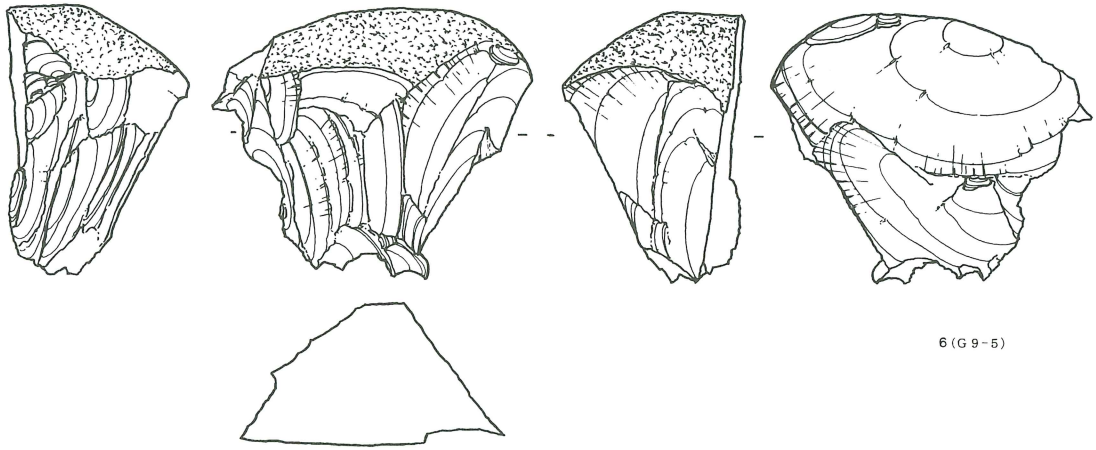
第26図 第1号石器集中出土石器



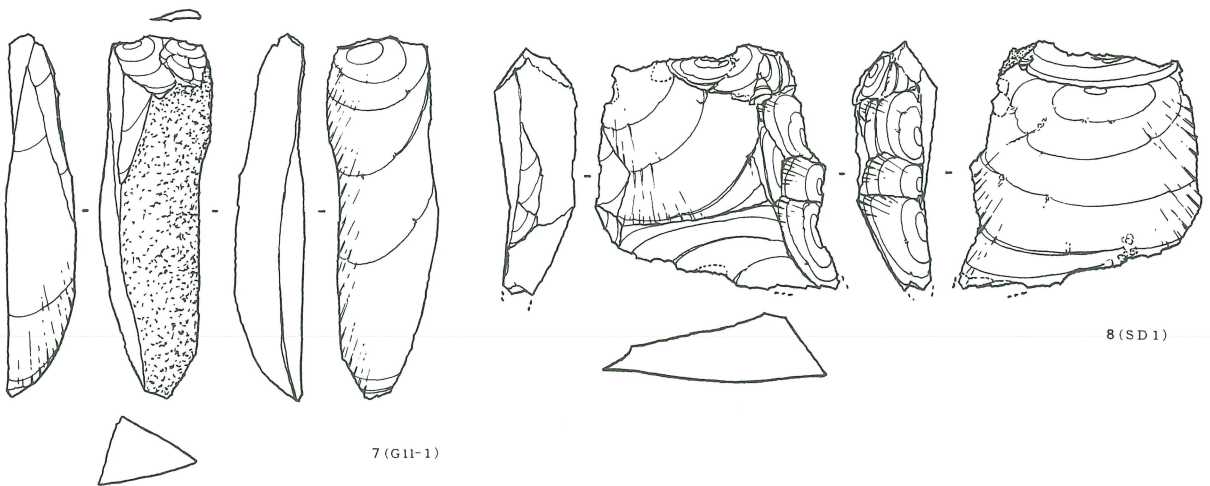
第27图 出土石器



5 (G8-1)



6 (G9-5)



7 (G11-1)

8 (SD1)



がV～VI層と若干浅いため、単独として分離しておく。

G11-1 グリッド出土の石器 (第25図)

石器集中の南側、約10mの地点から検出されている。出土層位はⅢ層上面である。

(4) 出土石器

先土器時代の石器は、石器集中及び単独出土、他時期の遺構覆土等から8点検出された(第26・27図)。明確な2次加工の施されたものは、第1号溝の覆土中から検出された8だけで、他はすべて剥片である。

1～4は第1号石器集中から出土した。1は上半部を欠損する。左側面に原石面を残している。2は下端縁が折ったようになっている。打面は正面からの細かい剥離によって除去されているが、何れかの製品を製作しようとした意図はみられない。3は正面に原石面を残し、裏面の一部に節理面がみられる。形状は不整形で、目的とした剥片と言うよりも、剥離工程において生じた撥ね物と思われる。4は正面に原石面を大きく残す。剥離するのに原石面を直接加撃しており、主要剥離面は平坦である。剥片と言うよりも棒状の礫を分割したといった感じである。

5は石器集中の西側、約5m離れた地点から検出された。石器集中がⅦ層であったのに対し、本石器はⅢ

～Ⅳ層中から出土している。正面に原石面を残し、打面は大きく単剥離面である。

6は石器集中の南側、約1.5mの地点から検出され、出土層位はV～VI層と若干浅い所から出土している。打面を原石面とした厚手の剥片である。左側縁に主要剥離面からの剥離がみられ、石核にする意図が窺えるが、素材段階で放棄されている。

7はG11-1グリッドから単独で検出された。出土層位はⅢ層上面である。表面の風化が進んでいる。正面に原石面を残す厚手の縦長剥片である。

8は第1号溝の覆土中からの出土で、先土器時代の石器かどうかは定かでない。右側縁に主要剥離面からの規則的な剥離が施されており、削器と思われる。

(西井幸雄)

註

1) 田代治は『埼玉考古 別冊第5号』「大宮台地の様相」の中で、大宮台地の基本層序について言及し、中川貝塚の上本・上杉氏の富士系テフラの分析データをもとに、基本層序を提唱している。

2) 第3回石器文化研究交流会の小討論会資料に掲載した「第2図 主要遺跡の層序と石器出土層位」に示しているように、大宮台地は南部から北東部にかけてロームの堆積状況が大きく異なり、現状での基本層序の作成が難しいことが窺える。

参考文献

田代 治 1997 「大宮台地の概要」『埼玉考古別冊5 特集号埼玉の旧石器時代』埼玉考古学会 pp.7-13

石器文化研究会編 1995 『第3回石器文化研究交流会 発表要旨』石器文化研究会

第1表 石器観察表

挿図番号	番号	大グリッド	小グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質
第26図1	1	G-9	1	70	122	10.82	剥片	2.75	3.25	0.90	7.67	ホルンフェルス
第26図2	2	G-9	1	84	128	10.87	剥片	2.40	2.80	1.00	4.30	チャート
第26図3	3	G-9	1	103	120	10.89	剥片	3.10	2.40	0.60	2.94	チャート
第26図4	4	G-9	1	121	90	10.87	剥片	6.65	3.20	1.25	32.27	黒色頁岩
第27図5	1	G-8	4	82	99	11.07	剥片	4.50	5.65	1.30	21.82	シルト岩
第27図6	5	G-9	6	86	36	10.93	剥片	4.45	5.40	3.10	52.93	チャート
第27図7	1	G-11	1	119	23	11.69	剥片	6.00	1.70	1.20	11.97	黒色頁岩
第27図8	SD1						削器	4.10	4.10	1.50	20.95	ガラス質黒色安山岩

3. 縄文時代

(1) 土壙

縄文時代の所産と推定される遺構は、縄文時代後期の土壙1基のみが検出されただけである。

第28号土壙（第28図）

東側調査区南西端のI-8・9グリッドに位置する。攪乱により壁と床面の一部が壊され、遺存状態はあまり良好ではなかった。また、南壁部分に第29号土壙が重複していた。

南北長4.05m、東西長3.72m、深さ0.26mの平面円形の土壙である。主軸方位はN-35°-Wを示す。覆土は5層に区分され、暗黒褐色土を主体とする。

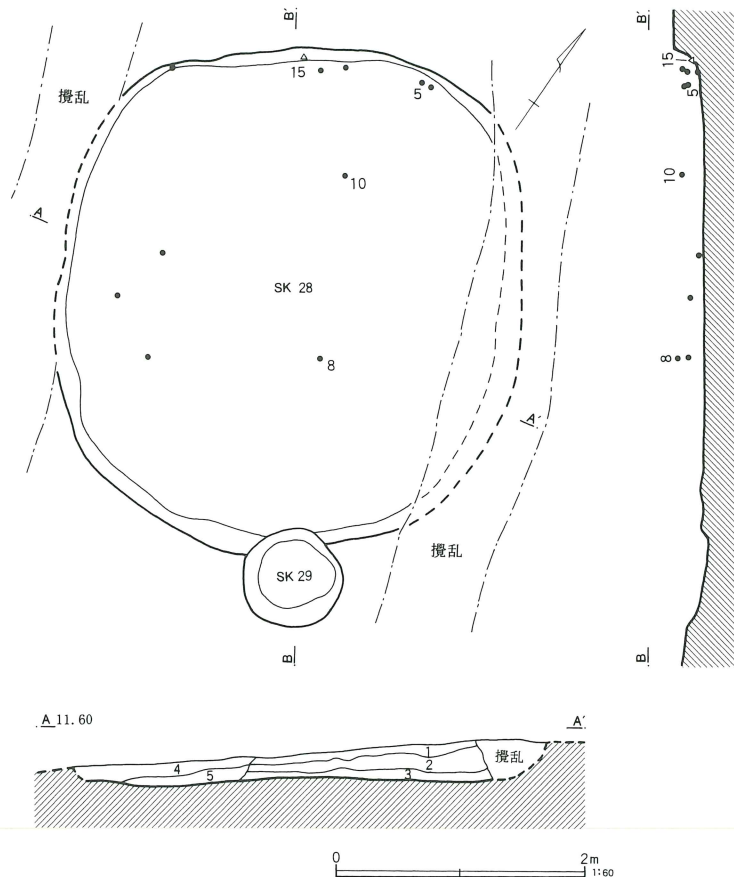
調査着手時は住居跡を想定していたが、床面を精査したところ炉跡や柱穴等が検出されず、住居跡とする根拠に乏しいことから土壙と判断した。

遺物は覆土中から堀之内I式を主体とする土器片が少量出土している。また、北西の壁際から石鏃が1点出土した。

出土遺物（第29図）

堀之内I式を主体とする土器が出土した。1～7は同一個体の破片で、頸部が括れ、口縁部がわずかに開く器形の深鉢である。丸棒状の工具を用いて曲線的な沈線文を施している。8・10は縦位の沈線文を施す胴

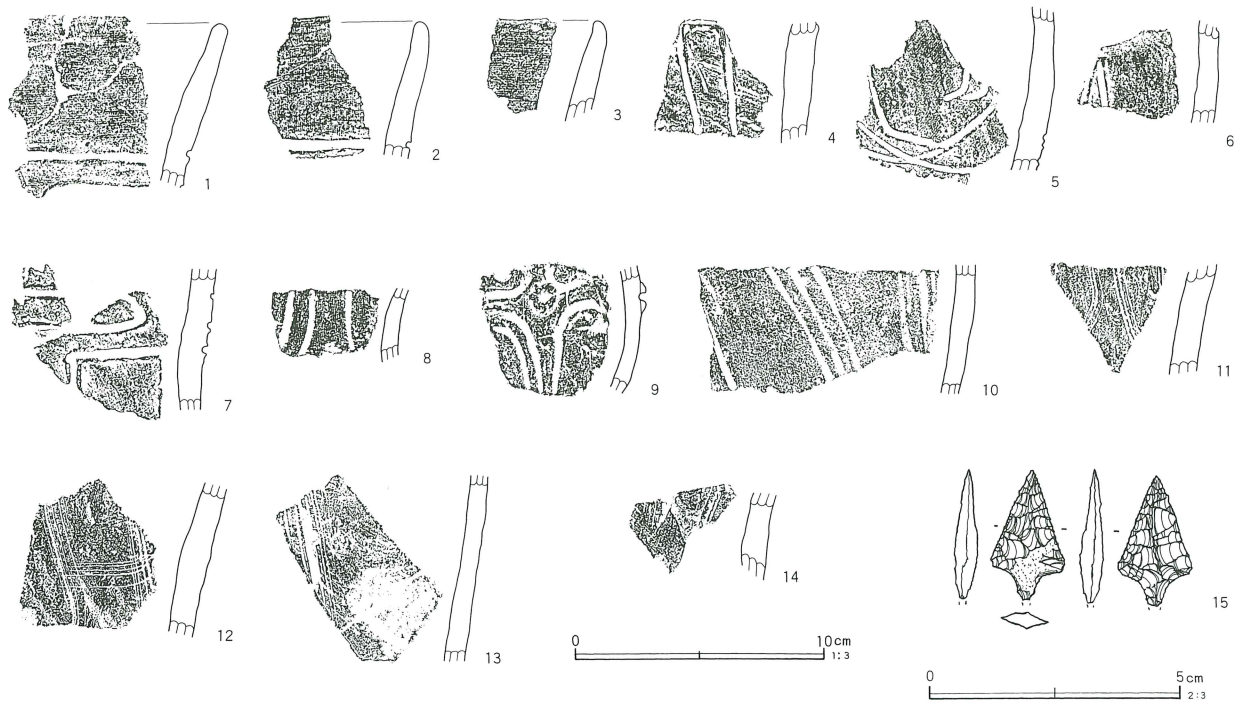
第28図 第28・29号土壙



SK28

- 1 暗灰褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、炭化粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 4 暗黒褐色土 黒色粒子少量含む。
- 5 暗黒褐色土 ローム粒子、黒色粒子少量含む。

第29図 第28号土壌出土遺物



部下半の破片である。9は沈線文を描き、ボタン状の貼付文がみられる。11～14は櫛歯状工具による乱雑な条線文を施した胴部下半の破片である。

15は有茎の石鏃である。基部の先端を欠損する。表面に一部原石面を残しているほかは、全面に調整加工を施す。石器石材はチャートで、大きさは長さ2.6cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.19gである。

(2) グリッド出土遺物

遺構外遺物として、第28号土壌の周辺を中心に縄文前期から晩期にわたる土器片が少量出土した。ほかに黒耀石製の石鏃1点が出土した。

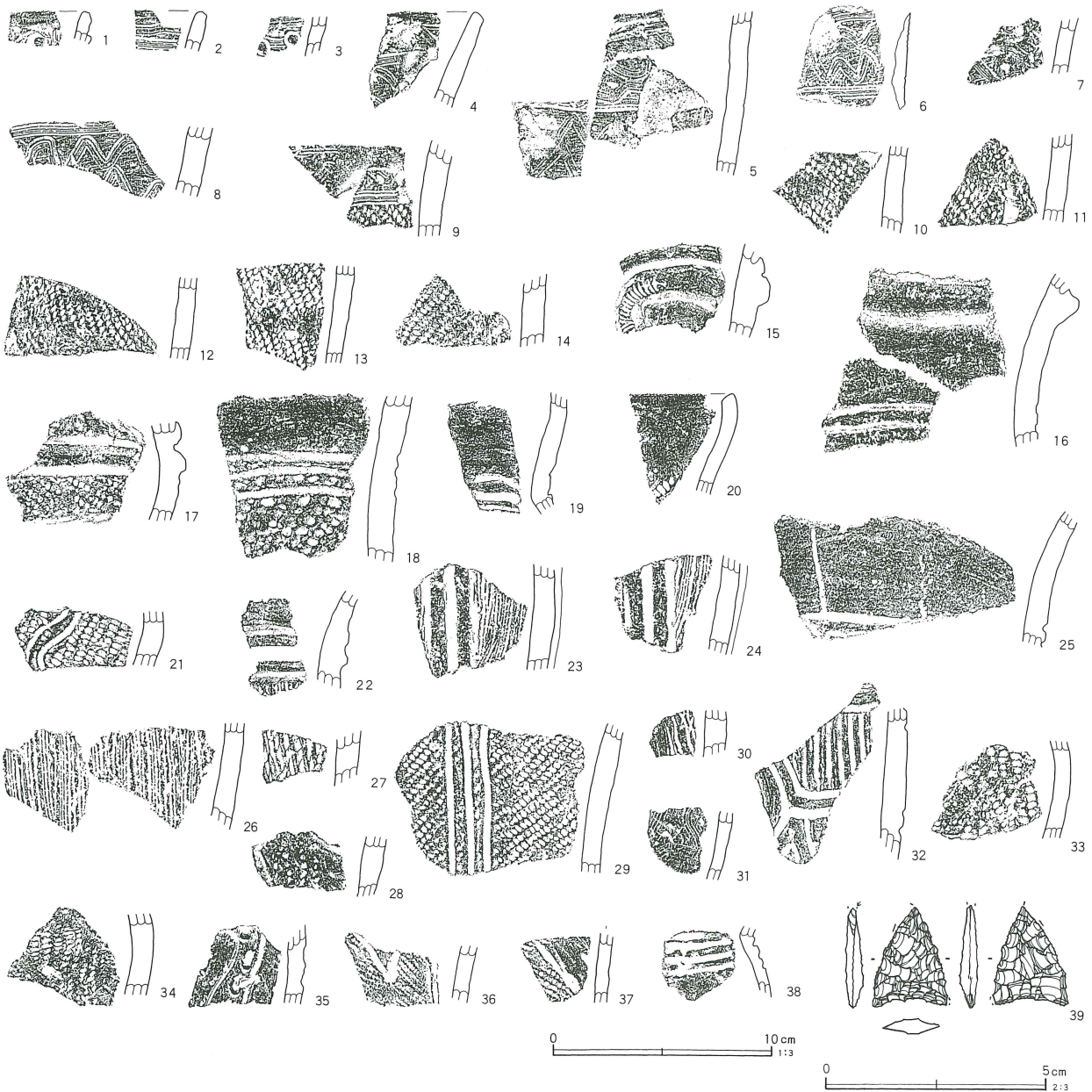
出土遺物 (第30図)

1～9は前期の諸磯a式と考えられるものを一括した。1～3は同一個体で、円形竹管の刺突列を部分的に配した口縁部の破片である。4～9は同一個体の破片で、櫛歯状工具を用いて横位の沈線区画した中に乱れた鋸歯状文を充填する。10～14は地文に縄文のみを残す破片で、加曾利E式と考えられる。10～13はLR、

14はRLである。15・32は勝坂式の深鉢の破片である。15は楕円形隆帯に竹管文を加えている。32は曲線的な沈線区画文の中に沈線を充填している。16・17は加曾利E式の隆帯をもつ口縁部文様帯の破片である。18・19は平行沈線を施す加曾利E式の胴部破片。20は小型鉢の口縁部の破片である。21は平行沈線による蛇行懸垂文が垂下する。22～24・26は同一個体の破片である。23・24は隆帯懸垂文がみられ、地文は櫛歯状工具を用いた条線文を施す。25は頸部に横位の沈線区画のみみられる深鉢の破片。29は平行沈線を用いた懸垂文を垂下する。30は撚糸文のみの破片である。31は櫛歯状工具を用いた乱雑な条線文を施す。33・34は縄文を地文とする破片である。35～37は称名寺式と考えられる破片で、35は沈線区画内に刺突文を施す。38は晩期の大洞BC式と考えられる壺の頸部破片である。

39は平基の石鏃で、基部には浅い抉りが入る。先端を一部欠損する。調整加工は表裏とも全面に施している。石器石材は黒耀石で、大きさは長さ2.3cm、幅1.75cm、厚さ0.45cm、重さ1.24gである。

第30図 グリッド出土遺物



4. 古墳時代

(1) 概略

古墳時代の遺構は、方形周溝墓9基、溝1条が検出された。方形周溝墓群は東側調査区の中央部に9基が近接して構築され、小規模な墓域を構成していた。北側に最大規模の第1号方形周溝墓が占地し、その南側に2番目に大きな第2号方形周溝墓が並列した形で所在する。また、第2号方形周溝墓の東側には周溝を重複ないし近接しながら第3～7号方形周溝墓の5基が

造営されている。さらに、その南側には少し距離を隔てて第8・9号方形周溝墓が位置している。このうち第5・9号方形周溝墓の2基には方台部の拡張が確認されており、注目される。

方形周溝墓に伴う遺物は全体的に少ない。第1号方形周溝墓から底部穿孔された壺、台付鉢、第2号方形周溝墓から壺、高坏の脚部、第3号方形周溝墓から小型埴、壺等が出土しているにすぎない。年代的には弥

生時代後期末から古墳時代前期初頭に位置づけられ、周溝の重複関係や群集形態などから比較的短期間に連続して造営されたものと考えられる。

また、第1号方形周溝墓と第2号方形周溝墓の間に検出された第2号溝は、長さ3.1m、幅0.5m、深さ0.2mほどの小規模なものであるが、覆土の状態や周溝間を結ぶように掘削されている点などから、方形周溝墓を結ぶ連結溝として同時性の高いものと判断した。

以下、各遺構について詳細を述べる。

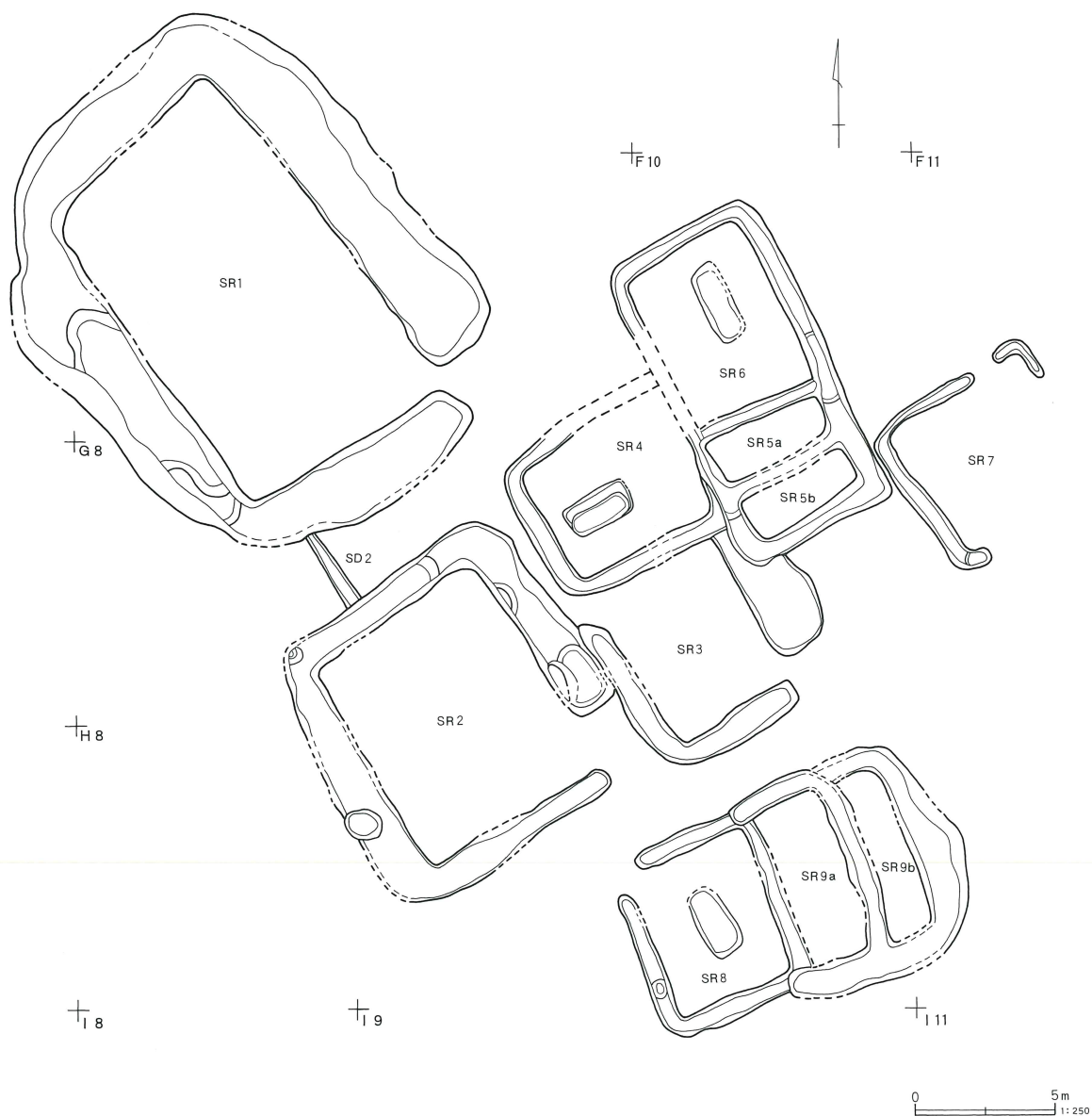
(2) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓（第32～36図）

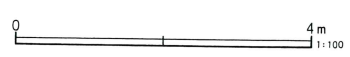
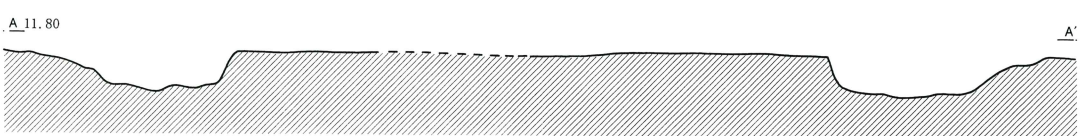
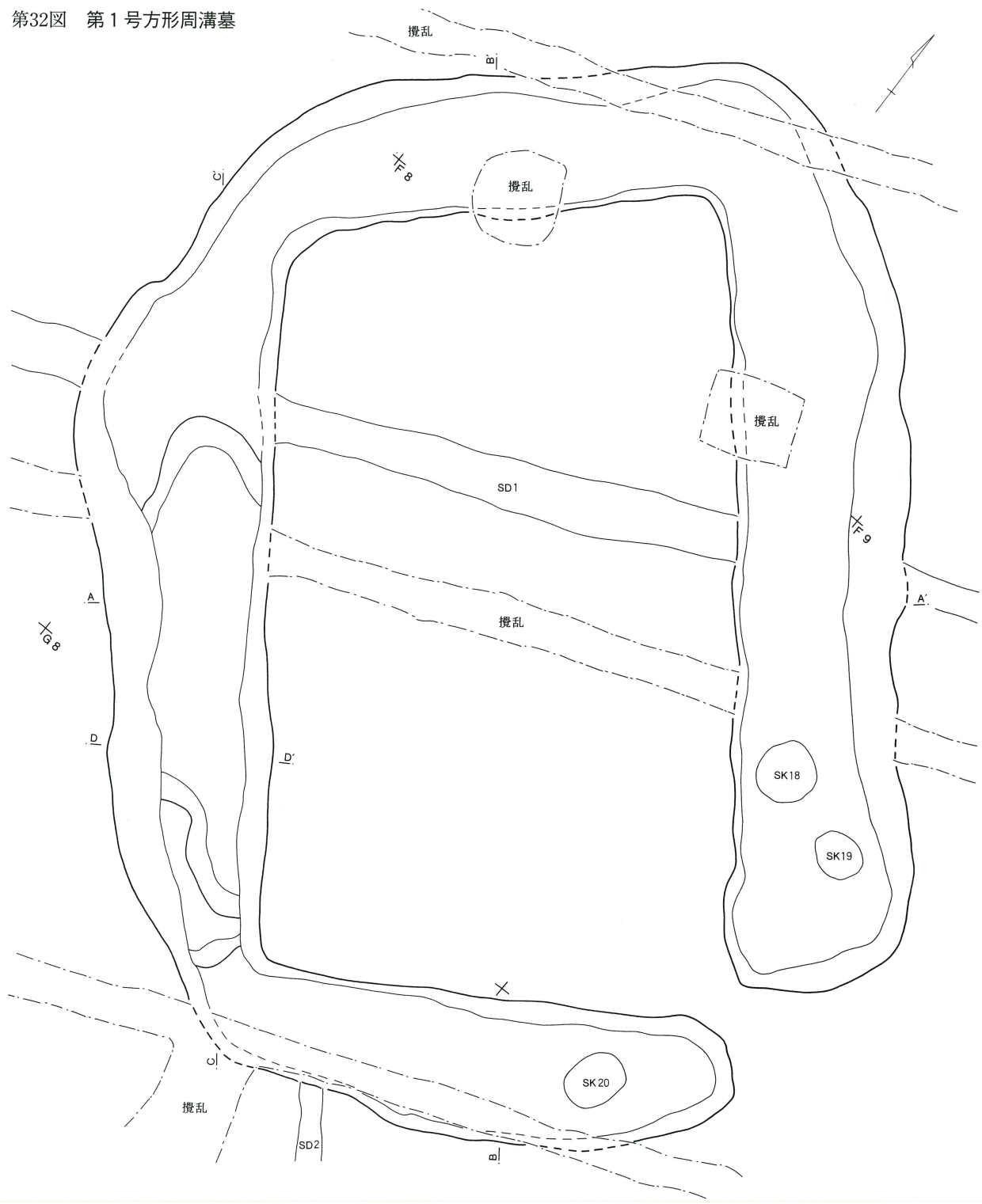
E・F・G-8・9グリッドを中心に位置する。周溝墓群中では最も北側に占地しており、南側には第2～7号方形周溝墓の一群が近接して営まれている。周溝及び方台部は東西方向に横断する第1号溝によって切られ、周溝内には数基の土壌が重複していた。

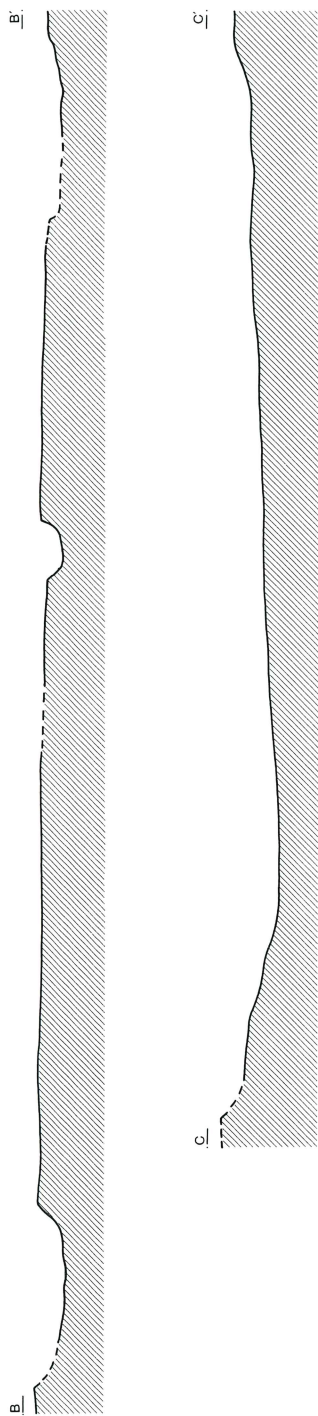
方台部の平面形は南北に長軸をもつ長方形で、周溝形態は南東コーナーに陸橋部を有する一隅切れ型である。陸橋部は「ハ」の字状に開き、上幅の間隔は0.9

第31図 方形周溝墓分布図

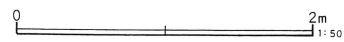
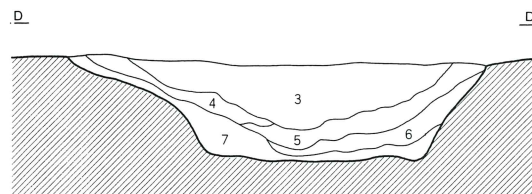
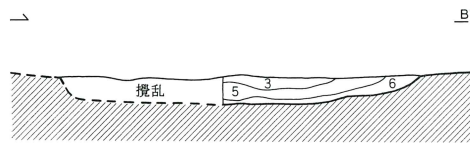
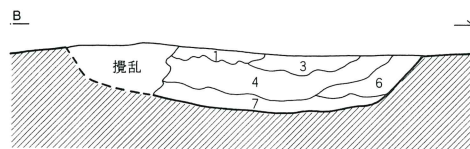
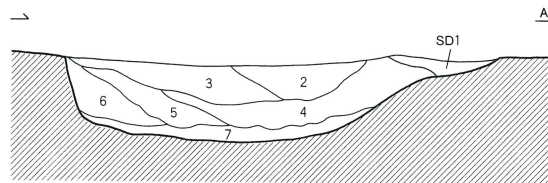
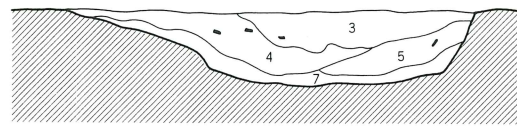


第32图 第1号方形周溝墓





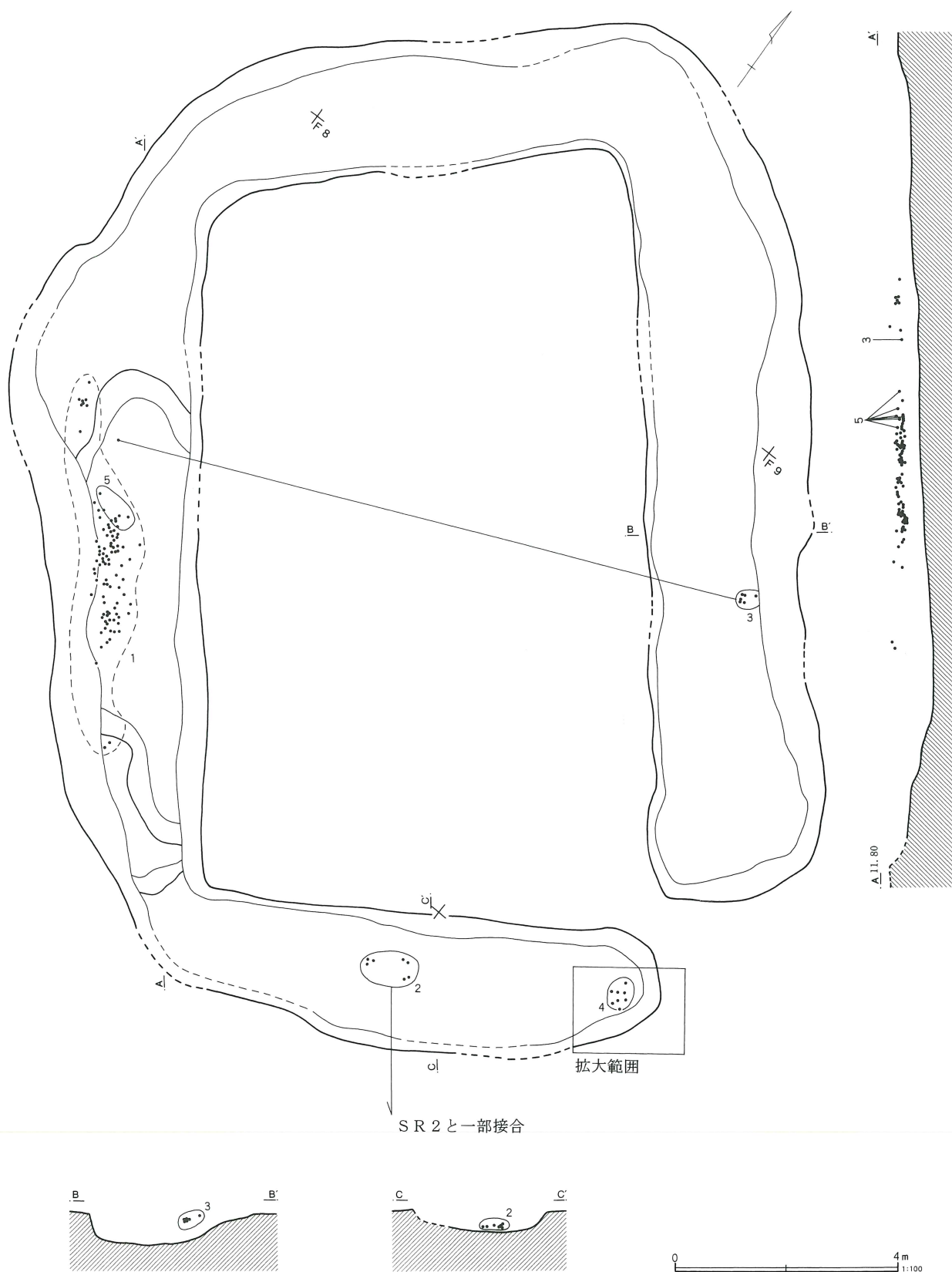
A_11.80



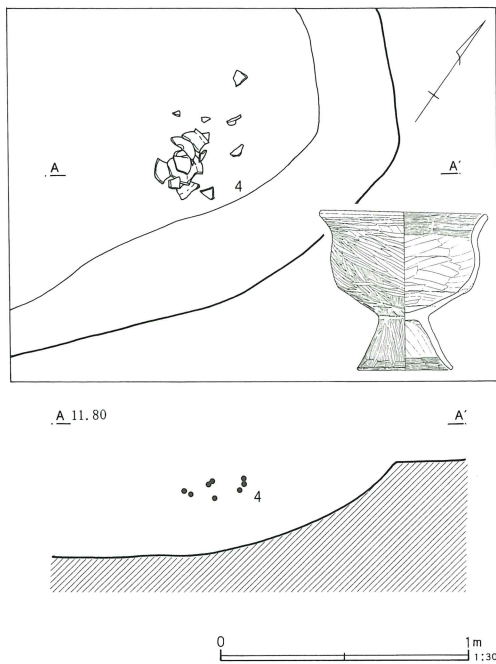
SR 1

- 1 暗灰褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒子、ローム粒子多量含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック、焼土粒子少量含む。
- 5 暗黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。

第33図 第1号方形周溝墓遺物分布図



第34図 第1号方形周溝墓遺物出土状況図(1)



mを測る。方台部上面の規模は南北長13.7m、東西長7.9m、周溝外周の規模は南北長17.8m、東西長14.3mを測り、群中では最大である。

周溝は、小型の方形周溝墓に比べて全体に幅が広く、掘り込みも深い特徴を示す。各周溝の状況についてみると、北溝は北西コーナーでやや幅を狭め、掘り込みが浅く、長さ9.3m、幅2.3m、深さ0.2mを測る。東溝はほぼ一定の幅で延びており、長さ15.5m、幅3.0m、深さ0.5mを測る。方台部側の壁の立ち上がりは急角度となるが、外周側は緩やかである。南溝は外周側が攪乱によって壊されているため南西コーナーの状態は不明瞭であるが、長さ約9.3m、幅2.4m、深さ0.4mを測る。底面は平坦で、断面低台形を呈する。西溝は外側に大きく張り出し、コーナーで幅を狭めている。規模は長さ15.5m、幅3.4m、深さ0.8mを測り、底面は中央が最も深く、コーナー寄りに低い段差を作り出していた。断面形は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは方台部側が急角度で、外周側は緩やかとなりテラス状となる部分がみられた。

覆土は大きく7層に区分される。下層の6・7層はロームブロックを多量に含む暗褐色土、暗黄褐色土で

ある。4・5層は焼土粒子を少量含んでいることから葬送儀礼に伴う痕跡とも考えられる。3層は方台部側からロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が流入しており、方台部盛土に起因する崩落土と考えられる。2層は東溝にだけ確認できた土層で、3層をレンズ状に掘り込んでいることから、溝中土壌あるいは溝中溝等の可能性も考えられるが明確にし得なかった。

遺物は群中で最も多く出土し、壺5、台付鉢1を数える。出土状況は、西溝の中央部から破砕された状態で複合口縁の壺1と壺の胴部破片5が、覆土上層の3・4層を中心に出土した。このうち壺1は西溝中央の比較的広い範囲から出土し、その出土状況は土器を破砕した後に、各部位ごとにまとめて遺棄したような意図的な状態を示していた(第35図)。東溝からは棒状浮文を有する壺の口縁部3が単独で出土し、破片の一部は西溝からも出土している。南溝の陸橋部脇からは台付鉢4が溝底面から少し浮いた状態で出土し(第34図)、接合状況から破砕後、一括して遺棄されたものと判断された。また、南溝中央の底面に接して網目状捺糸文を施文した壺の胴部破片2が出土し、その破片の一部は第2号方形周溝墓の東・西溝からも検出されている(第36図)。方形周溝墓間の葬送儀礼の共時性を示唆するものとして貴重な事例である。

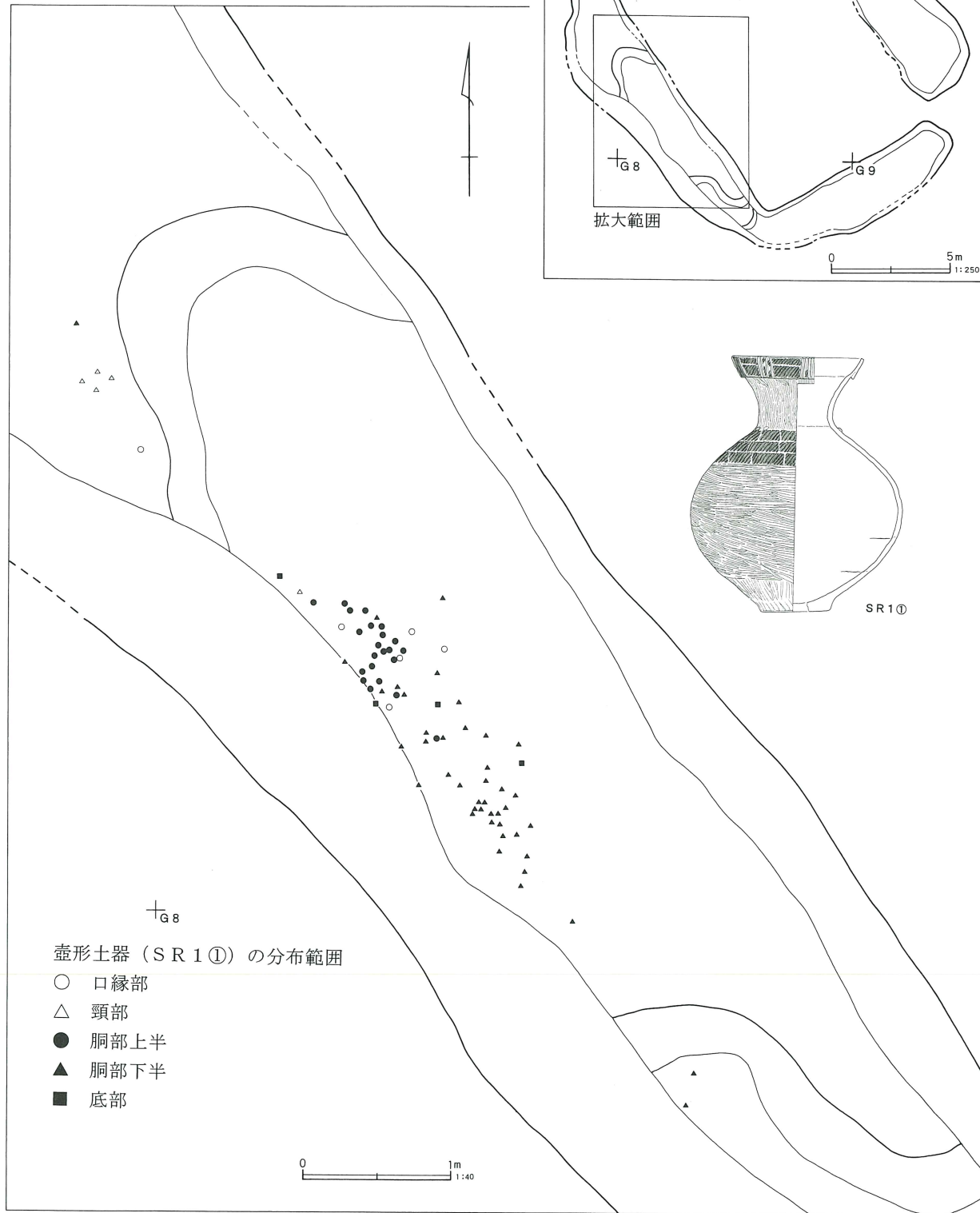
出土遺物(第37・38図)

1は複合口縁の壺である。口径17.7cm、器高34.0cm、底径9.4cmを測り、口縁部と胴部の一部を欠損する。口縁部は4ないし5本一組の沈線を8単位ほど施文し、附加条に類似した異段の縄を2段に充填する。頸部には2個一組の円形浮文を3単位貼付し、その下位に口縁部と同一原体の異段の縄を3段施文している。外面調整は、頸部が縦位のヘラミガキ、胴部は横位のヘラミガキ、底部付近は縦位のヘラミガキを施す。胴部内面は木口状工具によるナデを加える。底部外面はヘラケズリによって整形し、焼成後穿孔している。赤彩は口縁部と肩部の文様帯を除く胴部外面と口頸部内面に施す。

2は球胴形の壺である。口頸部を欠損しているが、

第35図 第1号方形周溝墓遺物出土状況図(2)

拡大範囲

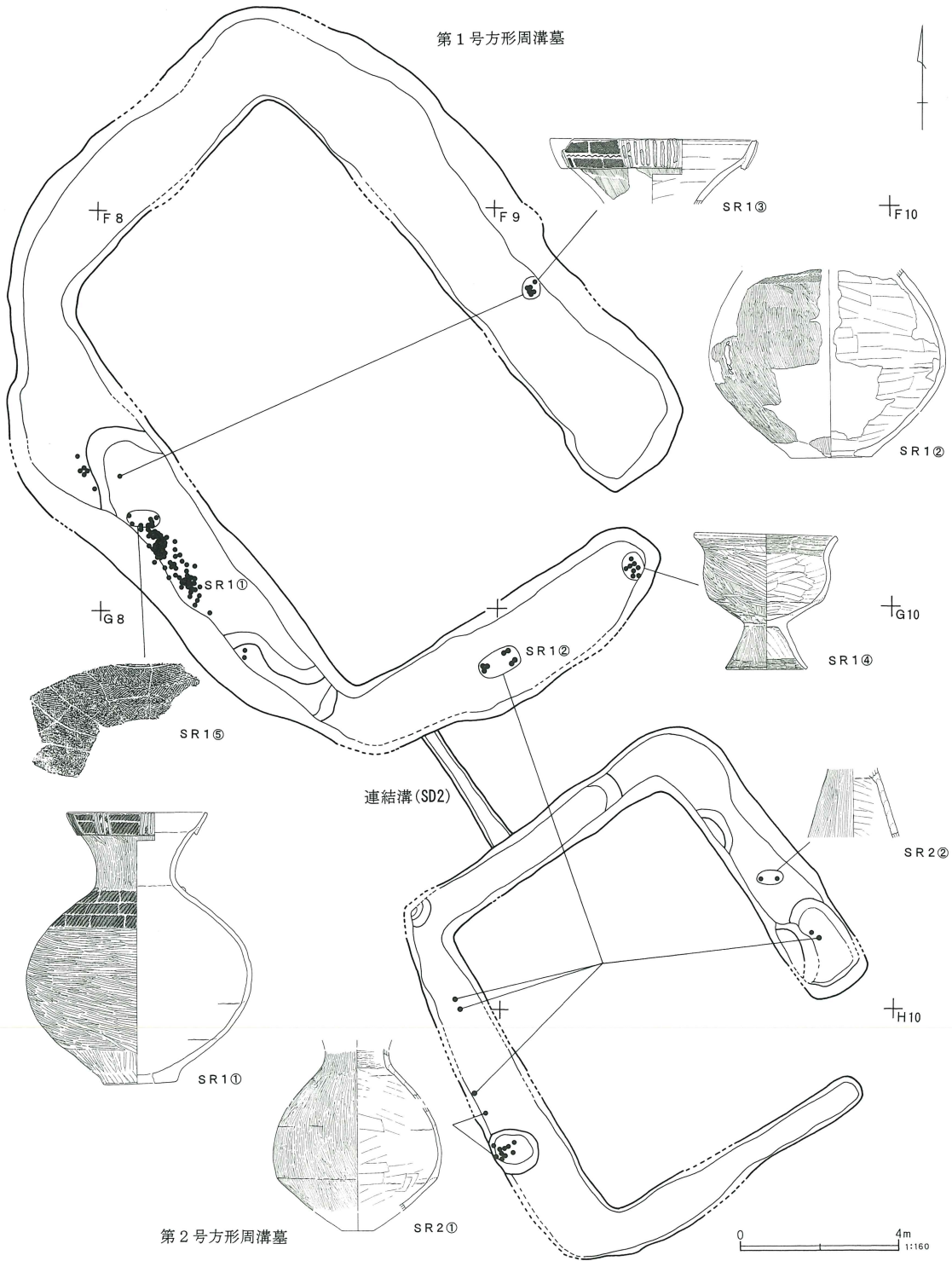


肩部に網目状撚糸文を施文し、その下部に縦位のヘラミガキを施す。胴部最大径は29.7cmに復元され、胴部に穿孔がみられる。器壁を抉るように穿たれた小孔で鼠の歯痕の可能性もある。底部は木葉痕を残し、焼成

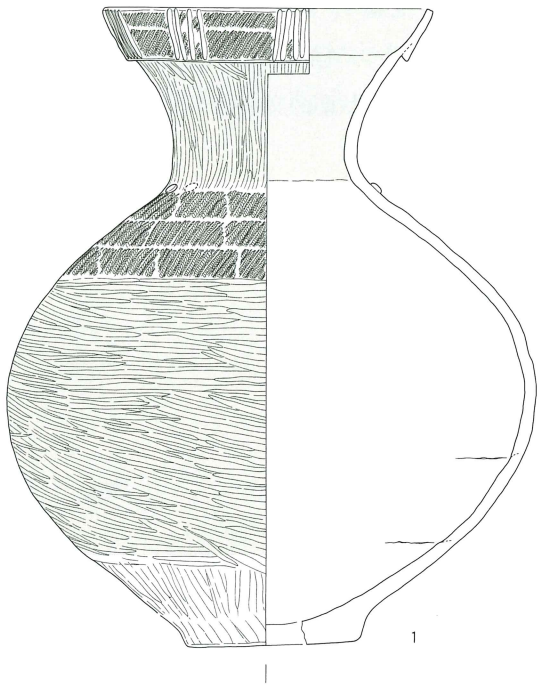
後の穿孔がみられ、底径10.2cmを測る。内面は木口状工具によるナデを施す。胴部外面を赤彩する。

3は複合口縁壺の口縁部破片で、復元口径26.1cmを測る。口縁部はS字状結節文を有する羽状縄文を施文

第36図 第1・2号方形周溝墓遺物分布図



第37图 第1号方形周满墓出土遗物(1)



SR 1 ① 拓影 (1/2)



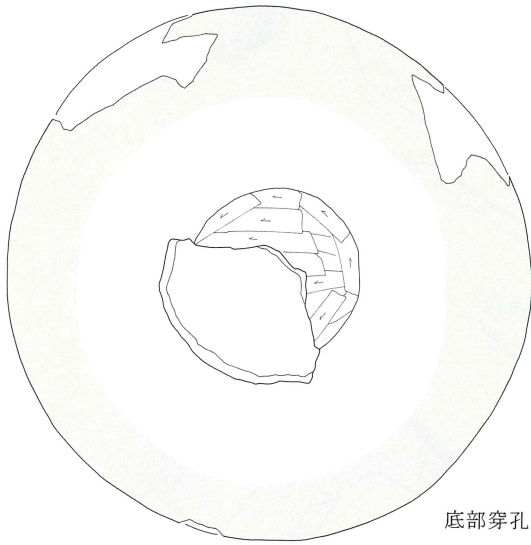
(口縁部)



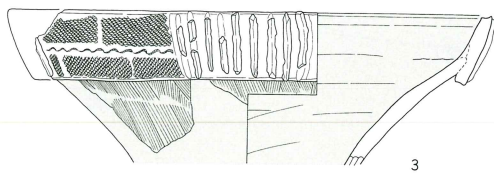
(肩部)



胴部穿孔



底部穿孔

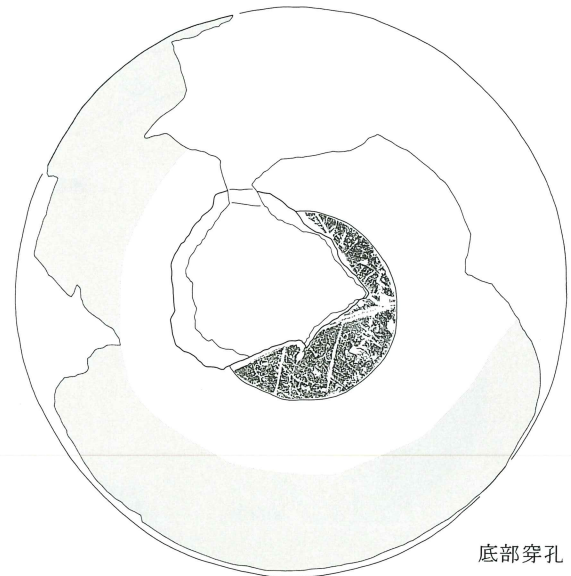


3

SR 1 ③ 拓影 (1/2)



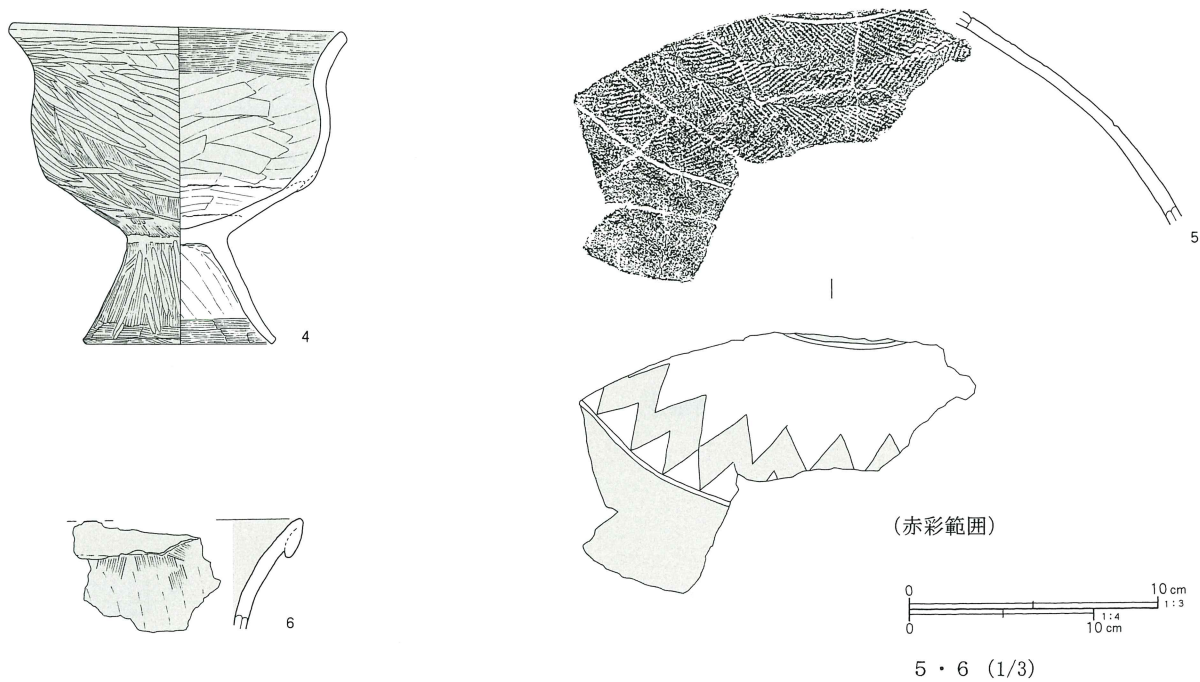
(口縁部)



底部穿孔



第38図 第1号方形周溝墓出土遺物（2）



し、9本一組の棒状浮文を貼付する。頸部は目の細かいハケメを施した後、縦位にヘラミガキする。内面はナデを施している。赤彩は頸部外面と内面に施す。胎土に白色砂粒子を多量に含む。胎土及び色調の特徴が壺5と共通していることから同一個体の可能性が高い。東溝中央の覆土上層からまとまって出土したもので、西溝からも破片が1点出土している。

4はほぼ完形の台付鉢である。胴部下半に稜を有するもので、口径17.8cm、器高17.0cm、器台部径10.1cmを測る。胴部は縦位のハケメ後、斜位ないし横位のヘラミガキを施す。口縁部内面は横位のハケメの後、ヨコナデしている。胴部内面は木口状工具による横位のナデを施す。器台部は縦位のハケメと下端に横位のハケメを施した後、縦位のヘラミガキを加える。器台部

内面は指ナデを施した後、下端に横位のハケメを施す。外面と胴部内面を赤彩する。南溝の陸橋部脇出土。

5は壺の肩部の破片である。棒状工具により沈線区画した中に羽状縄文を2段施文している。また、上段にはS字状結節文を施文し、下段には菱形文に近い山形文を横帯させ、その内部を赤彩する。胴部下位は目の細かいハケメの後、横位のヘラミガキを施し、赤彩する。内面は木口状工具を用いた横位のナデを施す。胎土中に白色砂粒の混入が顕著で、壺口縁部3と同一個体の可能性が高い。西溝出土。

6は幅の狭い折り返し口縁壺の口縁部破片である。内外面ともに赤彩を施す。外面は細かいハケ調整を施した後、ナデを加える。内面はナデ調整である。南溝の陸橋部寄りの第20号土壌に混入していた。

第2表 第1号方形周溝墓遺物観察表（第37・38図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(17.7)	34.0	9.4	ABFGJ	A	淡褐色	80%	西溝出土 赤彩 底部穿孔
2	壺			(10.2)	ABFGJ	A	淡褐色	60%	南溝出土 SR2と接合 赤彩 胴部・底部穿孔
3	壺	(26.1)			ABEGJ	A	灰褐色	30%	東・西溝出土 外面赤彩
4	台付鉢	17.8	17.0	10.1	ABDGJ	A	乳白色	95%	南溝陸橋部脇出土 赤彩 外面ヘラミガキ
5	壺				ABEFJ	A	灰褐色		西溝出土 肩部破片 外面赤彩
6	壺				AFGJ	A	乳白色		南溝、SK20 出土 口縁部破片 赤彩

第2号方形周溝墓（第39～42図）

G・H-9グリッドを中心に位置する。第1号方形周溝墓の南側に約3m離れて所在し、北溝の中央が第2号溝によって連結されている。また、東側には第3・4号方形周溝墓が近接する。南東コーナーの陸橋部は第3号方形周溝墓と一部重複し、土層断面の観察から切られていることが確認された。

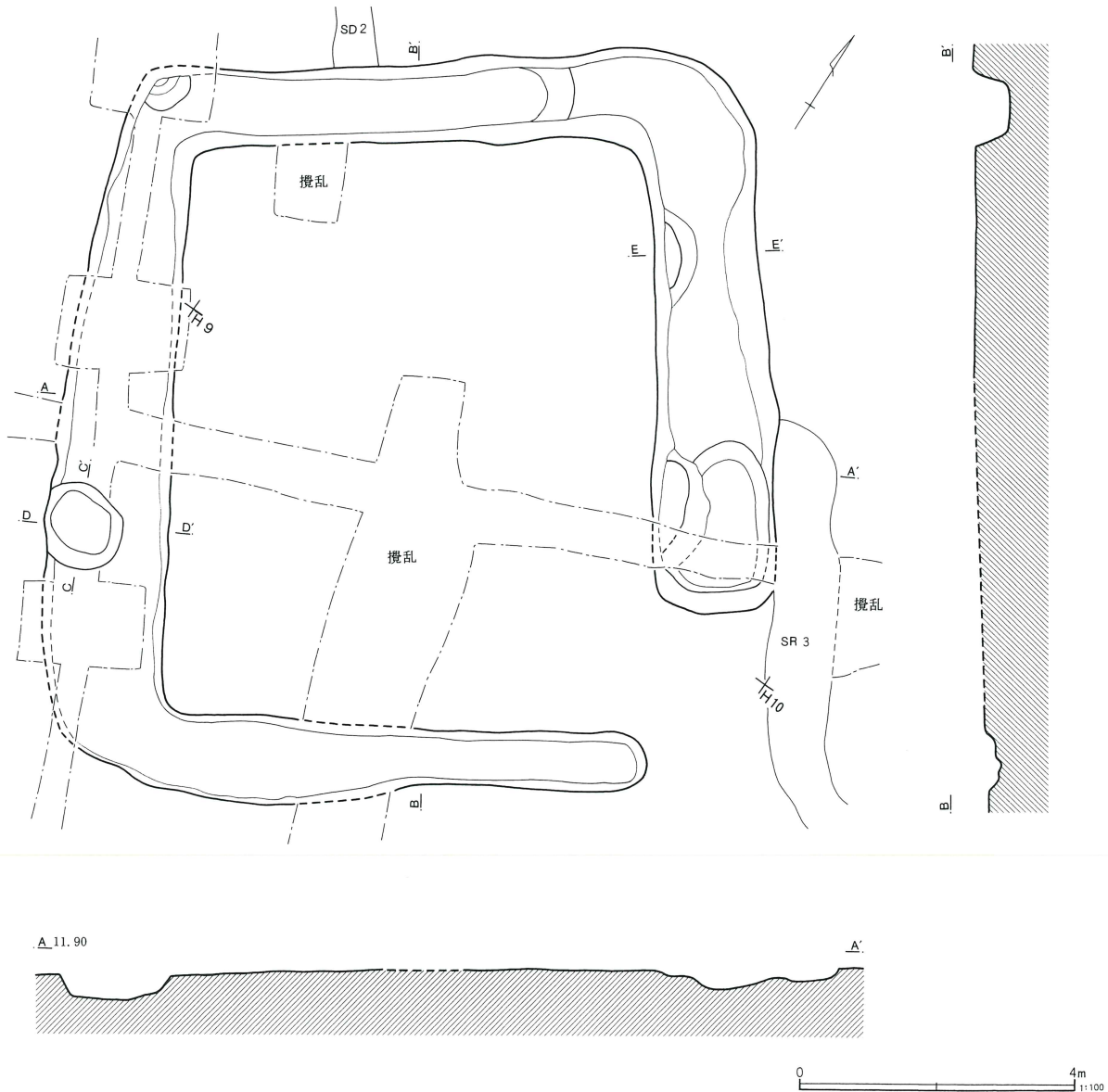
方台部の平面形は南北に長軸をもつ長方形で、周溝形態は南東コーナーに陸橋部を有する一隅切れ型である。陸橋部は幅広で、間隔は2.0mを測る。方台部規

模は南北長8.4m、東西長7.0m、周溝を含めた規模は南北長8.8m、東西長7.3mを測り、群中では第1号方形周溝墓に次いで第2位の規模を誇る。

周溝は、南溝が削平のため浅くなっているほかは、全体に掘り込みがしっかりしている。規模は幅0.85～1.8m、深さ0.2～0.5mを測り、北溝が最も掘り込みが深く、断面台形で立ち上がりも急角度である。

覆土は大きく3層に区分される。最下層の3層はロームブロックを少量含むことから墳丘盛土の流入土の可能性も考えられる。また、上層の1・2層には焼

第39図 第2号方形周溝墓



土粒子が少量含まれており、埋葬儀礼に伴う痕跡とも考えられる。

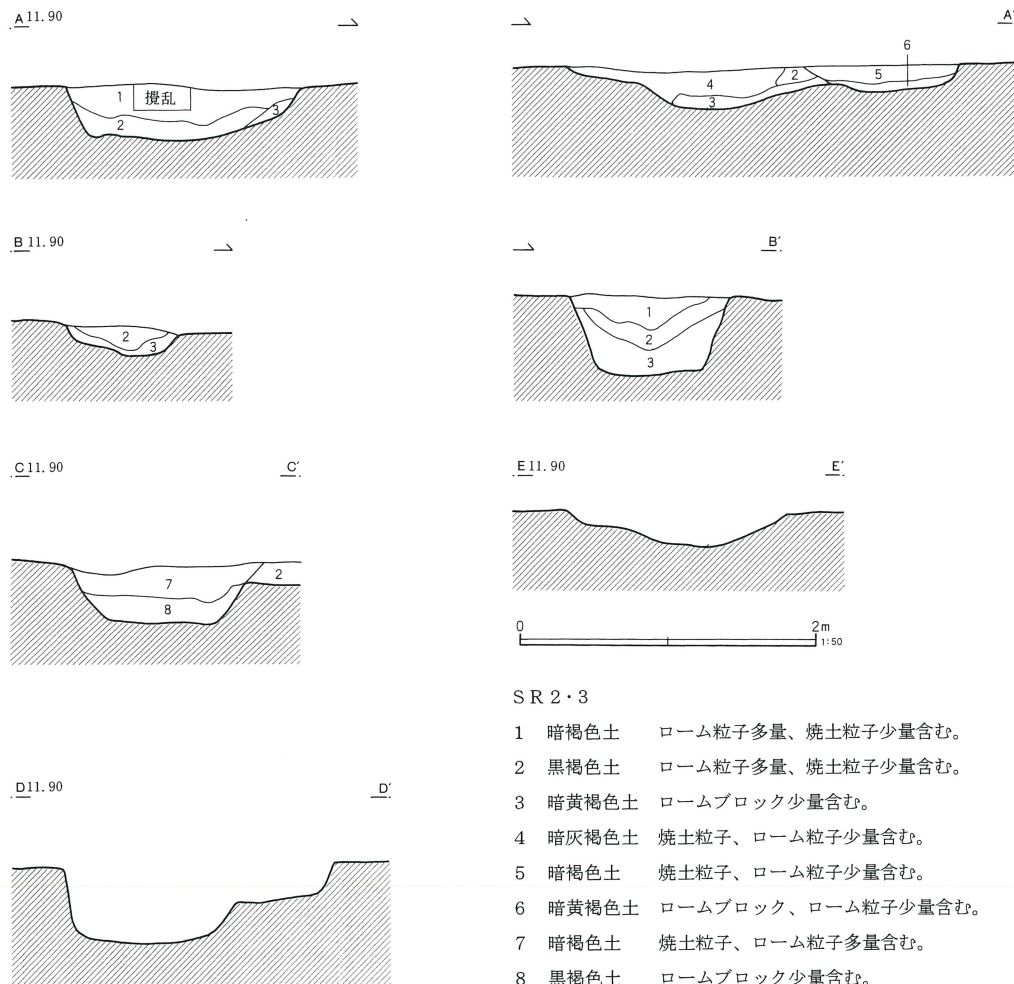
東溝陸橋部寄りの底面は土壌状に浅く凹み、方台部裾の2箇所に半円形のテラスを付設し、壁の立ち上がりも緩やかである。北溝は北東コーナー寄りに20cmほどの段差を作り出し、北西コーナーの外周側に径75cm、深さ22cmの浅いピットを有する。西溝の中央付近には外周部に接して溝中土壙1基が検出された。

溝中土壙は楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.2m、溝底面からの深さ0.3mを測る。土層断面の観察から

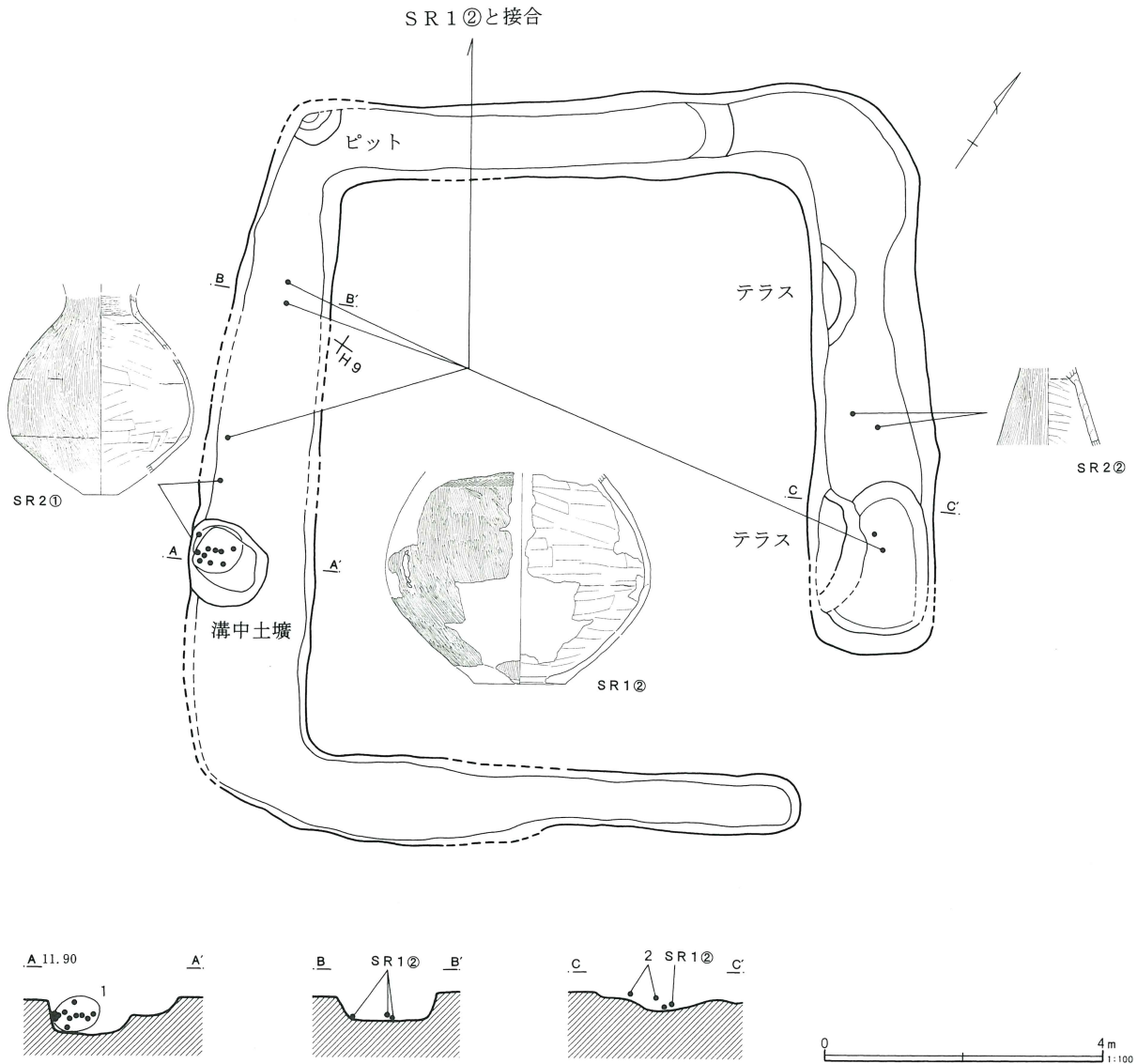
周溝覆土を切り込んでいることが確認されているが、明確な被覆土等は確認されなかった。なお、覆土上層には焼土粒子、ローム粒子が多量に含まれていた。

遺物の出土状況は、西溝の溝中土壙内から壺1と、東溝から高坏2が出土した。壺1は溝中土壙の北側にやや偏在し、底面から少し浮いたものから上層にかけて層位的に幅をもった状態で検出された。接合状況から破碎後、遺棄されたものと判断される。東溝から出土した高坏2は、溝底面から少し浮いた状態で出土した。また、先述したように東溝と東溝陸橋部の溝底面

第40図 第2号方形周溝墓土層断面



第41図 第2号方形周溝墓出土遺物分布図



上から第1号方形周溝墓出土の大型壺2の破片が数点出土しており、遺構間接合例として注目される。

出土遺物 (第42図)

1は胴部径約21cmの壺の頸部から胴部にかけての破片で、胴部下半に明瞭な稜を有する。外面調整は縦位のヘラミガキ、内面調整は木口ナデを施す。接点がなく図上復元である。西溝の溝中土壌内部から出土した。

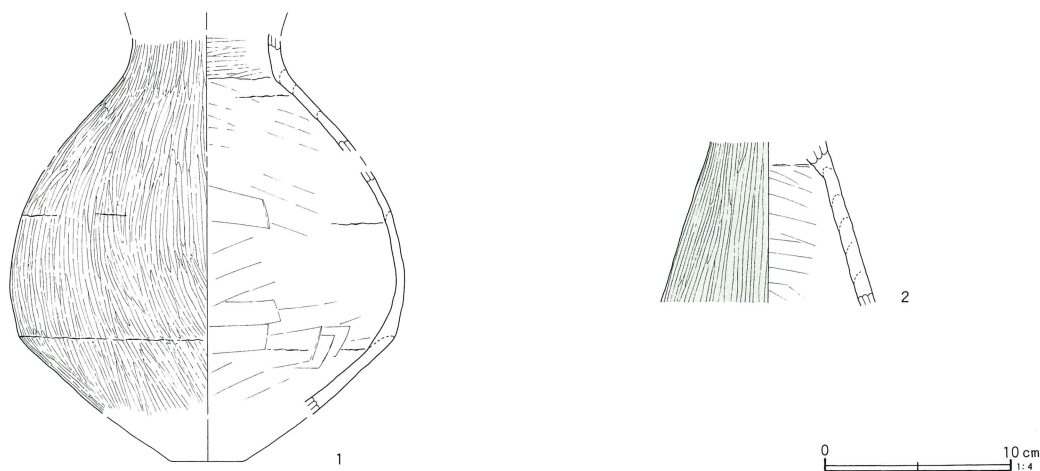
2は高杯の脚部片である。外面は縦方向の細かいヘラミガキを入念に施し、赤彩する。内面はナデを施す。東溝陸橋部出土。

第3号方形周溝墓 (第43・44図)

G・H-10グリッドを中心に位置する。北溝を共有する形で第4号方形周溝墓が北側に接続して構築されている。周溝覆土の観察から西側に近接する第2号方形周溝墓の東溝を切って構築し、東側に近接する第5号方形周溝墓によって切られていることが判明した。従って、遺構の重複関係は、SR2→SR3→SR4→SR5の順序と推定される。

方台部の平面形は南北に長軸をもつ長方形で、北西コーナーと南東コーナーの2箇所に陸橋部を有する二

第42図 第2号方形周溝墓出土遺物



第3表 第2号方形周溝墓遺物観察表（第42図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺				BDFGJ	A	淡褐色	45%	西溝、溝中土壙出土 外面ヘラミガキ
2	高坏				ABEFJ	A	乳白色	30%	東溝陸橋部出土 外面赤彩・ヘラミガキ

隅切れ型と考えられる。北西コーナーの陸橋部は直線的であるのに対して、南東コーナーの陸橋部は「ハ」の字状に開く形態である。方台部規模は南北長6.0m、東西長4.8m、周溝を含めた規模は南北長7.7m、東西長7.9mである。

周溝は、東溝が幅2.3mと幅広くなっているほかは、ほぼ均一な幅で巡り、幅0.6~1.2m、深さ0.1~0.25mを測る。周溝の断面形は浅いU字形で、底面は概ね平坦である。覆土は大きく3層に区分され、2層には焼土粒子・ローム粒子の混入が認められた。

遺物は東溝陸橋部付近から赤彩された小型埴の口縁部片と、西溝陸橋部付近から壺の胴部片等が出土した。
出土遺物（第45図）

1は小型埴の口縁部片である。内外面とも光沢のあるヘラミガキを入念に施したもので、器壁は非常に薄い。また内外面に赤彩を施す。東溝陸橋部出土。

2は小片のため全体の器形は不明であるが、壺、あるいは高坏の口縁部片と考えられる。口唇部外面に弱い段を作り出し、端部を面取りして仕上げている。内面には横位のヘラミガキを丁寧に施す。内外面とも赤

彩痕が残る。周溝覆土一括。

3は胴部径約17cmの壺の胴部片である。外面調整は縦位のヘラミガキ、内面調整は工具幅の狭い木口ナデを施す。外面に黒斑がみられ、内面には粘土紐の接合痕を残す。西溝陸橋部出土。

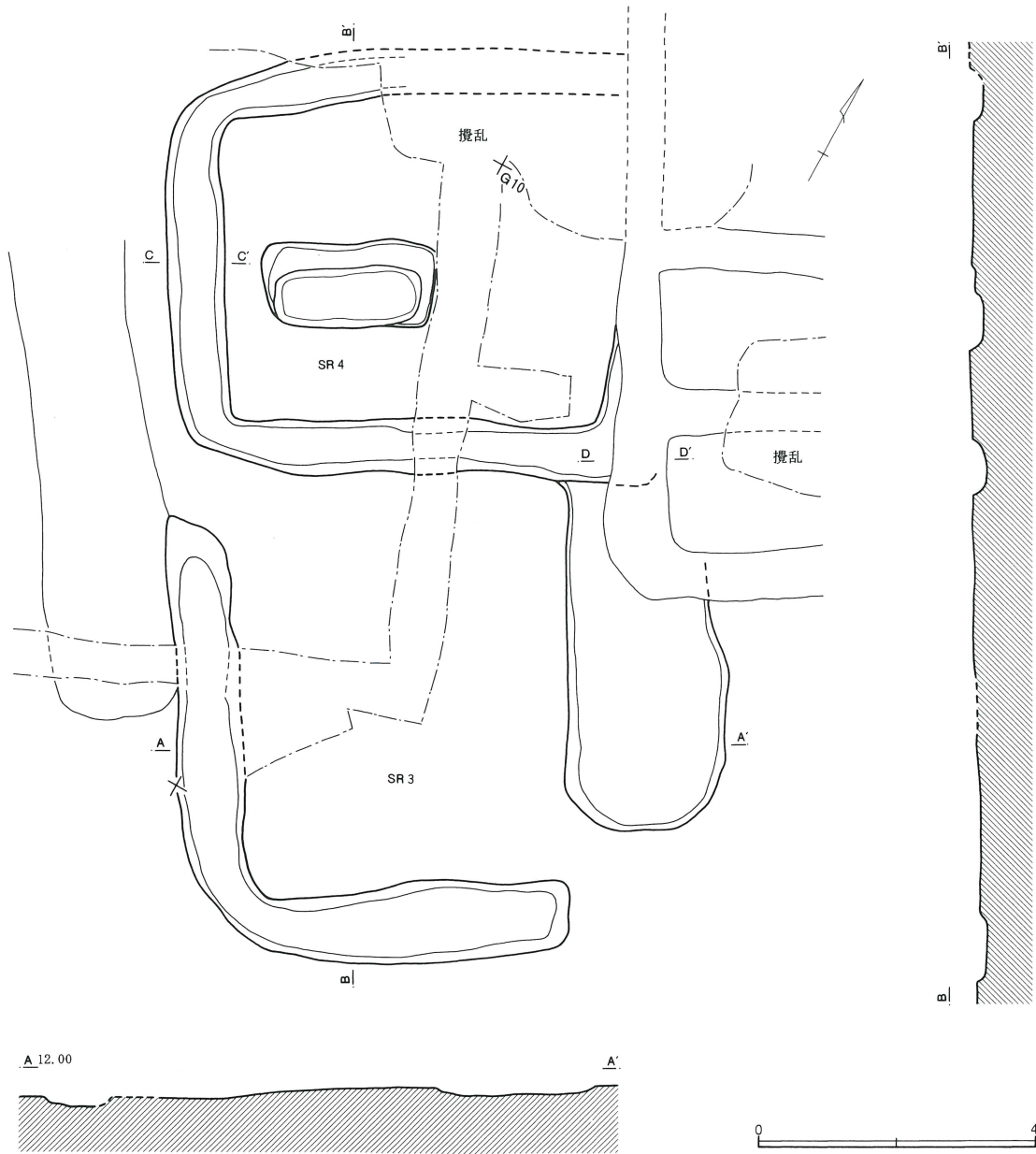
第4号方形周溝墓（第43・44図）

G-9・10グリッドに位置する。南側に第3号方形周溝墓が接続し、東側に第5・6号方形周溝墓、西側に第2号方形周溝墓が近接する。北溝から東溝にかけては後世の攪乱によって大きく壊されており、第5・6号方形周溝墓との新旧関係は明確ではないが、南東コーナーの覆土の状況から両者に切られているものと判断した。

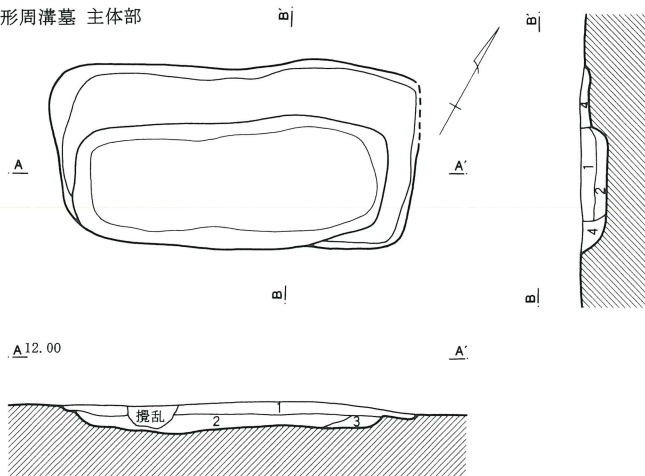
方台部は東西に長い長方形で、周溝は全周する形態と考えられる。方台部規模は南北長4.6m、東西長5.7m、周溝を含めた規模は南北長4.9m、東西長5.9mと推定される。

周溝はほぼ均一に巡り、幅0.7~0.8m、深さ0.15~0.25mを測る。周溝の断面形は浅いU字形で、底面は

第43図 第3・4号方形周溝墓・主体部



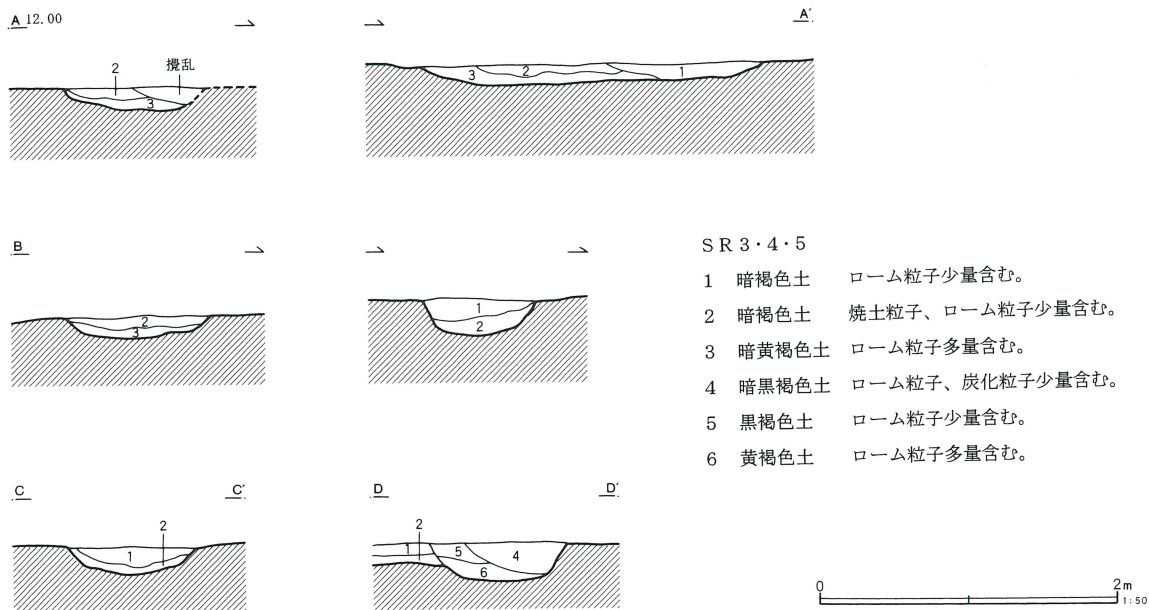
第4号方形周溝墓 主体部



SR4主体部

- 1 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。

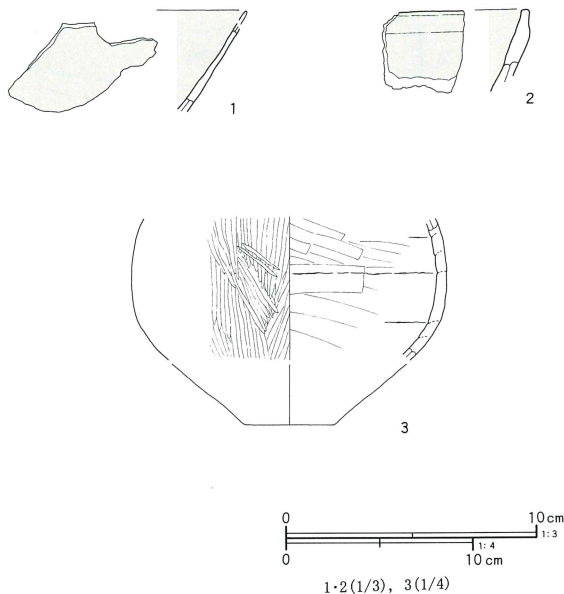
第44図 第3・4号方形周溝墓土層断面



概ね平坦である。覆土は大きく2層に区分され、焼土粒子等の混入が少量認められた。なお、周溝からは遺物は出土しなかった。

方台部中央のやや西に偏した位置に、長径2.5m、短径1.2m、深さ0.2mの2段に掘り込んだ長方形の土壇が1基検出された(第43図)。内側の掘り込み部分の規模は長径2.1m、幅0.8mで、断面箱形を呈する。覆土は4層に区分され、ローム粒子を混入する暗褐色土を主体としている。このうち壁際に堆積した4層はロームブロックを多量に含むことから人為的な埋め戻し土と考えられ、木棺等の裏込めの可能性もある。この土壇の性格については、規模、形態、位置等の様相からみて主体部の可能性が高いが、土壇内から遺物がまったく出土しておらず、確証を得ることはできなかった。

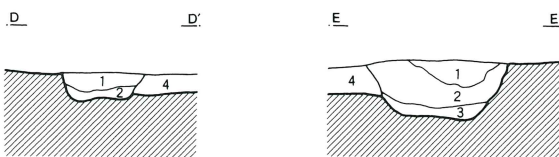
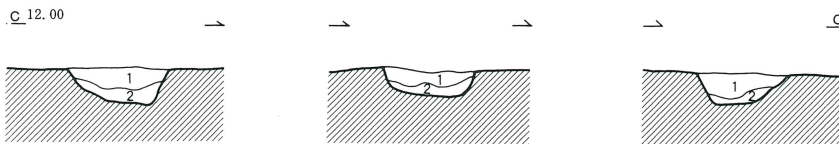
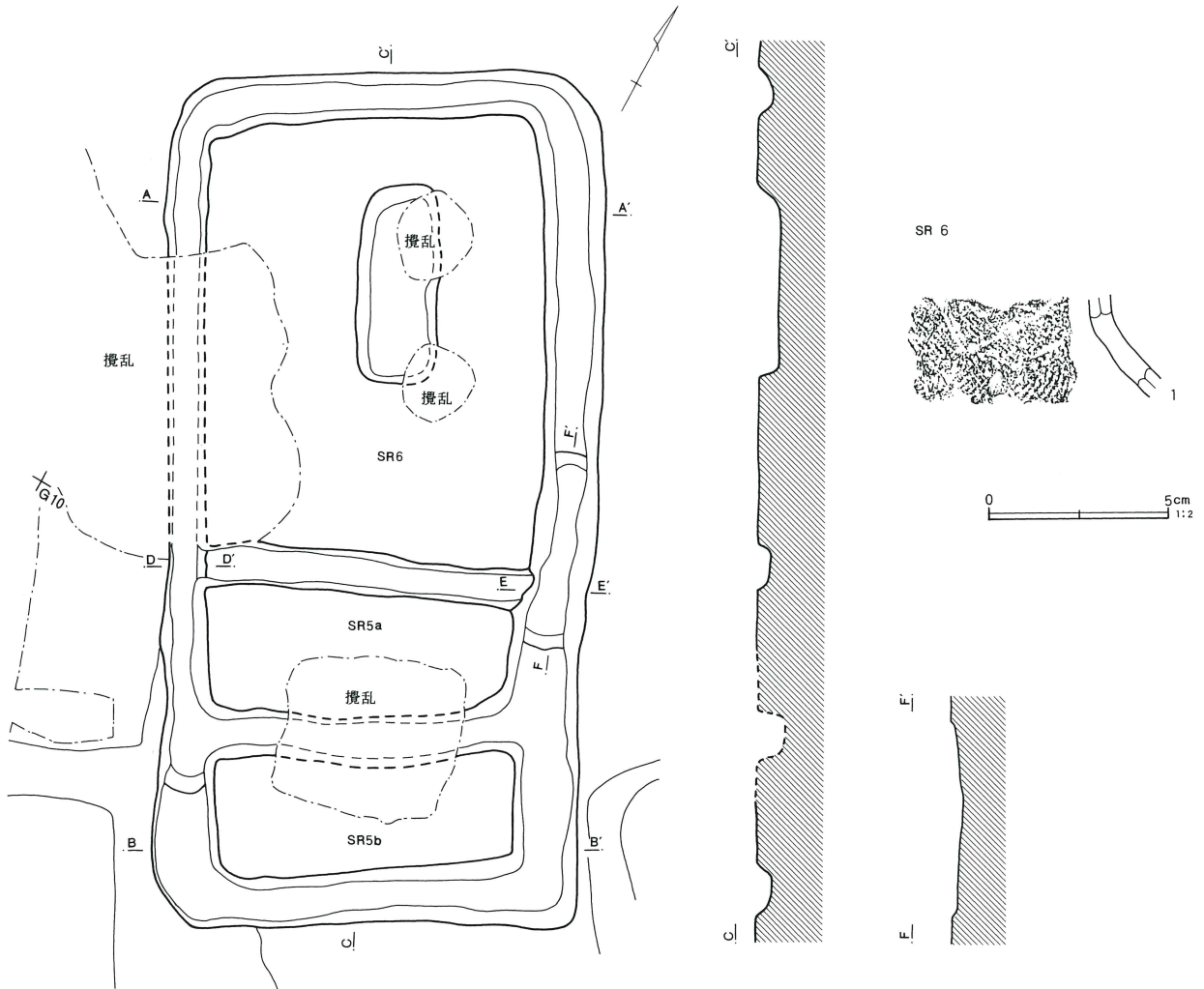
第45図 第3号方形周溝墓出土遺物



第4表 第3号方形周溝墓遺物観察表(第45図)

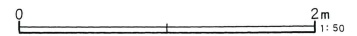
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小型埴				ABEGJ	A	褐色		東溝陸橋部付近出土 内外面赤彩・ヘラミガキ
2	壺				A EFGJ	A	乳白色		周溝一括 赤彩 内面ヘラミガキ
3	壺				A EFGJ	A	淡褐色	35%	西溝陸橋部付近出土 外面ヘラミガキ

第46図 第5・6号方形周溝墓・出土遺物



SR 5・6

- 1 暗褐色土 ローム粒子、黒色粒子多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量含む。



第5号方形周溝墓（第46図）

F・G-10グリッドに位置し、第6号方形周溝墓の南側に接続して構築されていた。調査当初は第6号方形周溝墓の短辺側を拡張して構築されたものと想定していたが、精査してみると方台部の中央を二分するように溝（中央溝）が検出されたことから、「コ」の字形の溝を2次にわたって掘削して、方台部を拡張したものと判断した。また、周溝覆土の土層観察によれば、西側に接する第3・4号方形周溝墓の周溝を切って構築していることが確認された。

方台部は中央溝を境に二分されており、便宜的に北側をSR 5 a、南側をSR 5 bと仮称した。方台部全体の平面形は比較的形の整った方形で、規模は南北長4.0m、東西長4.2mを測る。方台部中央に大きな攪乱があり、主体部等は確認されなかった。

周溝は幅0.6～0.9m、深さ0.2～0.4mを測り、断面形は浅いU字形である。底面は平坦であるが、第6号方形周溝墓に接する北東コーナーに溝中土壌1基が検出された。掘り込みが浅く、明確な被覆土や周溝覆土への掘り込みは確認できなかった。遺物はまったく出土していない。

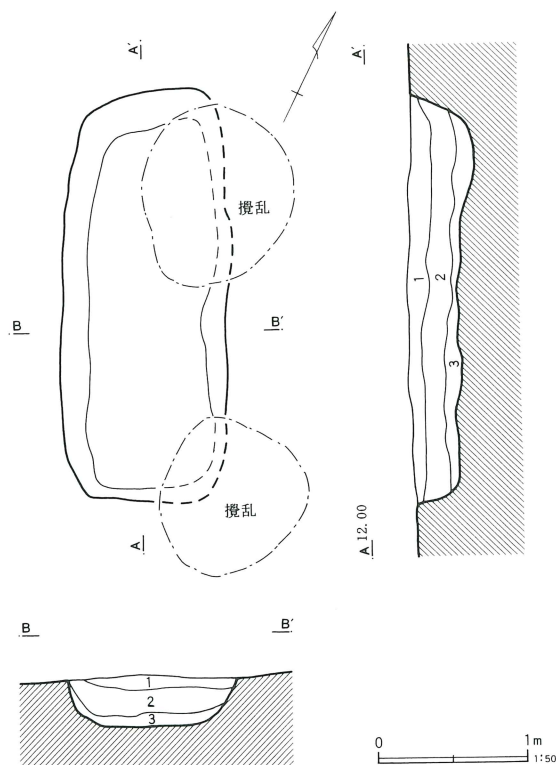
第6号方形周溝墓（第46・47図）

F-10グリッドに位置する。第5号方形周溝墓の北側に接続して構築されており、周溝覆土の観察から第5号方形周溝墓よりも古いことが確認された。また、西溝は攪乱によって大きく壊されており、第4号方形周溝墓との新旧関係については不明である。

方台部は南北に長軸をもつ長方形で、周溝の全周する形態と考えられる。方台部の規模は南北長6.2m、東西長4.6m、周溝を含めた規模は南北長7.3m、東西長4.9mである。

周溝は幅0.6～0.9m、深さ0.1～0.25mを測り、断面

第47図 第6号方形周溝墓主体部



SR 6 主体部

- 1 褐色土 ローム粒子、黒色粒子多量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、黒色粒子多量、焼土粒子少量含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック少量含む。

形は浅いU字形である。底面は平坦であるが、南東コーナーに第5号方形周溝墓に伴うと考えられる溝中土壌1基が検出されている。

方台部中央のやや北寄りに、長径2.75m、短径1.1m、深さ0.35mの長方形の土壌が検出された（第47図）。位置的にみて主体部の可能性が高いが、遺物は壺の頸部破片が出土したのみで確認は得られなかった。

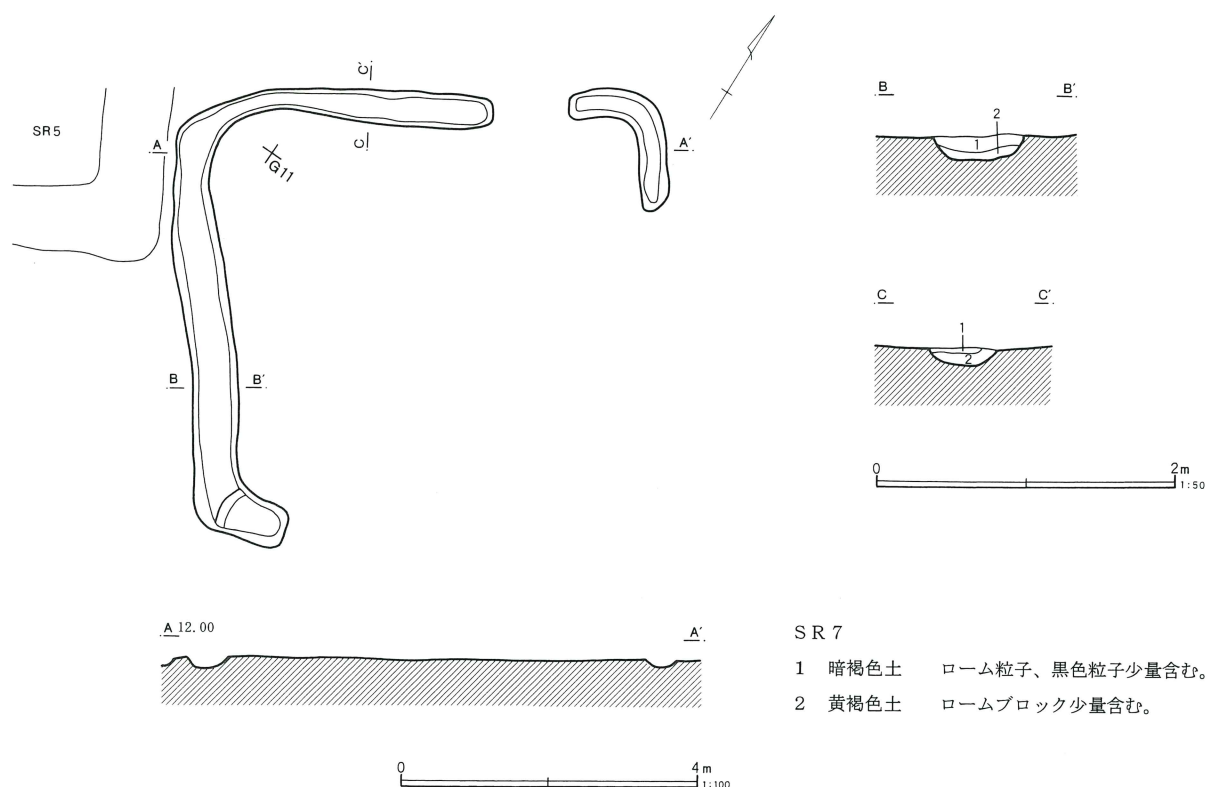
出土遺物（第46図）

1は壺の頸部破片である。外面に細かい縄文を施文する。拓影にみられる山形状の沈線は、調査時における傷である。内面はナデを施す。

第5表 第6号方形周溝墓遺物観察表（第46図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺				ABEFJ	B	淡褐色		主体部出土 頸部破片

第48図 第7号方形周溝墓



第7号方形周溝墓（第48図）

F・G-10・11グリッドに位置する。第5号方形周溝墓の東側に近接し、10cmほどの間隔しか離れていない。周溝の掘り込みが全体に浅く、南・東辺は削平のため消滅し、部分的に検出したにすぎない。

周溝が全周していたと仮定した場合、方台部の平面形は北西コーナーが丸く張り出した、長軸を東西方向にとる長方形と想定される。方台部規模は南北長5.2m、東西長5.7m、周溝を含めた規模は南北長6.1m、東西長6.7m前後と推定される。

周溝は幅0.4~0.6m、深さ0.1~0.15mを測り、断面形は浅いU字形である。覆土は2層に区分され、ロームブロックの混入が認められた。周溝底面は概ね平坦で、南西コーナーに段差を作り出している。北溝の北東コーナー寄りには周溝の途切れる部分が認められた。主体部は確認されなかった。

遺物の出土がなく明確ではないが、位置関係からすれば第5号方形周溝墓に後続して構築された蓋然性が高い。

第8号方形周溝墓（第49・50図）

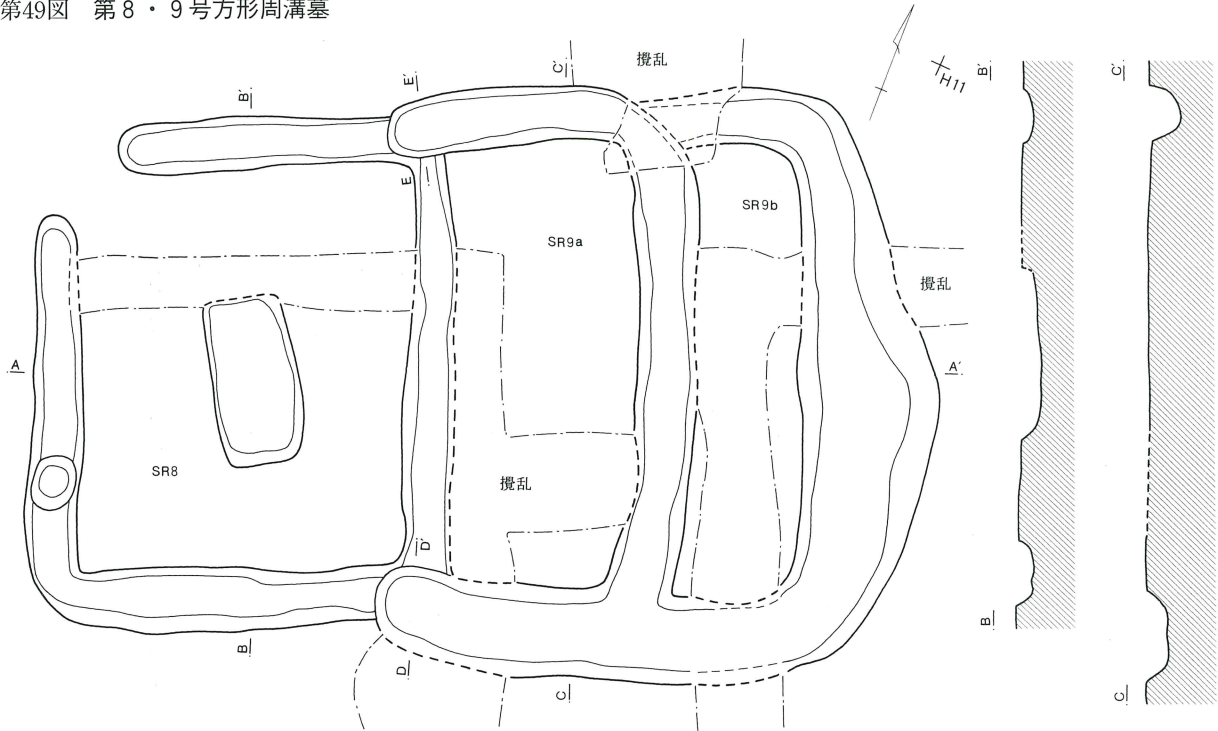
墓域の南端にあたる、H・I-10グリッドに位置する。東側には「コ」の字形に周溝を2次にわたって拡張した第9号方形周溝墓が接続した状態で構築されていた。

方台部は南北に長軸をもつ長方形で、周溝形態は北西コーナーに陸橋部を有する一隅切れ型である。方台部の規模は南北長5.4m、東西長4.4m、周溝を含めた規模は南北長6.8m、東西長5.7mである。

周溝は幅0.6~0.9m、深さ0.1~0.3mを測り、断面形は浅いU字形である。底面は概ね平坦で、南西コーナー寄りの西溝に直径0.7×0.6mの円形の溝中土壇1基が検出された。掘り込みは13cmと浅く、明確な被覆土や周溝覆土への掘り込みは確認できなかった。

方台部中央に長径2.2m、短径1.2m、深さ0.2mの長方形の土壇が検出された（第50図）。主軸方向は方台部の長軸方向より若干西へ振れ、一部攪乱を受けていた。位置的にみて主体部の可能性が高いが、副葬品等の出土がなく、確証は得られなかった。

第49図 第8・9号方形周溝墓



A 12.00

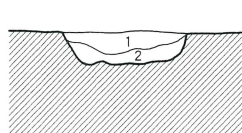


0 4m 1:100

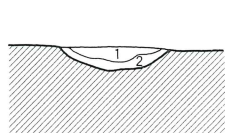
A 12.00



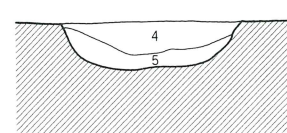
B



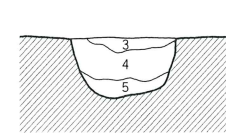
B'



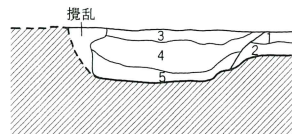
C



C'

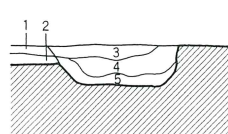


D



D'

E



E'

SR 8・9

- 1 暗黒褐色土 焼土粒子、ローム粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒子、ローム粒子少量含む。
- 4 暗黒褐色土 焼土粒子、ローム粒子多量含む。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。

0 2m 1:50

第9号方形周溝墓（第49図）

H-10・11グリッドに位置する。調査当初は第8号方形周溝墓の長辺側を拡張して構築されたものと想定していたが、精査してみると、方台部の中央を二分するように溝（中央溝）が検出された。再度、方形周溝墓の外部へ溝が延びていないか精査したが確認することができず、第5号方形周溝墓と同様、2次にわたって「コ」の字形に溝を巡らして、方台部を拡張したものと判断した。

方台部は中央溝を境に二分されており、便宜的に西側をSR9a、東側をSR9bと仮称した。方台部全体の平面形は南北に長軸を有する長方形で、規模は南北長6.0m、東西長4.7mを測る。方台部は攪乱が著しく、主体部等は確認できなかった。

周溝は、SR9bに伴う東溝が外側に張り出しているほかは、ほぼ均一に巡り、幅0.9~1.9m、深さ0.2~0.4mで、断面形は台形を呈する。底面は概ね平坦であるが、SR9aの周溝は第8号方形周溝墓よりも深く掘り込まれ、北東コーナーも攪乱によりやや不分明であるが、SR9bの周溝より一段深く掘り込んでいた。遺物はまったく出土していない。

5. 近世

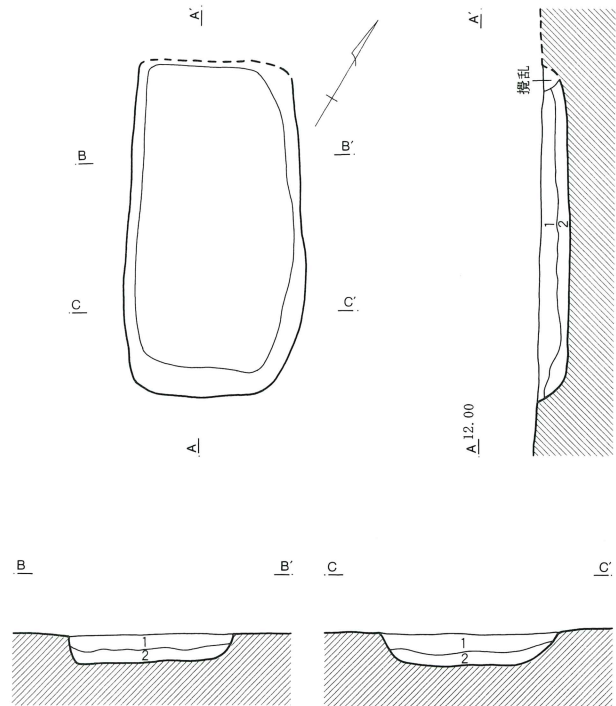
(1) 土壙

近世以降に属する土壙は、縄文時代後期の第28号土壙を除く28基が検出された。西側調査区に第16・17号土壙が分布するほかは、東側調査区から検出されている。東側調査区内における土壙の分布は、第1号溝周辺と調査区南西寄りの2箇所比較的集中したあり方を示していた。

平面形は円形を中心として、その他に楕円形、長方形、不整形等がある。断面形は浅い皿状のもの、壁が垂直に立ち上がる箱形のもの、2段に掘り込まれたものなどがみられた。いずれも少量の遺物しか伴っておらず、具体的な時期・性格等については不明であるが、ここでは一応近世以降の所産と捉えておきたい。

なお、各遺構図は第28・51~53図に示し、各土壙の

第50図 第8号方形周溝墓主体部



SR8主体部

- 1 暗黒褐色土 ローム粒子、黒色粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。

0 2m
1:50

規模等に関しては第6表にまとめて記した。

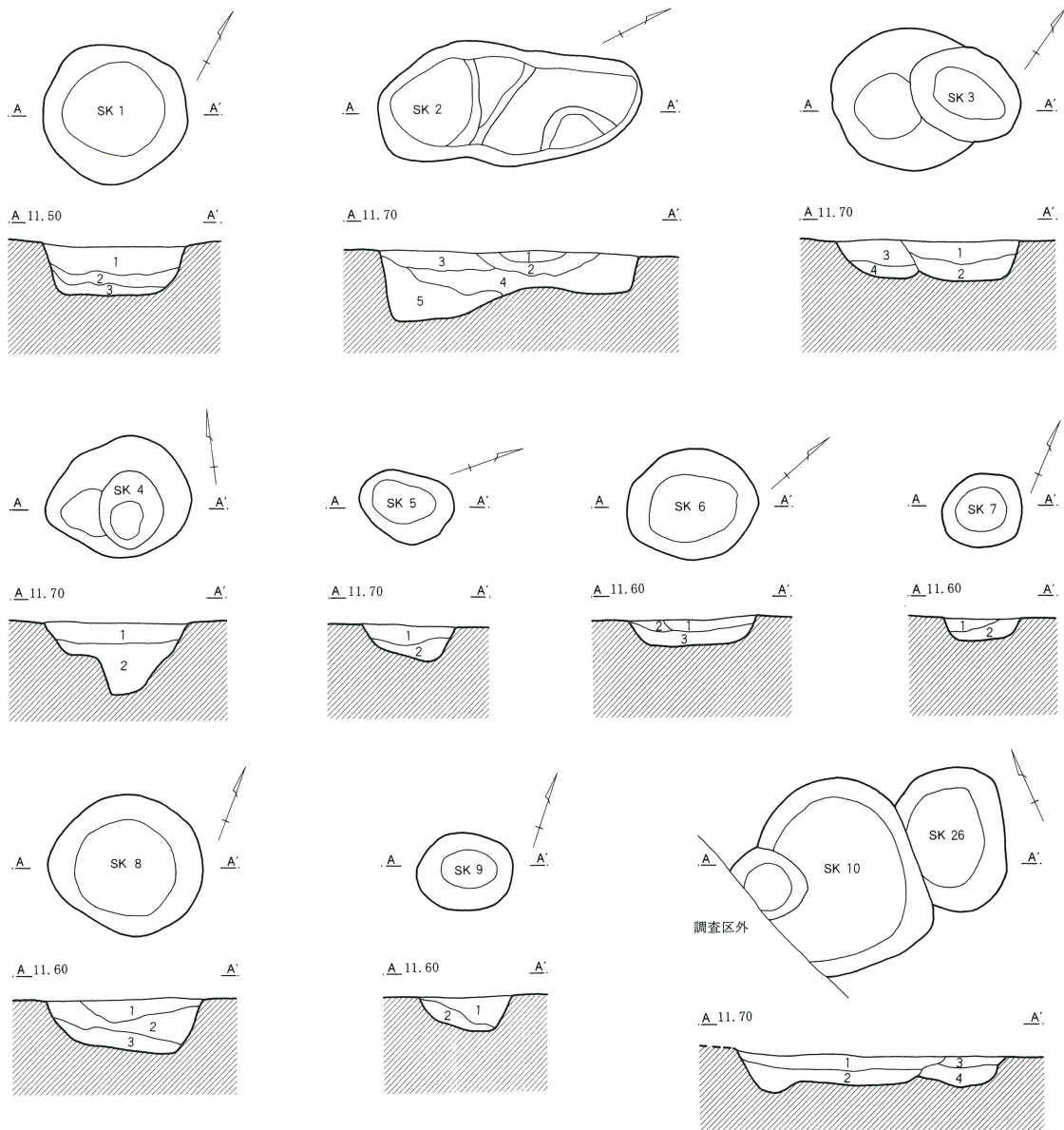
第1号土壙（第51図）

東側調査区北西のG-6・7グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径1.22m、短径1.2m、深さ0.4mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は3層に区分され、ロームブロックの混入が目立つ。遺物はかわらけの破片が出土した。

第2号土壙（第51図）

東側調査区北西のG-7グリッドに位置する。平面形は2基の土壙が重複したような不整形である。規模は長径2.26m、短径1.0m、深さ0.6mを測る。主軸方位はN-24°-Eを指す。底面は凹凸があり、壁はほ

第51図 土壌 (1)



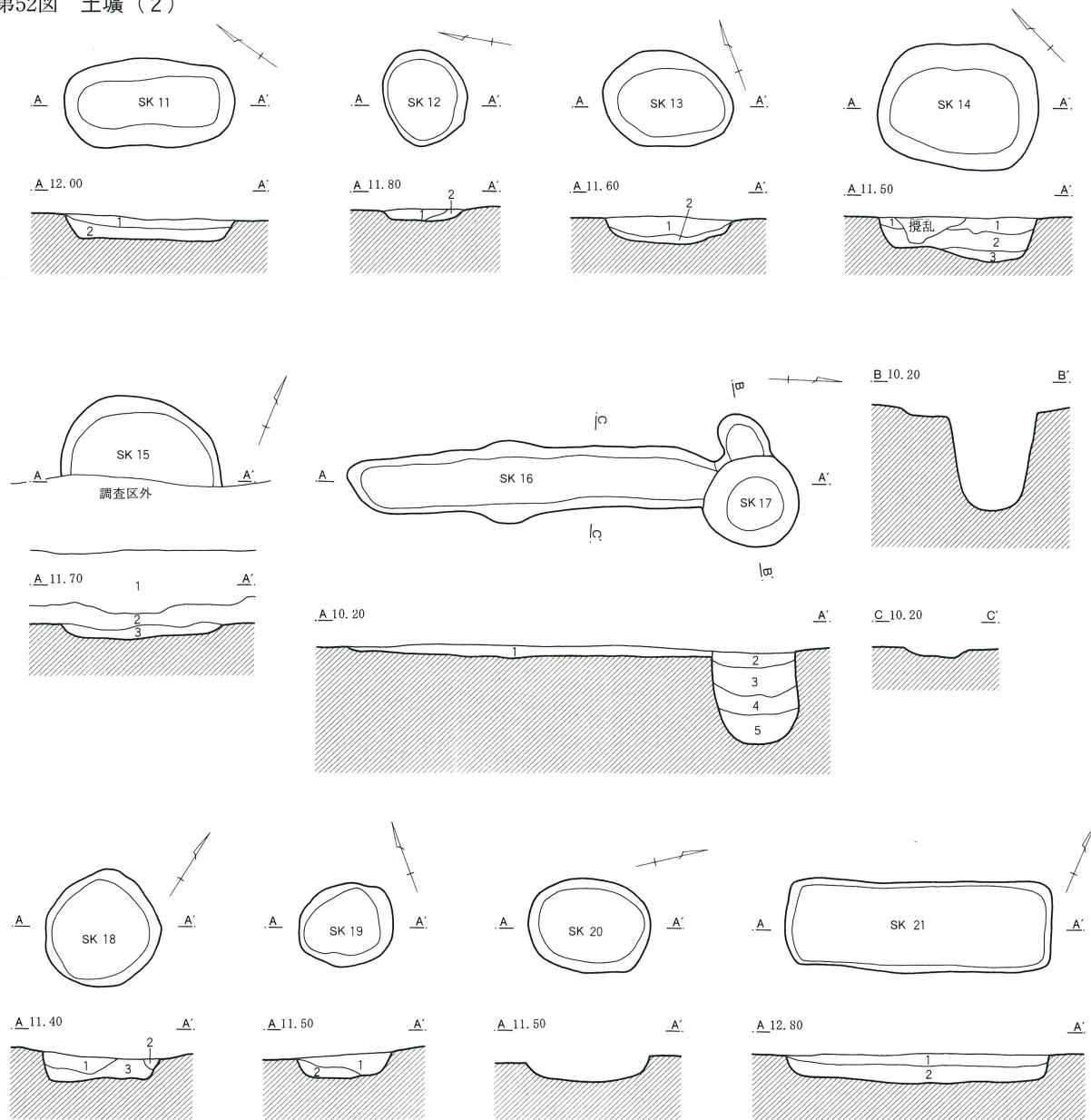
- SK 1
 1 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
 2 暗黒褐色土 ローム粒子多量含む。
 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- SK 2
 1 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
 2 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
 3 褐色土 炭化粒子少量含む。
 4 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 5 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- SK 3
 1 褐色土 ローム粒子多量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 3 暗褐色土 焼土粒子少量含む。
 4 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

- SK 4
 1 褐色土 ローム粒子少量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- SK 5
 1 褐色土 ローム粒子少量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- SK 6
 1 褐色土 ローム粒子多量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- SK 7
 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。

- SK 8
 1 褐色土 ロームブロック少量含む。
 2 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
 3 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- SK 9
 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 2 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- SK 10・26
 1 灰褐色土 ローム粒子少量含む。
 2 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
 3 褐色土 ローム粒子少量含む。
 4 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

0 2m 1:60

第52図 土壌 (2)



SK 11

- 1 暗褐色土 炭化粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量含む。

SK 12

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量含む。

SK 13

- 1 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。

SK 14

- 1 暗灰褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 3 褐色土 ローム粒子多量含む。

SK 15

- 1 表土
- 2 暗褐色土 焼土粒子少量含む。
- 3 明黄褐色土 ローム粒子多量含む。

SK 16・17

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 4 暗黒褐色土 ロームブロック少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

SK 18

- 1 暗灰褐色土 ロームブロック多量含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

SK 19

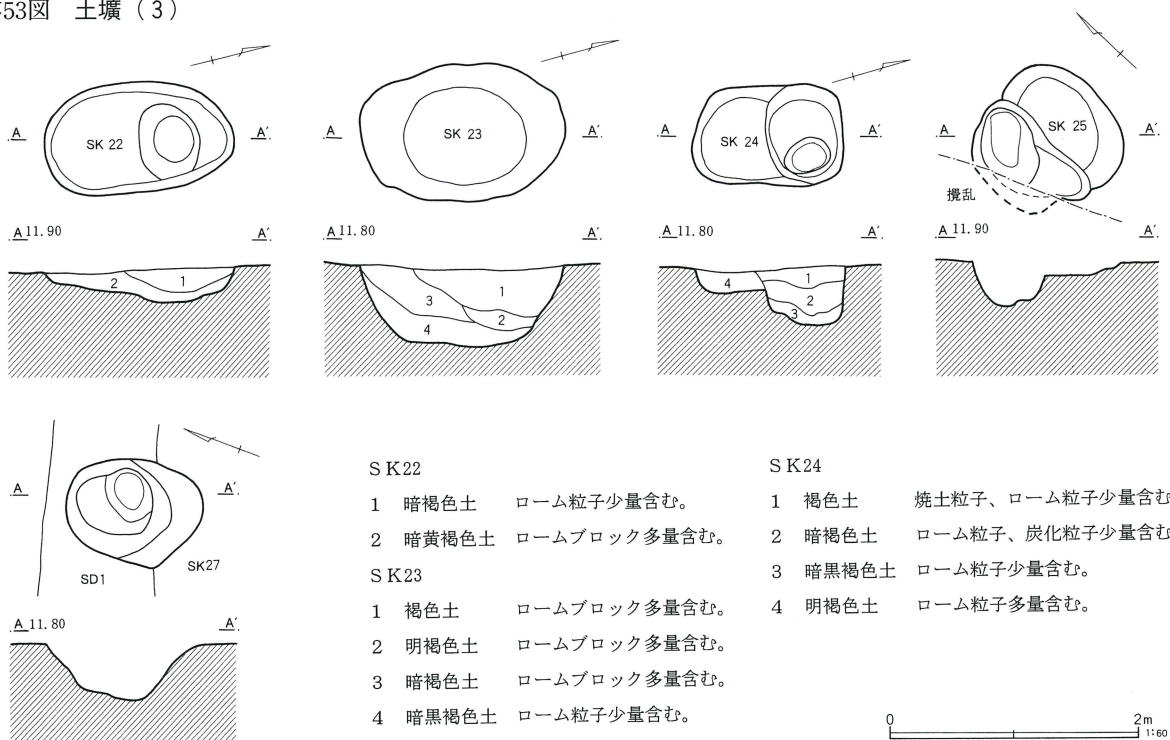
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

SK 21

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子少量含む。



第53図 土壙（3）



ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は上層に炭化粒子の混入がみられた。遺物は在地産土器、鉄滓が少量出土した。

第3号土壙（第51図）

東側調査区西寄りのH-8グリッドに位置する。平面形は2基の土壙が重複した不整形を呈する。規模は長径1.6m、短径1.2m、深さ0.34mを測る。主軸方位はN-46°-Eを指す。底面は凹凸があり、壁は急角度に立ち上がる。覆土は切り合い関係が認められ、本来は2基の土壙の重複であることが分かる。3層中に焼土粒子の混入が少量認められた。遺物は陶器、かわらけの破片が少量出土した。

第4号土壙（第51図）

東側調査区西寄りのH-8グリッドに位置し、第3号土壙の南側にあたる。平面形は2段に掘り込まれた不整形で、規模は長径1.24m、短径1.02m、深さ0.61mを測る。主軸方位はN-90°-Wを指す。壁は急角度に立ち上がる。覆土は自然堆積を示している。遺物の出土はない。

第5号土壙（第51図）

東側調査区西寄りのH-8グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.58m、深さ0.32mを測る。主軸方位はN-42°-Eを指す。掘り込みは浅く、底面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。遺物の出土はない。

第6号土壙（第51図）

東側調査区西寄りのH-8グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径1.1m、短径0.92mを測る。確認面からの深度は0.2mである。掘り込みは浅く、底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土はローム粒子を多量に含む。遺物の出土はない。

第7号土壙（第51図）

東側調査区西寄りのH-8グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径0.68m、短径0.62mの小規模なものである。確認面からの深度は0.18mを測る。掘り込みは浅く、底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は自然堆積である。遺物の出土はない。

第8号土壙（第51図）

東側調査区西寄りのH-8グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は長径1.32m、短径1.2m、深さ0.47mを測る。掘り込みは浅く、底面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土はロームブロックを多く含み、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物はかわらけの小片が出土しただけである。

第9号土壙（第51図）

東側調査区西寄りのH-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.82m、短径0.65mの小規模なものである。確認面からの深度は0.28mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。掘り込みは浅く、底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は自然堆積である。遺物の出土はない。

第10号土壙（第51図）

東側調査区西寄りのH-7グリッドに位置する。第26号土壙と重複し、西側は調査区域外に延びる。平面形はピットの重複した不整形円形を呈する。規模は長径1.77m、短径1.61m、深さ0.35mをそれぞれ測る。主軸方位はN-52°-Wを指す。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。覆土の観察から第26号土壙を切り込んで構築していることが判明した。遺物の出土はない。

第11号土壙（第52図）

東側調査区北東端のD・E-9グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長径1.5m、短径0.75mを測る。確認面からの深度は0.2mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。掘り込みは浅く、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は上層に炭化粒子を少量含み、壁面の一部は被熱により赤色化していた。遺物の出土はない。

第12号土壙（第52図）

東側調査区北寄りのE-9グリッドに位置する。平

面形は円形で、長径0.83m、短径0.71mの小規模なものである。確認面からの深度は0.12mを測る。掘り込みは浅く、底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は自然堆積を示す。遺物の出土はない。

第13号土壙（第52図）

東側調査区南西寄りのI-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.18m、短径0.85m、深さ0.24mである。主軸方位はN-56°-Wを指す。掘り込みは浅く、底面はやや凹凸があり、壁は急角度に立ち上がる。覆土はロームブロックを比較的多く含む。遺物の出土はない。

第14号土壙（第52図）

東側調査区南西寄りのJ-8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.42m、短径1.14m、深さ0.38mである。主軸方位はN-46°-Wを指す。底面はわずかに凹凸があり、断面箱形である。覆土はロームブロック・ローム粒子を比較的多く含む。遺物の出土はない。

第15号土壙（第52図）

東側調査区南西端のJ-9グリッドに位置する。南側が調査区域外にかかるため平面形については明確でない。おそらく径1.41mほどの円形と推定される。確認面からの深度は0.12mと浅く、底面は概ね平坦である。覆土は明黄褐色土の単一層である。遺物は縄文土器の破片が少量出土した。

第16号土壙（第52図）

西側調査区のG-4グリッドに位置し、第17号土壙と重複する。平面形は南北に細長い不整形で、規模は長径3.5m、短径0.74mを測る。主軸方位はN-2°-Wを指す。確認面からの深度は0.1mと浅く、底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。覆土の観察から第17号土壙に切られていることが判明した。遺物の出土はない。

第17号土壙（第52図）

西側調査区のG-4グリッドに位置し、第16号土壙を切っている。平面形は西側に張り出し部状の浅い掘り込みをもつ不整形円で、規模は長径1.2m、短径0.86mを測る。確認面からの深度は0.8mと他に比べて深く掘削されており、断面形も素掘りの井戸に近い。主軸方位はN-71°-Eを指す。

遺物は在地産の捏鉢と砥石が、覆土下層の5層中から出土した（第54図1・2）。

第18号土壙（第52図）

東側調査区中央部のF-9グリッドに位置する。第1号方形周溝墓の東溝に掘り込まれたもので、平面形は円形である。規模は長径1.04m、短径1.03m、深さ0.26mを測る。底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土の状態は方形周溝墓とは異なり、近世に属する遺構の覆土に近似している。遺物の出土はない。

第19号土壙（第52図）

東側調査区中央部のF-9グリッドに位置する。第1号方形周溝墓東溝の陸橋部寄りに構築されており、溝中土壙の可能性も考えられたが、覆土は他の近世の遺構と同一であることから、近世のものと判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.84m、短径0.72m、深さは0.2mである。主軸方位はN-103°-Eを指す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は自然堆積である。遺物の出土はない。

第20号土壙（第52図）

東側調査区中央部のF・G-9グリッドに位置する。第1号方形周溝墓南溝の陸橋部寄りに掘り込まれており、溝中土壙の可能性も考えられたが、覆土は他の近世の遺構と共通していることから、近世のものと判断した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.82m、深さは0.23mである。主軸方位はN-13°-Eを指す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は砥石が1点出土した（第54図3）。

第21号土壙（第52図）

東側調査区中央部F-9グリッドに位置し、第22・23号土壙と近接している。平面形は長方形を呈する。規模は長径2.35m、短径0.8m、深さ0.24mをそれぞれ測る。主軸方位はN-67°-Eを指す。底面は概ね平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積である。

遺物は覆土中から鉄滓の小塊が出土しているだけで時期を示すようなものはなかった。

第22号土壙（第53図）

東側調査区中央部F-9グリッドに位置し、第21・23号土壙と近接している。平面形は楕円形を呈する。規模は長径1.53m、短径0.87m、深さ0.26mをそれぞれ測る。主軸方位はN-14°-Eを指す。底面にはピット状の浅い掘り込みがある。覆土は2層にロームブロックを多量に含む。

遺物は素焼きの土玉が出土した（第54図4）。

第23号土壙（第53図）

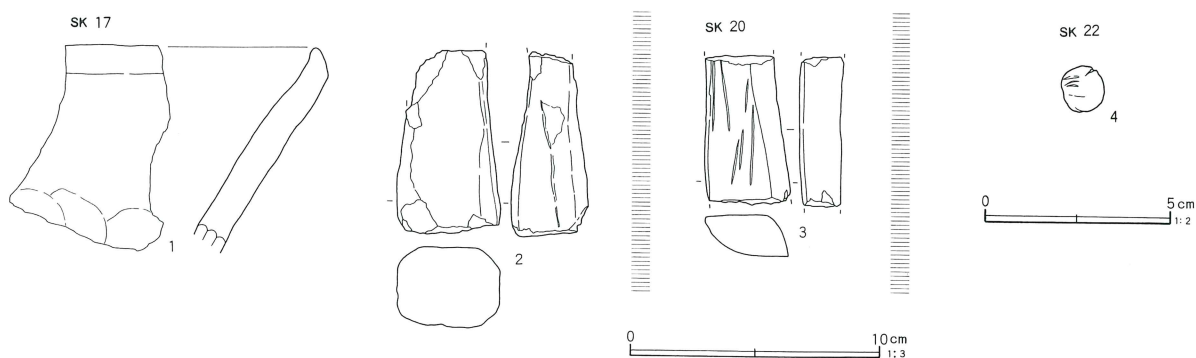
東側調査区中央部F-9グリッドに位置し、第21・22号土壙と近接している。平面形は楕円形を呈する。規模は長径1.65m、短径1.08mを測る。確認面からの深度は0.62mと深く掘り込まれ、断面形は鍋底状に近い。主軸方位はN-15°-Eを指す。覆土は4層に区分され、ロームブロックを多量に含み、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物の出土はない。

第24号土壙（第53図）

東側調査区北寄りのE-8グリッドに位置する。第1号方形周溝墓の東側に近接する。平面形は楕円形であるが、土層断面の観察によれば2基の土壙が重複したものと考えられる。規模は長径1.24m、短径0.82m、深さ0.48mである。主軸方位はN-15°-Eを指す。底面は階段状に掘り込まれ、壁は垂直に立ち上がる。覆土は切り合い関係を示し、上層に焼土粒子、炭化粒子等の混入がみられた。

遺物はまったく出土しなかった。

第54図 土壌出土遺物



第25号土壌（第53図）

東側調査区北寄りのE-9グリッドに位置する。平面形は不整円形で、2基の土壌の重複と考えられる。西側の一部は攪乱により壊されているが、規模は長径1.23m、短径1.15mを測る。確認面からの深度は0.35mである。主軸方位はN-43°-Wを指す。底面は2段に掘り込まれ、壁は急角度に立ち上がる。遺物の出土はない。

第26号土壌（第51図）

東側調査区西寄りのH-7・8グリッドに位置する。第10号土壌と一部重複し、切られている。平面形は楕円形で、規模は長径1.2m、短径0.91m、深さ0.25mである。主軸方位はN-18°-Eを指す。底面はやや凹凸があり、壁は急傾斜に立ち上がる。遺物の出土はない。

第27号土壌（第53図）

東側調査区北寄りのE-10グリッドに位置する。第1号溝と重複しており、新旧関係は調査時に確認できなかった。平面形は楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.8mを測る。確認面からの深度は0.45mである。主軸方位はN-14°-Wを指す。底面は鍋底状に掘り込まれ、壁は急角度に立ち上がる。

遺物はまったく出土しなかった。

第29号土壌（第28図）

東側調査区南西端のI-8グリッドに位置する。縄文後期の第28号土壌と重複し、壁面の一部を壊している。平面形は円形で、規模は長径0.8m、短径0.75mを測る。確認面からの深度は0.15mと浅い。底面は北側に向かって緩やかに傾斜している。遺物の出土はなかった。

土壌出土遺物（第54図）

1は在地産捏鉢の口縁部破片である。外面に指頭圧痕がみられ、内面は平滑である。胎土に石英、長石、角閃石、赤色粒子等を含む。色調は褐色、焼成はやや軟質である。第17号土壌出土。

2は砥石で、上端部を欠損する。各面とも良く研磨されている。遺存長7.3cm、幅4.2cm、厚さ3.1cm、重量127.3g。凝灰岩製。第17号土壌出土。

3は砥石である。両端部を欠損する。各面とも良く研磨されており、条線状の使用痕が残る。遺存長5.9cm、幅3.4cm、厚さ1.6cm、重量55.72g。凝灰岩製。第20号土壌出土。

4は素焼きの土玉である。胎土に白色粒子、赤色粒子を少量含む。焼成は良好で、色調は橙褐色。土鈴の鈴子と考えられる。径1.17×1.1cm、重量1.32g。第22号土壌出土。

第6表 土壌一覧表

番号	位置	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	挿図番号	備考
1	G-6・7	円形	1.22	1.20	0.40	-	第51図	かわらけ
2	G-7	不整形	2.26	1.00	0.60	N-24° - E	第51図	在地産土器 鉄滓
3	H-8	不整形	1.60	1.20	0.34	N-46° - E	第51図	2基重複 陶器 かわらけ
4	H-8	不整円形	1.24	1.02	0.61	N-90° - W	第51図	
5	H-8	楕円形	0.80	0.58	0.32	N-42° - E	第51図	
6	H-8	円形	1.10	0.92	0.20	-	第51図	
7	H-8	円形	0.68	0.62	0.18	-	第51図	
8	H-8	円形	1.32	1.20	0.47	-	第51図	かわらけ
9	H-8	楕円形	0.82	0.65	0.28	N-70° - E	第51図	
10	H-7	不整円形	1.77	1.61	0.35	N-52° - W	第51図	SK 26 と重複 一部調査区外
11	D-9	長方形	1.50	0.75	0.20	N-37° - W	第52図	
12	E-9	円形	0.83	0.71	0.12	-	第52図	
13	I-8	楕円形	1.18	0.85	0.24	N-56° - W	第52図	
14	J-8	楕円形	1.42	1.14	0.38	N-46° - W	第52図	
15	J-9	円形?	1.41	-	0.12	-	第52図	一部調査区外 縄文土器
16	G-4	不整形	3.50	0.74	0.10	N-2° - W	第52図	SK 17 と重複
17	G-4	不整円形	1.20	0.86	0.80	N-71° - E	第52図	SK 16 と重複 井戸? 捏鉢・砥石
18	F-9	円形	1.04	1.03	0.26	-	第52図	SR 1 周溝内
19	F-9	楕円形	0.84	0.72	0.20	N-103° - E	第52図	SR 1 周溝内
20	F・G-9	楕円形	1.10	0.82	0.23	N-13° - E	第52図	SR 1 周溝内 砥石
21	F-9	長方形	2.35	0.80	0.24	N-67° - E	第52図	鉄滓
22	F-9	楕円形	1.53	0.87	0.26	N-14° - E	第53図	土玉
23	F-9	楕円形	1.65	1.08	0.62	N-15° - E	第53図	
24	E-8	楕円形	1.24	0.82	0.48	N-15° - E	第53図	2基重複
25	E-9	不整円形	1.23	1.15	0.35	N-43° - W	第53図	2基重複
26	H-7・8	楕円形	1.20	0.91	0.25	N-18° - E	第51図	SK 10 と重複
27	E-10	楕円形	1.10	0.80	0.45	N-14° - W	第53図	SD 1 と重複
28	I-8・9	円形	4.05	(3.72)	0.26	N-35° - W	第28図	縄文後期 SK 29 と重複
29	I-8	円形	0.80	0.75	0.15	-	第28図	SK 28 と重複

(2) 溝

溝は、東側調査区の北寄りを東西方向に横断する第1号溝と、第1号方形周溝墓と第2号方形周溝墓の周溝の間を連結した第2号溝の2条が検出された。第2号溝については方形周溝墓との関連性が認められるため、概要については前述したので、ここでは第1号溝について概要を説明する。

第1号溝 (第55図)

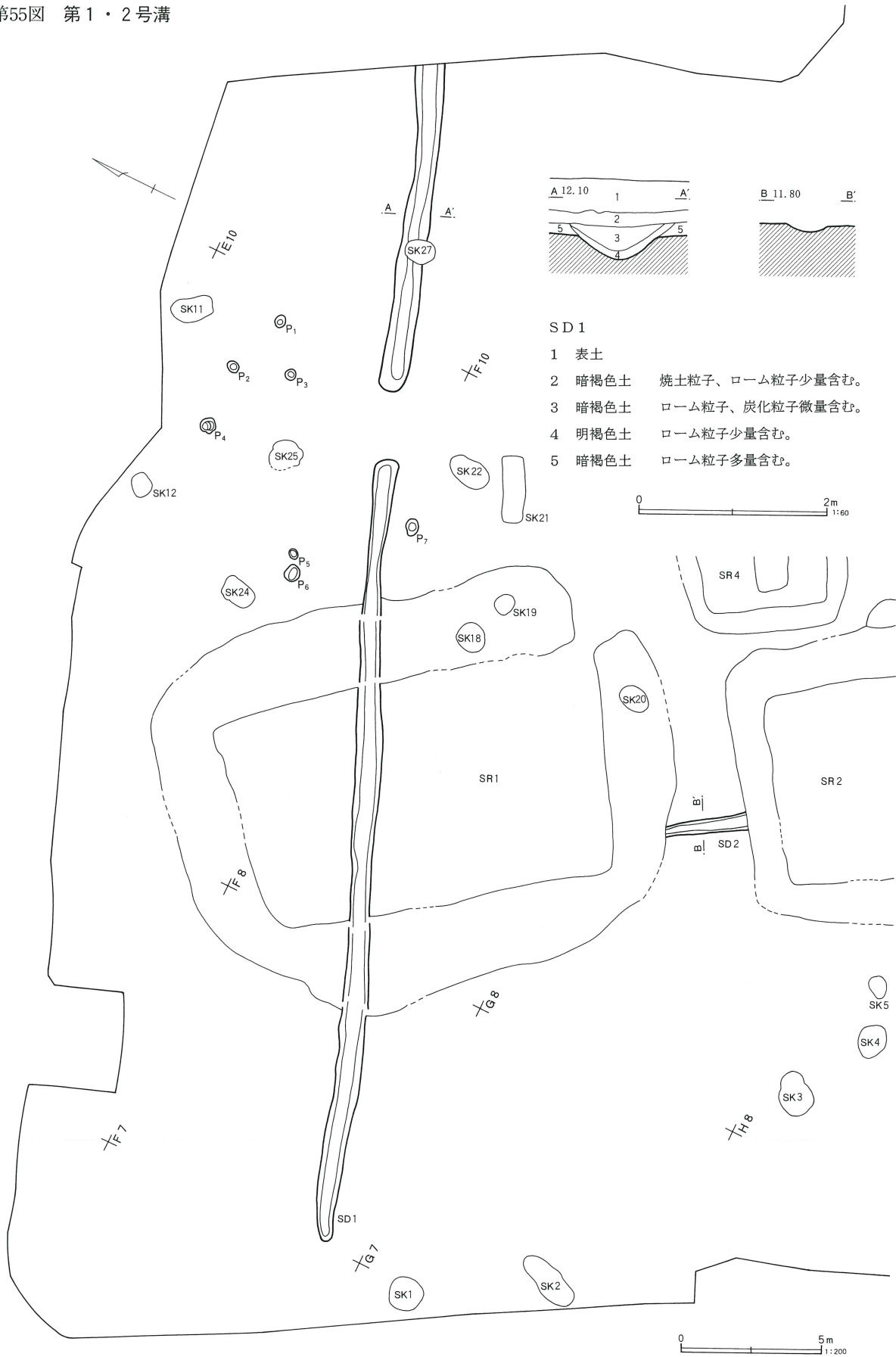
東側調査区北寄りのF-7~9、E-9・10グリッドにかけて位置する。東西方向に走り、東端は調査区域外に延びている。E-9グリッドで幅2.4mほどの

間が土橋状に途切れ、第1号方形周溝墓を横断しながら西方に延び、西端は掘り込みが浅くなり、消滅してしまう。規模は幅0.85m、深さ0.25mを測り、断面形は浅いV字形を呈する。覆土は暗褐色土及び明褐色土が堆積し、上層に炭化粒子の混入がみられた。

性格については水利に関連したものと考えられるよりも区画溝としての可能性が大きい。また、後述するように周辺には土壌やピットが比較的集中しており、有機的な関連が想定される。

遺物はまったく出土しておらず、掘削の時期を限定することはできないが、覆土の状態などから近世以降の所産と捉えられる。

第55図 第1・2号溝



(3) ピット

東側調査区の北寄り走る第1号溝周辺のE-9グリッドを中心に単独ピットが7基検出された。

第1号溝を境に北側にP1～P6、南側にP7が分布している。このうちP1～P4は、第1号溝の土橋部分北側の比較的狭い範囲にまとまった状態で検出されたが、配置等に規則性を看取することはできなかった。ピットの平面形は、円形ないし不整形円で、直径

33～66cmの小規模なものが多く、深度も15～28cmと全体に浅い。

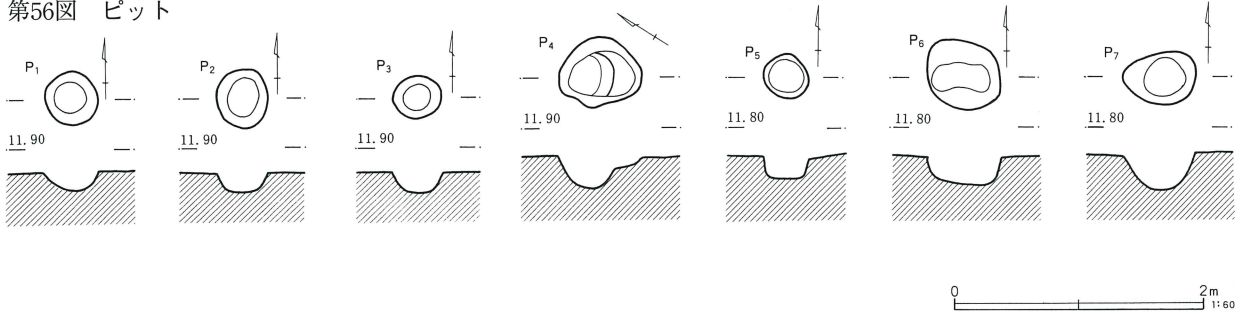
覆土の特徴は、a・bの2種類に区分される。

a：暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

b：黒褐色土 ローム粒子少量含む。

なお、覆土の観察では柱痕等は確認できず、いずれも単一層を示していた。

第56図 ピット



第7表 ピット一覧表

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	覆土
1	E-9	43	40	20	a
2	E-9	46	40	15	a
3	E-9	39	34	17	a
4	E-9	66	54	26	b
5	E-9	35	33	16	a
6	E-9	64	53	21	a
7	F-9	57	42	28	a